

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

紀要 2002



2004年2月
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



【高 程】彌生中期後半／次郎
木製の小形の立人像。手
筋合併時代～晩期時代
〔高さ約15cm〕
青森県大館市出土
昭和初期
写真：佐藤伸一

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2002

2004年2月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

2002（平成14）年度には、津島地区の創立五十周年記念館、自然科学系総合研究棟、農学部共同溝、鹿田地区の総合教育研究棟のそれぞれ建設地において発掘調査を実施しました。おおむね年度を通じて発掘調査がつづき、2つの現場が重なる場合もあったのですが、事故なく発掘作業を遂行できたことはまことに幸いでした。

創立五十周年記念館建設地においては、弥生時代前期の水田遺構や中世の条里制にかかる遺構等が発見されたほか、縄文時代後期に属するやや規模の大きい焼け土遺構を確認することができました。津島地区の縄文時代遺跡については、旧河道の岸辺に設けられた堅果類貯蔵穴の調査などで多くの資料が蓄積され、全国的にも注目をあびています。しかし、西日本の一般的な傾向とはいえ、ドングリ類を食べたはずの人間の集落のあり方がまだ十分に明らかにされていないのが現状です。今回発見の焼け土遺構は、たんなる焚き火跡というよりも少し複雑な構造物に関係したものようですが、こうした調査により岡山平野の縄文文化がいっそう明らかになることが期待されるところです。

鹿田地区的総合教育研究棟建設地では、弥生時代以降の多くの文化層を調査しましたが、とりわけ弥生時代末期から古墳時代初頭に属する土器を多量に発見した「土器溜まり」の調査は、食生活ばかりでなく当時の祭祀や生業にかかる内容も判明し、重要な意義がありました。

充実した調査がつづいた反面、調査成果の整理や報告書作成の作業にはどうしても影響がでざるをえないのですが、さいわい本年度は、現場の繁忙にかかわらず2冊の調査報告書を刊行することができました。また「キャンパス発掘成果展」では、見学者が土器の接合をおこなったり模造石器でさまざまな作業を体験できるように工夫し、とくに小・中学生や親子連れの参加者から好評を得ました。

発掘調査の多さや報告書の刊行で多忙な年度ではありました、事務局および関係部局からは常にご理解とご支援をいただくことができました。また本紀要には、小西猛朗・元九州大学教授から鹿田遺跡出土の炭化穀粒に関してご寄稿をいただきました。関係各位にあらためて厚く御礼もうしあげる次第です。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長
稻 田 孝 司

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002

目 次

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

| | |
|-----------------------------|----------|
| 第1節 発掘調査の概要 | 1 |
| 1. 津島岡大遺跡第27次調査（創立五十周年記念館） | （高田浩司） 1 |
| 2. 津島岡大遺跡第28次調査（自然科学系総合研究棟） | （忽那敬三） 4 |
| 3. 津島岡大遺跡第29次調査（農学部共同講） | （光本 順） 7 |
| 第2節 試掘・確認調査の概要 | 11 |
| 事務局旧本部棟移転に伴う試掘・確認調査 | （光本） 11 |
| 第3節 立会調査の概要 | 13 |
| 事務局本部棟・創立五十周年記念館新館に伴う立会調査 | （忽那） 18 |

第2章 鹿田遺跡の調査研究

| | |
|--------------------------------|-------------------|
| 第1節 発掘調査の概要 | 26 |
| 鹿田遺跡第13次調査（総合教育研究棟） | （光本） 26 |
| 第2節 立会調査の概要 | 29 |
| エヌルギーセンター棟周辺外構工事に伴う立会調査 | （野崎貴博） 29 |
| 第3節 鹿田遺跡の研究 | 32 |
| 1. 鹿田遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭の集落について | （光本） 32 |
| 2. 鹿田遺跡第5次調査土壙15から出土した炭化殼粒について | （元九州大学教授 小西猛朗） 35 |

第3章 調査資料の整理・研究と展示・公開

| | |
|---|----------------------------|
| 第1節 調査資料の整理・研究 | 47 |
| 1. 調査資料の整理・分析 | 47 |
| (1) 出土遺物のレントゲン撮影について | （岩崎志保） 47 |
| (2) 今年度の調査資料の整理 | （岩崎） 49 |
| 2. 出土資料の保存処理 | 50 |
| (1) 岡山大学における保存処理後遺物の現状と課題 | （鹿児島大学文化財研究所 藤田浩明・伊藤健司） 50 |
| (2) 今年度の保存処理 A. 保存処理後遺物の管理状況の改善について | （忽那） 54 |
| B. 今年度の保存処理作業 | （忽那） 55 |
| 第2節 調査成果の展示・公開 | 55 |
| 第3節 2002年度調査研究員の個別研究活動 | 57 |
| 1. 科学研究費採択状況 2. 論文・資料報告 3. 研究発表等 4. 資料収集・実態調査 | 57 |

第4章 2002年度における調査・研究活動のまとめ

| |
|---------|
| （光本） 58 |
|---------|

付 編

| | |
|--------------------------------|---------|
| 日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について | （光本） 59 |
| 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項 | 60 |
| 1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程 | 60 |
| 2. 2002年度埋蔵文化財調査研究センター組織 | 62 |
| 3. 2002年度審議・決定事項 | 63 |
| 4. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項 | 63 |

付 表

| |
|----|
| 65 |
|----|

挿 図 目 次

| | | | |
|-------------------------------------|----|-----------------------------------|----|
| 図1 第27次調査地点位置図 | 1 | 図25 第3地点出土遺物(3)〈石器〉 | 22 |
| 図2 第27次調査土層断面図 | 2 | 図26 第13次調査地点位置図 | 26 |
| 図3 第27次調査遺構全体図 | 2 | 図27 第13次調査土層断面図 | 27 |
| 図4 第28次調査地点位置図 | 4 | 図28 第13次調査遺構全体図 | 27 |
| 図5 第28次調査土層断面図 | 5 | 図29 第12次調査地点で検出した中世の遺構との 位置関係 | 30 |
| 図6 第28次調査遺構全体図 | 6 | 図30 44ライン以西の遺構詳細図 | 31 |
| 図7 第29次調査地点位置図 | 7 | 図31 P1平・断面図 | 31 |
| 図8 第29次調査南壁土層断面図 | 9 | 図32 P2平・断面図 | 31 |
| 図9 第29次調査統合遺構全体図 | 10 | 図33 基本土層・P3断面図 | 31 |
| 図10 溝1～3、ピット1 | 10 | 図34 井手平・断面図 | 31 |
| 図11 溝1～3 | 10 | 図35 鹿川遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭 の遺構全体図 | 33 |
| 図12 溝2 | 10 | 図36 試料別に示した米の粒長の変異 | 37 |
| 図13 ピット1 | 10 | 図37 試料別に示した米の粒形指數の変異 | 38 |
| 図14 包含層山土遺物 | 11 | 図38 弥生時代～江戸時代の炭化米の粒長と粒幅 の関係 | 39 |
| 図15 武州・確認調査地点位置図 | 12 | 図39 試料別に示した大麦の粒長の変異 | 39 |
| 図16 武州・確認調査東端土層断面図 | 12 | 図40 試料別に示した大麦の粒幅の変異 | 41 |
| 図17 津島地区全体図 | 13 | 図41 弥生前期～中期の炭化大麦の粒長と粒幅の関係 | 42 |
| 図18 今年度の調査地点(1)津島地区 | 15 | 図42 2002年7月の湿度変化 | 34 |
| 図19 今年度の調査地点(2)鹿田地区 | 17 | 図43 展示会のポスター | 36 |
| 図20 事務局本部傳・創立五十周年記念館新蔵に 併う立会調査地点 | 18 | 図44 日別入場者数 | 36 |
| 図21 上層柱状図 | 19 | 図45 入場者の男女別割合 | 56 |
| 図22-1 上層柱状図位置及び検出遺構平面図 | 20 | 図46 2001年度までの調査地点(1) 津島地区 | 75 |
| - 2 第1地点出土遺構平面図 | 20 | 図47 2001年度までの調査地点(2) 鹿田地区 | 77 |
| - 3 溝2～5遺構断面図 | 20 | 図48 1998年度までの調査地点 三朝地区 | 78 |
| 図23 第3地点出土遺物(1)〈土器〉 | 21 | | |
| 図24 第3地点出土遺物(2)〈土器〉 | 22 | | |

写 真 目 次

| | | | |
|---------------------------------------|----|----------------------|----|
| 写真1 6層出土瑪瑙製勾玉 | 6 | 写真12 棒火矢のレントゲン写真(側面) | 47 |
| 写真2 溝1・2プラン | 9 | 写真13 銅片の現状 | 48 |
| 写真3 溝2セクション | 10 | 写真14 銅片のレントゲン写真 | 48 |
| 写真4 溝3セクション | 10 | 写真15 鉄製鉤縫の現状 | 48 |
| 写真5 石器 | 11 | 写真16 鉄製鉤縫のレントゲン写真 | 48 |
| 写真6 溝5底面検出状況 | 20 | 写真17 収蔵状況 | 50 |
| 写真7 2002年度事務局・創立五十周年記念館開 設式会調査出土遺物 | 23 | 写真18 復元部の白色粉体 | 51 |
| 写真8 鹿田遺跡第5次調査土層15で出土した炭化物 | 35 | 写真19 落串収蔵状況 | 51 |
| 写真9 鹿田遺跡第5次調査土層15で出土した炭 化穀粒 | 45 | 写真20 収蔵室 | 51 |
| 写真10 棒火矢の現状 | 47 | 写真21 小展示室 | 51 |
| 写真11 棒火矢のレントゲン写真(正面) | 47 | 写真22 裳ふ状況 | 52 |
| | | 写真23 アンペラ貝ふ状況 | 52 |
| | | 写真24 処置後の状況 | 54 |

表 目 次

| | | |
|-----|------------------------------|----|
| 表1 | 2002年度調査一覧 | 14 |
| 表2 | 鹿田遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭 の遺構・質 | 33 |
| 表3 | 炭化穀粒と火薙との割合 | 36 |
| 表4 | 出土した炭化米および玄米の粒長の比較 | 36 |
| 表5 | 出土した炭化米および玄米の粒幅の比較 | 37 |
| 表6 | 出土した炭化米および玄米の粒形指数の比 較 | 38 |
| 表7 | 出土した炭化大麦粒の皮膜と裸麦の割合 | 39 |
| 表8 | 出土した炭化大麦および玄麦の粒長の比較 | 40 |
| 表9 | 出土した炭化大麦および玄麦の粒幅の比較 | 40 |
| 表10 | 出土した炭化大麦および玄麦の粒形指数の 比較 | 41 |
| 表11 | 図41に示した炭化大麦出土遺跡一覧 | 42 |
| 表12 | 2002年度室内作業一覧 | 49 |
| 表13 | 第5・6期木器保存処理工程 | 55 |
| 表14 | 2001年度以前の木器保存処理工程 | 55 |
| 表15 | 新旧構内座標の対照 | 59 |
| 付表1 | 1982年度以前の構内主要調査(1980~1982年度) | 65 |
| 付表2 | 2001年度以前の構内主要調査(1983~2001年度) | 65 |
| 付表3 | 埋蔵文化財調査研究センター収藏遺物概要 | 71 |
| 付表4 | 埋蔵文化財調査室刊行物 | 73 |
| 付表5 | 埋蔵文化財調査研究センター刊行物 | 73 |

例 言

- 本紀要は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において2002年4月1日から2002年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果、及びセンターの活動についてまとめたものである。
- 紀要の作成に際して、炭化穀粒に関して小西誠郎氏（元九州大学教授）、出土資料の保存処理に関して添田浩明氏、伊藤建吾氏（財団法人元興寺文化財研究所）からご協力をいただいた。
- 本文は岩崎守佑・急那政江・高田達司・野崎貴介・光本順が分担執筆し、執筆者名を末尾に記した。
- 編集は、福井専門センター長と山本浩世調査研究室長の指導のもとに、光本順が担当した。

凡 例

- 大学構内の歴史文化財の調査に関する限りは、平成14年（2002年）4月1日より施行された「滋賀法及び水路兼用法」の一部を改訂する法律に基づき、界隈測量系を採用し、新たに構内座標を次のように定めている。なお、從来の日本測量系に基づく構内座標に新規の構内座標との関係については、付録〔59頁〕において述べている。
- 津島丸地区は、四工座場第V座標系（X= -144, 156, 4617m, Y = 37, 246, 7496m）を原点とし、東北を基準とした構内座標を設定した。一辺50mの方形区画である。また同地区では調査の便宜上、大きく津島丸地区と同地区に二分している。（図17）。
- 鹿田地区は、四工座場第V座標系（X= -149, 456, 3718m, Y = -37, 646, 7700m）を原点とし、東南をN=15°-Eに沿ったものを基準とした構内座標を設定した。地区割は一辺5mの方形を基準としている。
- 本文中で用いる方位は、津島地区・朝日地区は国土座標系の座標北を、他の地区は経緯北を用いている。
- 岡山大学構内の道路の名称は、周囲の遺跡の場合はそのまま路名とする。正門地区の発掘調査地点は小字名をとり「発掘遺跡」と呼称する。
- 本文中で用いる方位は、津島地区・朝日地区は国土座標系の座標北を、他の地区は経緯北を用いている。
- 「発掘調査」に分類したものについては、各調査毎に調査類に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」「会員調査」に分類したものについては、任意の名称で呼称する。発掘調査のうち、小規模で、確認調査から連続して調査したものは、「試掘・確認調査」に分類する。
- 「発掘調査」についての記述は、「第1章第1節3. 津島両大遺跡第29次調査」を除き、現調査における概要であり、説明は正式報告によっていただきたい。「津島両大遺跡第29次調査」については、本紀要での記述を正式報告にかえる。
- 表に記載した所調部は、原則として各学部の頭文字を略号として用いている。
- 付表2に掲載する調査一覧については、中世層まで削除したものを対象とし、その他のものは除外した。未掲載のデータについては、当センターにおいて管理している。
- 本文・目次・挿図・写真などで使用の調査番号は表と一致する。
- 本紀要に掲載の地図（図17）は、岡山市城郭を複数したものである。

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

1. 津島岡大遺跡第27次調査（創立五十周年記念館 津島南 BB14・15、BC14・15区）

a. 調査の成果

本調査では近世の土坑、中世の土坑、溝、畔、弥生時代後期から古墳時代前期の溝、弥生時代前期の水田畔、土坑、縄文時代後期の炉、土坑を検出した。これらの内、中世から近世については、昨年度の紀要において報告済みであるので、今回は縄文時代から古墳時代を中心と報告する。

検出した遺構の内、弥生時代前期の畔は新旧の2面を検出した。両者は大きさや形態などの点で違いがみられ、稻作の導入過程を考える上で貴重な資料であると思われる。縄文時代の炉は3基検出したが、その内2基は径が3.5m以上ある大型の楕円形の窓を伴う特異な構造であった。中からは大量の焼土も出土しており、通常の炉とは性格が異なると考えられる。遺物は、縄文時代中期（里木2式）の深鉢や、虫をかたどったと思われる弥生時代の上製品などの希少な遺物が出土した。

なお、本調査については、すでに「津島岡大遺跡13」において止報告を行っているため、詳細についてはそれを参照されたい。

調査期間：2002年1月17日～6月24日 調査面積：1648m²

調査体制：高田浩司（主任）、山本悦世、岩崎志保、野崎貴博

主な遺構・遺物：近世の土坑3基、中世の土坑1基、溝3条、条里

関連の大畔、弥生時代後期から古墳時代前半期の溝8

条、弥生時代前期の水田畔2面、縄文時代後期の炉3

基、土坑3基、縄文時代中期～後期の土器、石器、突岱文

土器、弥生時代の上製品

b. 調査の経過

昨年度からの継続で調査を行い、古墳時代前期～弥生時代後期に属する遺構の調査を4月中旬に終えた。その後、弥生時代前期の水田面を検出し、4月末には縄文時代の遺構面まで掘り下げを行い、がの調査などを行った。また、最終的な遺構・遺物の有無の確認を行うために、縄文時代後期の遺構面からさらに掘り下げを行ったところ、縄文時代中期の土器片やサスカイト製の石器が出土した。6月24日にすべての作業を終え、調査を終了した。

本調査は、域内遺跡における通常の調査と異なり、岡山大学創立五十周年記念事業後援会が本学構内において行う建設事業に伴うものであった。そこで、記念事業終了までに予算の執行を終える必要があったため、2003年5月に本調査の報告書を刊行した。



図1 第27次調査地点位置図
(縮尺1/4,000)

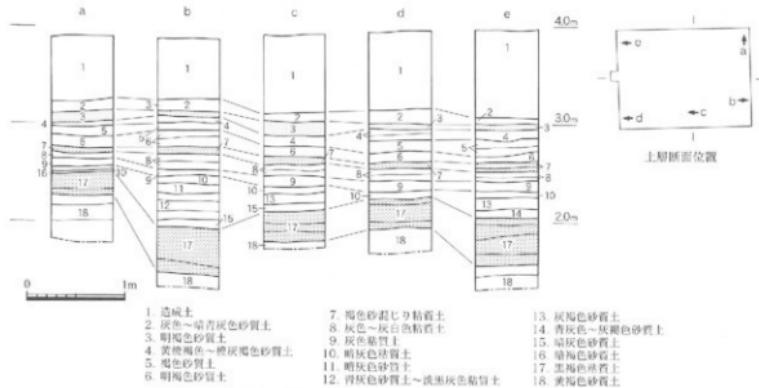


図2 第27次調査土層断面図 (縮尺1/50)

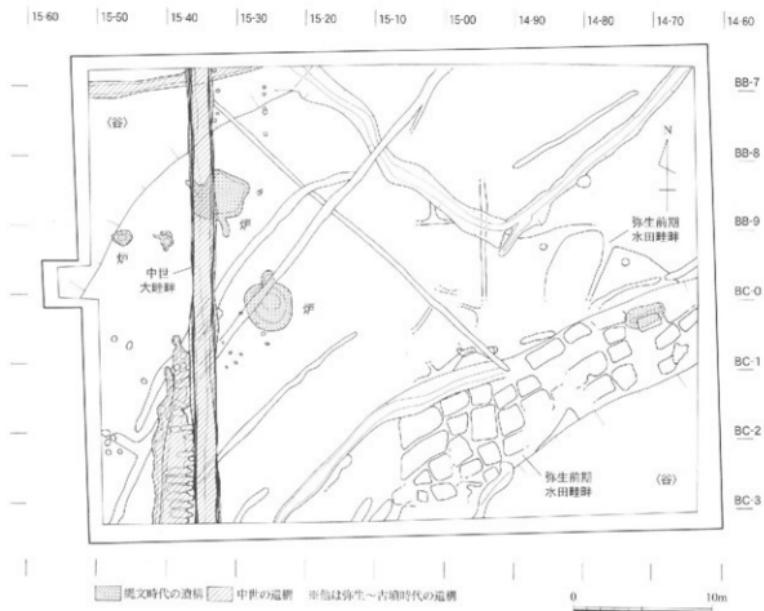


図3 第27次調査遺構全体図 (縮尺1/350)

c. 調査の概要

①層序

1層：旧日本陸軍による屯営地建設に伴う造成土。現地表面の標高は約3.9mである。2層：灰色から暗青灰色を呈する砂質土で、明治期の耕作土である。3層：明褐色砂質土で、近世の包含層である。4～6層：褐色～橙灰褐色土である。4～6層は砂質土で、7層は粘質土である。これらの層において、条里の坪境と思われる位置で大畦畔を南北方向に検出した。大畦畔は、少なくとも5回のつくり直しが行われていた。これらの層はいずれも中世に属する。8～9層：灰色～灰白色の粘質土で、調査区北西部分において8層上面で東西方向の溝を、9層上面においてピットを検出した。中世の包含層である。10層：暗灰色粘質土である。この層まではほぼ水平な堆積がみられるが、これより下層では調査区の南東と北西に谷が形成されるようになる。古墳時代後期の包含層である。11～15層：灰色を基調とする砂質土で、調査区南東と北西に形成された谷部のみに堆積する土層である。弥生時代前期から古墳時代に属する。16層：褐色の砂質土で全体にマンガンを多く含む。微高地東半の一部のみに堆積する土層である。出土遺物はなかったが、層位の関係から弥生時代前期に属すると考えられる。17層：津浦地区で「黒色土」と呼称されている鍵層で、上面が弥生時代前期に比定される。上面において調査区南東の谷部と微高地において水田畦畔を検出した。上面の標高は1.9～2.5mである。18層：黄褐色砂質土である。上面において縄文時代後期の炉や土坑などの遺構を検出した。また、上面から20～30cm下の層中から縄文時代中期の土器片、サヌカイト製の石器が出土した。

②地形

調査区の地形は、縄文から古墳時代までは調査区の南東と北西において、北東から南西方向にはほぼ平行してはしる2つの谷部が存在し、それらの間に幅20～25mほどの狭い微高地が形成されている。縄文時代後期の段階では、谷と微高地の比高差が南西の谷で約1.2m、北西の谷で約0.5mである。その後、谷の堆積が進み古墳時代後期にはほぼ埋没し、以後は平坦な地形となっている。

③遺構・遺物の概要

〈弥生時代後期～古墳時代前半期〉溝を微高地において8条検出した。その内、6条の溝は微高地がのびる方向に沿って、北東から南西にはしる。他の2条の内、1条は微高地を北西から南東方向に横断し、もう1条は微高地上でL字状に屈曲する。

〈弥生時代前期〉いわゆる「黒色土」の上面において、弥生時代前期に属する水田畦畔を2面検出した。古い段階の畦畔が微高地上につくられ、それを切って新しい段階の畦畔が調査区南東の谷の落ち際に沿ってつくられた。古段階の畦畔は1区画の面積が約5m²以上あり大きく、またいびつな形態をしていたのに対して、新段階の畦畔では2m²ほどと小形で、比較的整った形態を呈していた。

〈縄文時代〉縄文時代中期の土器片とサヌカイト製の石器が、縄文後期遺構の基盤層である18層中から出土した。また、縄文時代後期に属する遺構として、炉3基、土坑3基、ピット13基を検出した。この内2基の炉は、径が3.6～4.6mに及ぶ大型の土坑に径が1.0～1.3mの小型の土坑が取り付く特異な構造であった。実際に火を用いて炉として使用されたのは炭の出土状況などから小型の土坑部分であると思われるが、大型の土坑内からも非常によく焼けた焼土塊が多量に出土し、中には40cm以上あるものも含まれていた。(高田浩司)

2. 津島岡大遺跡第28次調査（自然科学系総合研究棟^①・共同溝 津島△W～AY06～08区北）

a. 調査の成果

本調査では、上層において現代の石組溝・近代から中世にわたる耕作痕を、黒色土壌上面で調査区のほぼ1/3の面積にわたる弥生時代前期の水田畦畔を検出した。また、住居の存在が期待された縄文時代後期の遺構は土坑・ピットのみであったが、多種にわたる石器類が出土したほか焼土が散見されたことから、本地点は居住城から離れた地点でも食料の加工等短期的な作業場である可能性が考えられる。今回の調査では弥生時代前期の水田畦畔及び縄文時代後期集落の広がりを押さえるという点で、津島岡大遺跡を評価する際の有用なデータを得ることができた。なお津島岡大遺跡では初の卡類となる瑪瑙製勾玉が、共同溝調査区の中凹～古代包含層から出土している。

調査期間：2002年4月15日～9月20日、2002年11月28日～2003年1月15日 調査面積：1798m²

調査担当：忽那敬三（主任）、山本悦巳、岩崎忠保、高田浩司、野崎貴博、橋田美香

主な遺構・遺物：現代の石組溝2・近代～近世の土坑1（野窓）・鋤痕多数・中凹～古代の戸2・溝

- 4・土坑2・弥生時代後期～中期の溝3・弥生時代前期の水田畦畔（約55枚）・縄文時代後期の土坑3・ピット約140、瑪瑙製勾玉、弥生時代後期～中期の板材・壺甕を主体とする土器、打製石包丁・突帯文土器、縄文時代後期の深鉢等土器、敲石・石皿・石器等石器類・焼土・炭化物

b. 調査の経過

調査の契機 2002年2月、工学部2号館東側の駐車場を中心とした区域に、総合研究棟の建設が計画された。第7次調査をはじめとする周辺の過去の調査等から遺構の存在が確実と考えられたため、調査員4名・期間約9.3ヶ月の予定で発掘調査を実施することになった。

本体調査区 2002年4月15日から表土掘削を開始し、4月24日より本調査に入った。近世・中世・古代の遺構の調査のうち、6月27日からは調査員及び作業員を増員し古墳時代以降の遺構を調査し9月20日に終了した。

共同溝調査区 11月28日より表土掘削を始め、近代・中世・弥生時代前期・縄文時代後期の各遺構面について2003年1月15日まで調査にあたった。

c. 調査の概要

①層序

- 1層：山陸軍による造成土である。現地表面は、標高4.35～4.83mである。
- 2層：近代（明治期）の耕作土で、標高は3.45m前後である。
- 3層：近世の耕作土である。筋痕が検出されている。
- 4層：中世の耕作土である。戸と溝、土坑が検出されている。
- 5層：中世～古墳時代後期の遺物を含む。中凹の造成によるとみられる。
- 6・7層：古墳～弥生時代の遺物を含む。本体調査区北半のみに堆積し、層位から古墳時代の層であると考えられる。
- 8層：弥生時代後期～中期の層で本体調査区北辺に浸がつくられる。
- 9層：弥生時代前期の層である。本体調査区北半のみに堆積する。共同溝調査区にも対応する層が存在する。
- 10層：弥生時代前期の土層で、11層上面につくられる畦畔を覆う。本体部分

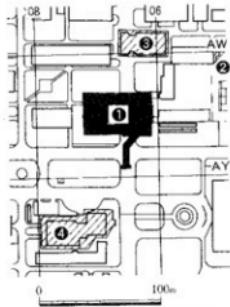


図4 第28次調査地点位置図
(縮尺1/4,000)

南端では、削平されている箇所がある。

11層：弥生時代前期と考えられる土層である。津島地区一帯に広がるいわゆる黒色土で、標高は1.95～2.83mを測る。上面に水田を形成し、遺物は空筒瓦・土器を若宮・玉手形。

12層：高所に広がる縄文時代後期の黄褐色土層である。遺物は、焼土・炭化物・土器・石器が遺構に伴わず土層上面に多くみられる。遺構はピットのほか、土塁がある。

13層：縄文時代後期の基盤層である。一部粗砂が入る他は炭化物や土器が少量混入するのみで遺構はみられない。

② 地形

縄文時代後期の段階では本体調査区南半が微高地となり、北へ落ちる斜面を形成する。高低差は0.9mと比較的緩やかであり、河道というよりは湿地のような状態であったと考えられる。一方、共同溝調査区は北から南へわずかに傾斜していることから、第5次調査地点（大学院自然科学研究科棟）の河道へ至るとみられる。弥生時代前期には黒色土である11層とそれを覆う10層が、弥生時代中～後期には8層が全面に薄く堆積したのち、古墳時代に一部6・7層が堆積する。縄文時代後期以来の落ちは6層段階まで残るが、中世に行われた造成の結果地形は平坦となり、5層以降2層まで水平堆積が続いている。

③遺構・遺物の概要

〈近現代～近世〉近現代・近世は南北方向の鎌痕のほか野臺とみられる土坑が1基存在し、水田と畠が営まれていたとみられる。共同溝調査区では、南北方向に平行してのびる昭和20年代の石細の溝が2条確認された。

（中世～古代）遺構は溝が主であるが、耕作域であったと考えられる。4層の中世面では、戸とそれに伴う溝3条と土坑2基がある。遺物は包含層中の小片のみである。5層では本体調査区中央で浅いピットを多数もち南北方向には溝1条を検出した。中世から古墳時代にかけての上器片や、瑪瑙製勾玉がみつかっている。

『古墳時代』本体調査区西半では6層から1条、7層から2条の浅い溝のみが検出されている。後世の耕作によって上面の造構は削平されており、中世同様耕作域として利用されていたようである。

《弥生時代後期～弥生時代中期》8段階では、本体調査区北辺に溝が2条つくられる。そのうち、東西に貫流する幅約5mの溝(S D11)から板材や甕・甌を主体とした土器類、サスカイト製の打製石包丁が出土している。堆積

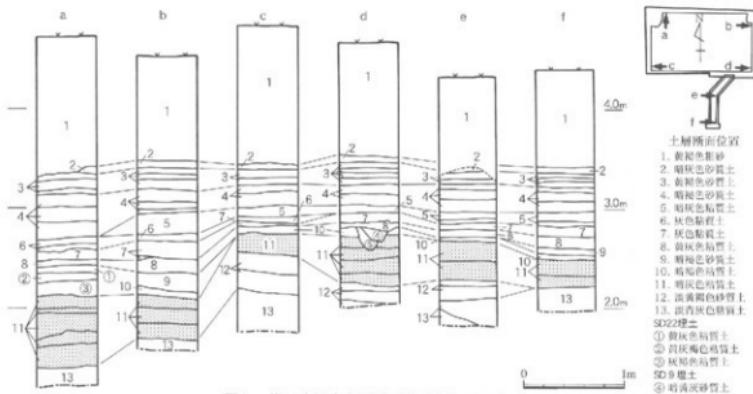


図5 第28次調査土層断面図（縮尺1/50）

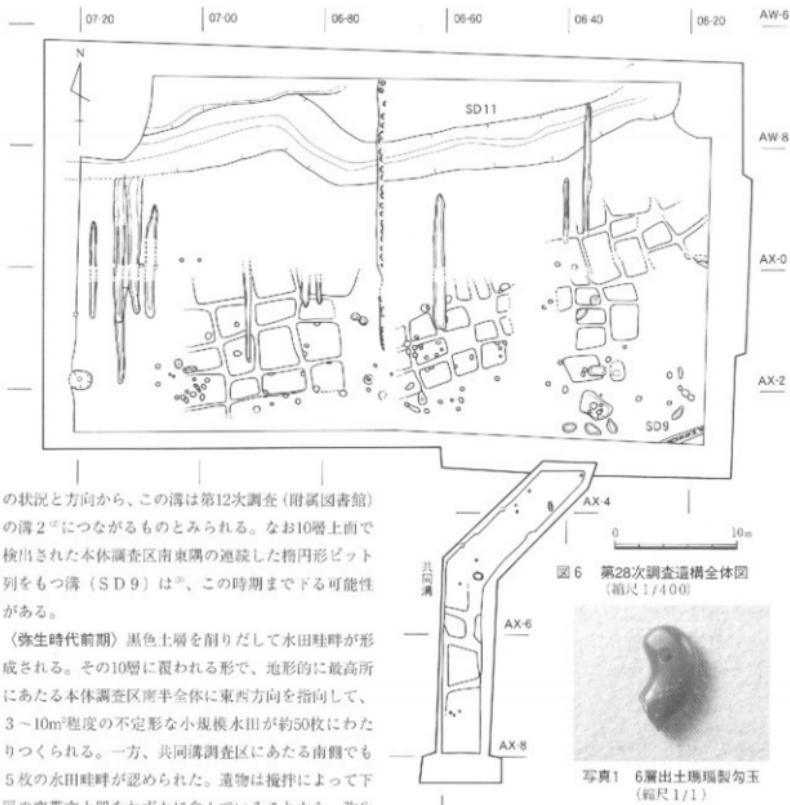


図6 第28次調査遺構全体図
(縮尺1/400)



写真1 6層出土瑪瑙製勾玉
(縮尺1/1)

の状況と方向から、この溝は第12次調査（附属図書館）の溝2^②につながるものとみられる。なお10層上面で検出された本体調査区南東隅の連続した楕円形ピット列をもつ溝（SD 9）は^③、この時期まで下る可能性がある。

〈弥生時代前期〉黒色土層を削りだして水田畦畔が形成される。その10層に覆われる形で、地形的に最高所にあたる本体調査区南半全体に東西方向を指向して、3～10m²程度の不定形な小規模水田が約50枚にわたりつくられる。一方、共同調査区にあたる南側でも5枚の水田畦畔が認められた。遺物は擾拌によって下層の突帯文土器をわずかに含んでいることから、弥生時代前期の前半と考えたい。石器はスクリイバー等のみで種類・量とも少ない。

〈織文時代後期〉土坑3基・ピット140基余・焼土・炭化物が散在しており、集落の縁辺部であったとみられる。ピットは2基に土器細片を含むほかは遺物がなく、焼土や炭化物を若干含むのみである。焼土も分布はまばらで、炉跡のような遺構は認められない。遺構は少ない一方で、土層上面からは深鉢・蓋石・石皿・石錘・打製石器など遺物が多く出土している。特に、石器の種類が多様である点は注目される。

（忽那敬三）

註

- (1) 正式名は未決定であるが、文化科学系総合研究室と区別するため、以下自然科学系総合研究室と仮称する。
- (2) 岩崎志保 2003「弥生時代中期～古墳時代前期の遺構・遺物」『津島同大遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第16号 pp. 195～225
- (3) この溝は、第16次調査（遺物実験棟新堂）の溝4（山本徳臣 1997「津島同大遺跡第16次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』14』pp. 6, 7) などと同様の構造である。

3. 津島岡大遺跡第29次調査（農学部共同溝 津島 BF16区）

a. 調査の経過

①調査に至る経緯

岡山大学農学部2号館の全面改修に伴い、新たに共同溝を設ける計画が立てられた。本調査地点の周辺において過去に発掘調査を行っているが、その結果、各地点の遺構密度はさほど高くはなかったものの、縄文時代から近代にかけての遺構を検出し、重要な知見を得ている。本調査地点も同様な状況が想定され、事務局施設部と協議し、発掘調査を実施することになった。

②調査の経過

2002年9月12日に重機による造成上の掘削を行った。重機では、土層観察用の土手を残しながら、近代の耕作土まで除去した。発掘調査は、9月18日に近世に属する層の調査から開始し、調査員1名があつた。9月25日に弥生時代から古墳時代の土層面で検出した溝群の調査を始め、10月3日にすべての作業を終了した。

調査地点：岡山市津島中1丁目1番1号（岡山大学津島地区）

調査期間：2002年9月18日～10月3日

調査体制：調査主体 河野 伊一郎（岡山大学長）

調査総括 稲田 孝司（埋蔵文化財調査研究センター長）

調査主任 横田 美香（埋蔵文化財調査研究センター助手）

調査面積：62.6m²

b. 調査の記録

①調査区の位置

第29次調査地点は、津島南地区の西半部、農学部校舎の西側に位置する。津島岡大遺跡における本調査地点は、遺跡の南西部にあたる。

本調査地点の周辺で行った発掘調査は、第2次調査A～C地点（排水管理設）・B H13区（合併処理槽）¹⁾、第8次調査A地点（遺伝子実験施設）・B地点（合併処理槽）²⁾、第26次調査地点（事務局）³⁾、第27次調査地点（創立五十周年記念館）⁴⁾である。これらの地点における調査の結果、縄文時代中期から弥生時代早期・前期に属するまとまった量の土器が出土したB H13区や、縄文時代後期以降の遺物・遺構が出土した第8次調査・縄文時代後期の炉跡が検出された第26・27次調査など、縄文時代から弥生時代をはじめとする良好な遺構・遺物がこれまで確認されている。

②層序と地形

層序

1層：1907年から1908年にかけて旧日本軍が駐屯した際の造成



図7 第29次調査地点位置図（縮尺1/5,000）

土である。現地表での標高は3.8m前後である。

- 2層：近代の耕作土である。上面での標高は2.70～2.75mである。大きく二層に分かれる。2a層は緑灰色粘質土で、1cm前後の大きさの小礫を多く含む。2a層の上面では、南北方向にのびる歓の跡を確認した。2b層は青灰色の砂質土で、5mm前後の小礫を非常に多く含む土層である。周辺の調査の状況から近代層と考えられる。
- 3層：緑灰色の弱粘質土である。上面の標高は2.5mである。厚さは全体に厚く、5cm前後である。上飾器系統の土器小片が2点出土している。周辺の調査状況から近世層と考えられる。
- 4・5層：淡緑灰色の砂質土である。色調・土質は似通っているが5層の方が砂質が強い。また、5層下面には鉄分の沈着が認められる。4層上面の標高は2.5m、5層は2.45mとなる。4・5層ともに遺物は出土していないが、これまでの周辺の調査から近世に帰属するものと考えられる。
- 6層：灰色粘土で、微砂を含む。上面でのレベルは2.3m前後である。本層の上面では鉄分の沈着が顕著に認められた。土師器小皿と須恵器小片が出土した。時期は出土遺物から中世と考えられる。
- 7層：暗灰色粘質土である。6層よりも粘性が強い。下面には鉄分が沈着する。上面でのレベルは2.18～2.25mである。7層の機能時期については、遺物は出土していないが、周辺の調査の状況から古代と考えられる。
- 8層：灰褐色の粘質土で、微砂を多く含む。上面での標高は2.1m程度である。本層およびそれより上層は、おおむね水平堆積をなす。上飾器と弥生土器の小片が計20点とサヌカイト製剝片1点が出土している。周辺の調査の状況と併せて考えると、古墳時代頃に相当する土層と考えられる。
- 9層：灰色粘質土である。鉄分の沈着が顕著である。本層は調査区の東半部のみで確認した。上面での標高は1.8～1.9mであり、東にいくにつれ低くなる。上面で、南北方向にのびる溝を3条検出した。遺物は出土していないが、周辺の調査の状況から古墳時代頃に相当する土層と考えられる。
- 10層：灰色の砂質土である。調査区東側の1/3部分のみで確認した。東にいくにつれ粗砂が多くなり、東端では白色の粗砂層となる。上面での標高は1.75m前後である。遺物は出土していないが、弥生時代頃に相当する土層と考えられる。
- 11層：淡い黒褐色の粘質土である。微高地部分にひろがる土層である。上面での標高は2.0m前後である。遺物は出土していない。弥生時代頃に相当する土層と推定している。
- 12層：黒褐色の粘質土である。津島地区一帯に広がる、いわゆる「黒色土」に対応する。上面での標高は1.6～2.0mを測る。低位部にいくにしたがい色調は黒みを強くし、土質は粘性を強くする。弥生土器と考えられる土器小片が6点出土している。これまでの調査の状況から、弥生時代前期頃に相当する土層と考えられる。
- 13層：二層に分けることができる。13a層は調査区東半の低位部で暗灰色の粘質土、調査区西半の微高地部分で黄褐色の砂質土となる。13b層は淡黒褐色の粘質土である。標高は13a層上面で1.4～1.8m、13b層上面で1.3～1.65mである。13a層から上器小片2点、13a層と13b層の境目から打製石鎌1点が出土した。周辺の調査の状況から、本層は縄文時代の基盤層と考えられる。

地形

9層から13層までは、旧地形の影響が顕著に認められる。調査区の東側にゆるやかな谷状の低位部、西側に微高地がひろがる。時期は、縄文時代から古墳時代頃までである。弥生時代から古墳時代には、微高地の縁辺に溝が掘削されている。8層以降の土層は、ほぼ水平に堆積している。古墳時代頃から土地の平坦化が進行していると考えられる。それ以降の土地は、連続と平坦にならされて耕作等に利用されたと考えられる。

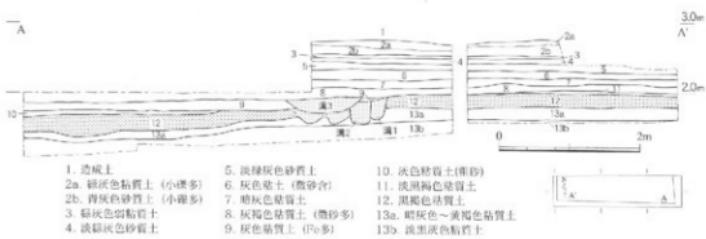


図8 第29次調査南壁土層断面図(縮尺1/70)

③弥生時代から古墳時代の遺構・遺物

遺構は弥生時代～古墳時代に属する3条の溝とピットを検出した(図9)。溝についてはいずれも微高地から低位部へ傾斜が変換する部分に位置しており、微高地の縁辺をめぐる溝と考えられる。溝同士の切り合ひ関係から、溝1→溝2→溝3という順序で掘削されている。溝3の段階には、9層の堆積により、溝1・2の段階と比べて地形の傾斜はゆるくなっている。

遺物については、溝3から少量の土器片が出土しているが、小片のため図化にたえなかった。他の溝からは遺物は出土していない。

溝1(図10・11、写真2) 12層で検出した溝である。溝2によって切られており、現状で幅0.24m、長さ1.7m、深さ0.32mを測る。断面形は底面が丸底となる。垂直気味に掘り込まれている。

溝2(図10～12、写真3) 12層で検出した溝で、溝1を切り、溝3によって切られている。現状で幅0.31m、長さ2.8m、深さ0.32mを測る。断面形は逆台形状を呈する。溝1と同様に垂直気味に掘り込まれることを特徴とする。

溝3(図10・11、写真4) 9層の堆積後につくられた溝である。幅1.15m、長さ2.9m、深さ0.23mを測る。断面形は底面が丸底状となる形態である。少量の土器片小片が出土地している。

ピット(図10・13) ピット1は9層で検出した。溝3を切るかたちでつくられている。埋土は灰褐色粘質土、大きさは径30cm、深さ16cmである。

なお、南壁の溝3の直下において、明確な束縛として認識してはいないが、2箇所のピット状の落ち込みが認められた(図8)。東側の落ち込みは、埋土が黒褐色砂質土で、大きさが現状で径40cm、深さ25cmとなる。西側の落ち込みは、埋土が淡黒褐色砂質土であり、現状で径35cm、深さ23cmを測る。

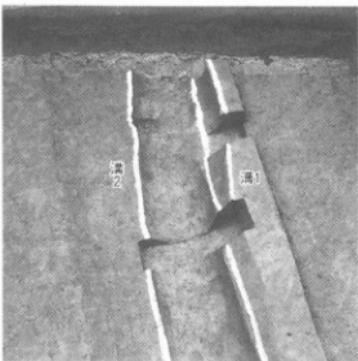


写真2 溝1・2プラン(北から)

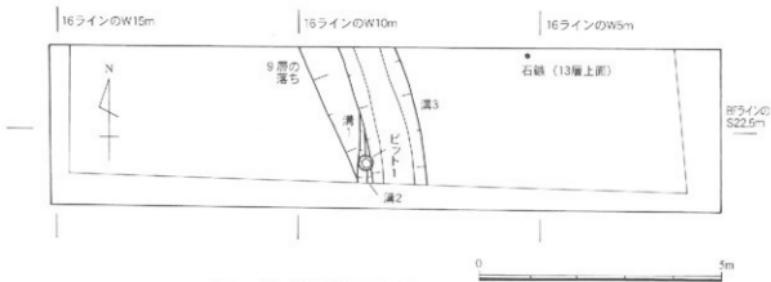


図9 第29次調査検出遺構全体図 (縮尺1/100)

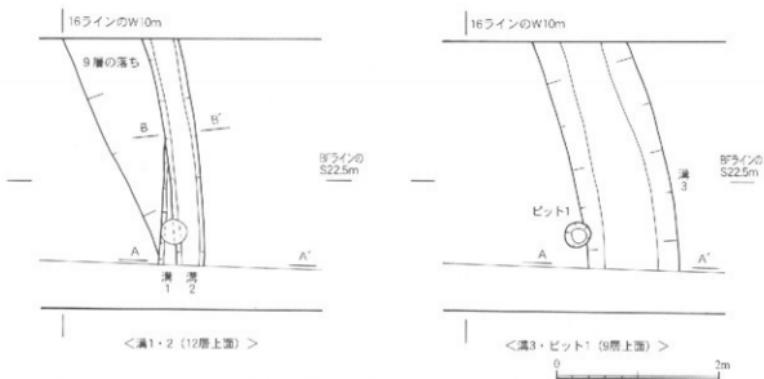


図10 溝1~3・ビット1 (縮尺1/60)

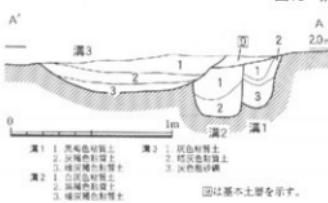


図11 溝1~3 (縮尺1/30)



写真4 溝3セクション (北から)

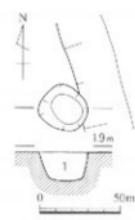


図12 溝2 (縮尺1/30)



写真3 溝2セクション (南から)

図13 ビット1 (縮尺1/30)

④包含層出土の遺物

図化できる資料は13a層より出土した打製石錐1点である（図14・写真5）。包含層から出土した他の資料はいずれも小片のため、図化できなかった。

石錐は、長さ3.7cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重さ1.2gを測る。凹基式で基部の抉りが深い。サスカイト製である。両側縁は鋸歯状に剥離がなされている。全体的に薄く、ていねいにつくられている。

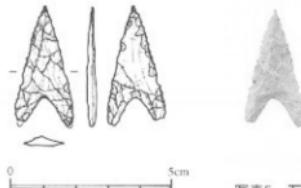


図14 包含層出土遺物（縮尺2/3）

写真5 石錐
(縮尺2/3)

c.まとめ

本調査地点は、全体として遺構・遺物とともに少なく、人為的な活動が比較的希薄な地点であった。本調査地点では、突宍文段階から弥生時代前期にかけて形成された「黒色土」を確認している。その一方で2001年に実施された第26次調査では、調査区の南西部分に微高地がひろがる。したがって、第26次調査地点でみられた微高地は広範囲にはひろがらず、本調査地点が位置する南側に向かって地形が低くなっていくものと考えられる。

このように本調査によって、津島岡大遺跡の南西部における縄文時代以降の旧地形や、弥生時代から古墳時代における滑の掘削による土地利用のあり方を考える上で重要な知見が得られたといえる。

（光本 順）

註

- (1) 吉留秀敏・栄一郎編 1986『岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第2回 岡山大学埋蔵文化財調査室
- (2) 富樫志羅 1995『津島岡大遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (3) 増田美香 2003『津島岡大遺跡第26次調査』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2001』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.1-3
- (4) 高田治司編 2003『津島岡大遺跡13』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第2節 試掘・確認調査の概要

事務局旧本部棟移転に伴う試掘・確認調査（津島南BD15）

a. 調査の成果

弥生時代早期から前期にかけて形成されたと考えられる黒色土が、調査区の南側に向かって落ちていく状況を確認した。遺構・遺物もほとんど認められなかった。

試掘前は、第26次調査（事務局本部棟）において検出した東北から南西の方向にのびる黒色土の堆積する谷地形が、本調査地点にまでのびることを想定していた。調査の結果から、第26次調査における黒色土の谷地形は、本調査地点よりは北に位置する可能性がきわめて高くなった。また、南側への落ちがみられたことから、谷地形と今回の落ちとの間の微高地の南北幅がさほどひろくないことも明らかとなった。遺構・遺物については、希薄な地点であることが確認された。

調査期間：2002年12月5日

調査体制：光本 順・高田浩司

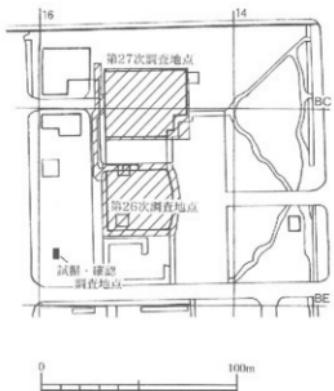


図15 試掘・確認調査地点位置図（縮尺1/2,500）

b. 調査の経緯

岡山大学では、事務局本部棟の新館に伴う旧本部棟の解体に際して、明治時代以降の陸軍司令部であった旧本部棟の一部を移築保存することとなった。移転に伴う基礎工事は埋蔵文化財を損なう範囲ではなく、移転場所の面積も280m²と小さい状況であった。しかしながら、移転先の埋蔵文化財の状況について半永久的に知り得ないことが予想された。移転先の周辺では、第26次調査地点や第27次調査地点（創立五十周年記念館）において発掘調査が行われている。その結果、弥生時代早期から前期ごろの農耕の実態を知る上で重要な「黒色土」のほか、近世・近代～繩文時代後期に至る遺構・遺物がみつかっているが、その密度は、比較的高いものではなかった。

こうした状況を踏まえて、各時期の包含層の厚さや遺構・遺物の様相、旧地形などを確認する目的で、移転先において試掘・確認調査を行うこととなった。

c. 調査の概要

試掘坑は、現地表面で南北5m、東西4mの範囲を設定し、明治時代の造成土を掘削した。造成土以下については、南北3m、東西1mの範囲で調査を行った。掘削は重機によって行い、地表下2.1mまで掘り下げた。掘り下げの過程で、南側に平面的に黒色土のひろがりを認識した。掘削の後、断面を精査し観察と記録を行った。

造成土の厚さは、約1mを測る。現地表の標高は4mである。2層は、近代の耕作土である。東西方向の歴の跡がみられる。3・4層は黄灰色系の土で、鉄分が多く沈着する。比較的粘性がある。近世に属する土層と考えられる。5層は、灰褐色の粘質土である。中世に属すると考えられる。6・7層は、灰色の粘質土で、古代～古墳時代後期の時期幅の中で収まるものと

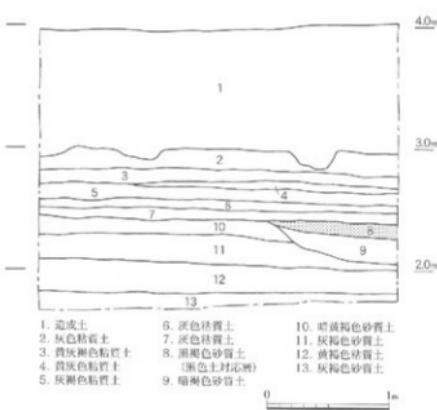


図16 試掘・確認調査東壁土層断面図（縮尺1/40）

考えられる。8層は黒褐色の砂質土である。南側に向かって下面が傾斜し、ゆるやかに下降していく状況が確認できた。上面のレベルは、2.4mである。いわゆる「黒色土」に対応する土である。ただし、通常の黒色土よりは褐色が強く砂質も強い。落ちの始まる部分であることが影響しているものと考えられる。9層は、暗褐色の砂質土であり、8層と10層の中間的な土質である。8層と同様、南に向かって落ちている。10・11層は、縄文時代後期ごろの基盤をなす層と考えられる。10層は暗黄褐色の砂質土、11層は灰褐色の砂質土である。それ以前の上層については、12層で黄褐色の粘質土、13層で灰褐色の砂質土となる。

遺構については、近代の歴以外には確認できなかった。また、遺物もほとんど出土していない。(光本 順)

第3節 立会調査の概要

津島地区では、40件の立会調査を実施した。そのうち包含層にまで掘削がおよんだものは22件であった。

津島北地区（図17）においては、工学部周辺の自然科学系総合研究棟新宮や、理学部研究棟改修に伴う立会調査などがなされた。津島南地区では、農学部校舎の改修や一般教育棟関連の改修、事務局本部棟・創立五十周年記念館新宮に伴う調査などが実施された。その中でも、特に津島南地区の事務局本部棟および創立五十周年記念館新宮に伴う立会調査が多くなされ、弥生時代早期を中心とするまとまった遺物が出土し、当該期の津島岡大遺跡の具体相を考える上で重要な知見を得た。以下では、その調査成果について述べたい。

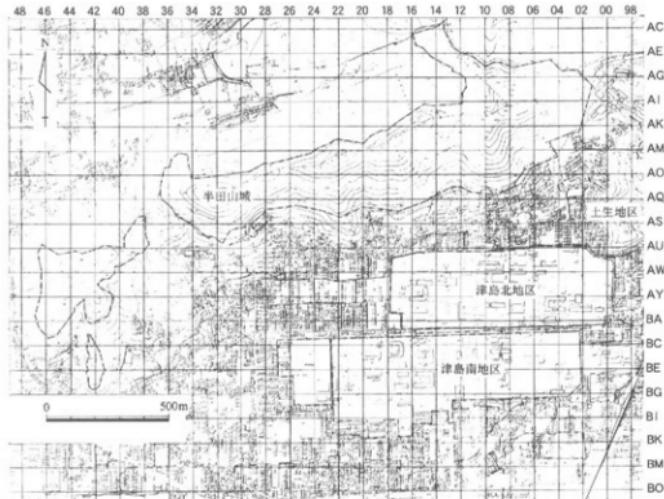


図17 津島地区全体図 (縮尺1/20,000)

表1 2002年度調査一覧

| 順位 | 調査地名 | 定年地名 | 西名 | 調査年月日 | 測量員 | 測量機器 | 備考 |
|----|-----------|---|----------------------|--------------------------------|---------|---|----|
| 1 | 東洋 清瀬市 | 昭和 20 15~16 | 東洋五丁目北側沿岸付近に伴う変形地盤 | 02.2.~03.3.3. | 2.0~2.6 | 水準測量100m、水平基準点の測定、水準、GPS測量 | |
| 2 | 安根 清瀬市 | AW-AV 06~08 | 西郷町小字安根北側斜面付近に伴う変形地盤 | 02.4.20~9.20, 11.26~12.1.15 | 2.5~3.6 | 高精度GPS178m、小判尺・大判尺の測定、水準測量の複数回実施、現況変形の追跡(現況地盤踏査調査) | |
| 3 | 柴原 地図 | BL-BD 06~07 | 柴原地区北側斜面付近に伴う変形地盤 | 02.3.30~3.31.25 | 1.8~2.7 | 高精度GPS100m、高さ2~3m、南北の角、基礎・構造、人間の十分踏査により、現況の踏査(現況地盤踏査調査) | |
| 4 | 柴原 清瀬市 | BL15 | 柴原地区北側斜面付近に伴う変形地盤 | 02.3.30~3.31.25 | 2.1~2.7 | 高精度GPS100m、南北、東西の現況踏査(現況地盤踏査調査) | |
| 5 | 父母 甲斐市 | BD-2a | 父母町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.3.25.2 | 2.1 | 衛生モニタ装置 | |
| 6 | 老母 清瀬市 | AV-27 | 老母町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.4.1 | 1.2 | 衛生モニタ | |
| 7 | 父母 清瀬市 | AV17 | 父母町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.4.1 | 1.0 | 衛生モニタ | |
| 8 | 父母 清瀬市 | AV16~17 | 父母町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.4.1~1.5 | 0.7~1.1 | 衛生モニタ測定 | |
| 9 | 父母 清瀬市 | AV16~AV19 | 父母町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.4.12 | 0.5~1.5 | 衛生モニタ測定 | |
| 10 | 父母 清瀬市 | CF-CO 02~03 | 父母町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.5.5~7.23 | 1.0~1.3 | リモコンまで測定 | |
| 11 | 立会 父母町 | AV13 | 立会町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.5.3 | 1.0 | 測量車中 | |
| 12 | 立会 清瀬市 | BD-0~11 | 立会町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.7.13 | 0.7~0.8 | 測量車中 | |
| 13 | 立会 清瀬市 | BD-0~10 | 立会町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.7.23 | 2.0 | 立会モニタ装置 | |
| 14 | 立会 清瀬市 | DC-15 | 立会町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.7.30~8.9 | 0.6~1.5 | 立会モニタ測定 | |
| 15 | 立会 清瀬市 | DC-9~10 | 立会町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.8.2 | 0.5~0.7 | 立会モニタ | |
| 16 | 立会 清瀬市 | DC-10 | 立会町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.8.12 | 1.6 | 測量車中 | |
| 17 | 立会 清瀬市 | DC-10 10~17 | 立会町日本通通り付近に伴う変形地盤 | 02.8.30~8.22 | 0.8~0.9 | 立会車中 | |
| 18 | 立会 立会町 | CM-1 | (付近) 清瀬河岸道路(立会の分)付近 | 02.8.22 | 1.1 | 立会モニタ | |
| 19 | 立会 立会町 | CE-CF-E GD-AH-CX GD-BB-C GD-CO-C | (付近) 清瀬河岸道路(立会の分)付近 | 02.8.25~10.20 | 0.5~1.8 | 立会モニタ測定、立会モニタで測定した結果で立会モニタでは代替確認 | |
| 20 | 立会 立会町 | GD-15 | (立会) 松原町工場(今木分)付近 | 02.8.26~8.27 | 0.9 | 立会モニタ | |
| 21 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.9.5 | 1.2 | 立会モニタで測定 | |
| 22 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.9.13 | 1.5 | 立会モニタで測定 | |
| 23 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.9.14~9.19 | 2.0~5.5 | 立会モニタで測定 | |
| 24 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.9.30 | 0.7 | 立会モニタ | |
| 25 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.10.2~10.5 | 1.4~2.6 | 立会モニタで測定 | |
| 26 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.10.7~10.20 | 0.7~1.2 | 立会モニタで測定 | |
| 27 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.10.7~10.20 | 0.9~1.9 | 立会モニタ、立会モニタで測定 | |
| 28 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.12.9~10.10 | 0.5~1.7 | 立会モニタで測定、立会モニタで測定 | |
| 29 | 立会 立会町 | GD-15 | (立会) 水道管 | 02.10.20~10.21 | 1.8 | 立会・立会モニタで測定、立会モニタで測定 | |
| 30 | 立会 立会町 | GD-15 | (立会) 水道管 | 02.10.20~10.22 | 0.5~1.8 | 立会モニタで測定 | |
| 31 | 立会 立会町 | GD-15 | (立会) 水道管 | 02.10.20~10.22 | 1.0 | 立会モニタで測定 | |
| 32 | 立会 立会町 | GD-15 | (立会) 水道管 | 02.10.20~10.22 | 1.1 | 立会モニタで測定 | |
| 33 | 立会 立会町 | GD-15 | (立会) 水道管 | 02.11.5~11.16 | 1.1 | 立会モニタで測定 | |
| 34 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.11.6~02.7.38 | 1.2~2.5 | 立会モニタで測定がまだまつて立会モニタで測定 | |
| 35 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.11.11~11.19 | 0.6~1.4 | 立会モニタ | |
| 36 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.11.18~11.19 | 0.5~1.8 | 立会モニタで測定 | |
| 37 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.11.18~11.19 | 0.5~0.9 | 立会モニタ | |
| 38 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.11.22 | 0.8 | 立会モニタ | |
| 39 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.11.22 | 0.04 | 立会モニタ | |
| 40 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.11.26 | 0.9 | 立会モニタ | |
| 41 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.11.26 | 0.5~0.8 | 立会モニタ | |
| 42 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.11.26 | 0.5~0.8 | 立会モニタ | |
| 43 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.11.27 | 0.6~1.6 | 立会モニタ | |
| 44 | 立会 立会町 | GD-15 | (立会) 水道管 | 02.12.9~12.10 | 0.7~1.3 | 立会モニタで測定 | |
| 45 | 立会 立会町 | GD-15 | (立会) 水道管 | 02.12.9~12.17 | 0.5~1.2 | 立会モニタで測定 | |
| 46 | 立会 立会町 | GD-15 | (立会) 水道管 | 02.12.15 | 1.2 | 立会モニタ | |
| 47 | 立会 立会町 | GD-15 | (立会) 水道管 | 02.12.15 | 0.7 | 立会モニタ | |
| 48 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.12.16~03.1.14 | 0.7~1.0 | 立会モニタで測定 | |
| 49 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 02.12.29~1.2.25 | 0.7~1.0 | 立会モニタで測定 | |
| 50 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 03.1.20 | 7.0 | 立会モニタで測定、立会モニタで測定 | |
| 51 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 03.1.20~2.28 | 0.5~1.5 | 立会モニタで測定 | |
| 52 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 03.2.3~2.21 | 0.6~1.2 | 立会モニタで測定 | |
| 53 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 03.2.3~2.21 | 0.6~1.2 | 立会モニタで測定 | |
| 54 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 03.2.14 | 1.2 | 立会モニタで測定 | |
| 55 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 03.2.14~3.2.21 | 0.6~1.3 | 立会モニタで測定 | |
| 56 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 03.3.4~3.5 | 1.6 | 立会モニタで測定 | |
| 57 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 03.3.10~3.25 | 1.0~2.3 | 立会モニタで測定 | |
| 58 | 立会 立会町 | GD-15~16 | (立会) 水道管 | 03.3.27 | 0.5 | 立会モニタ | |

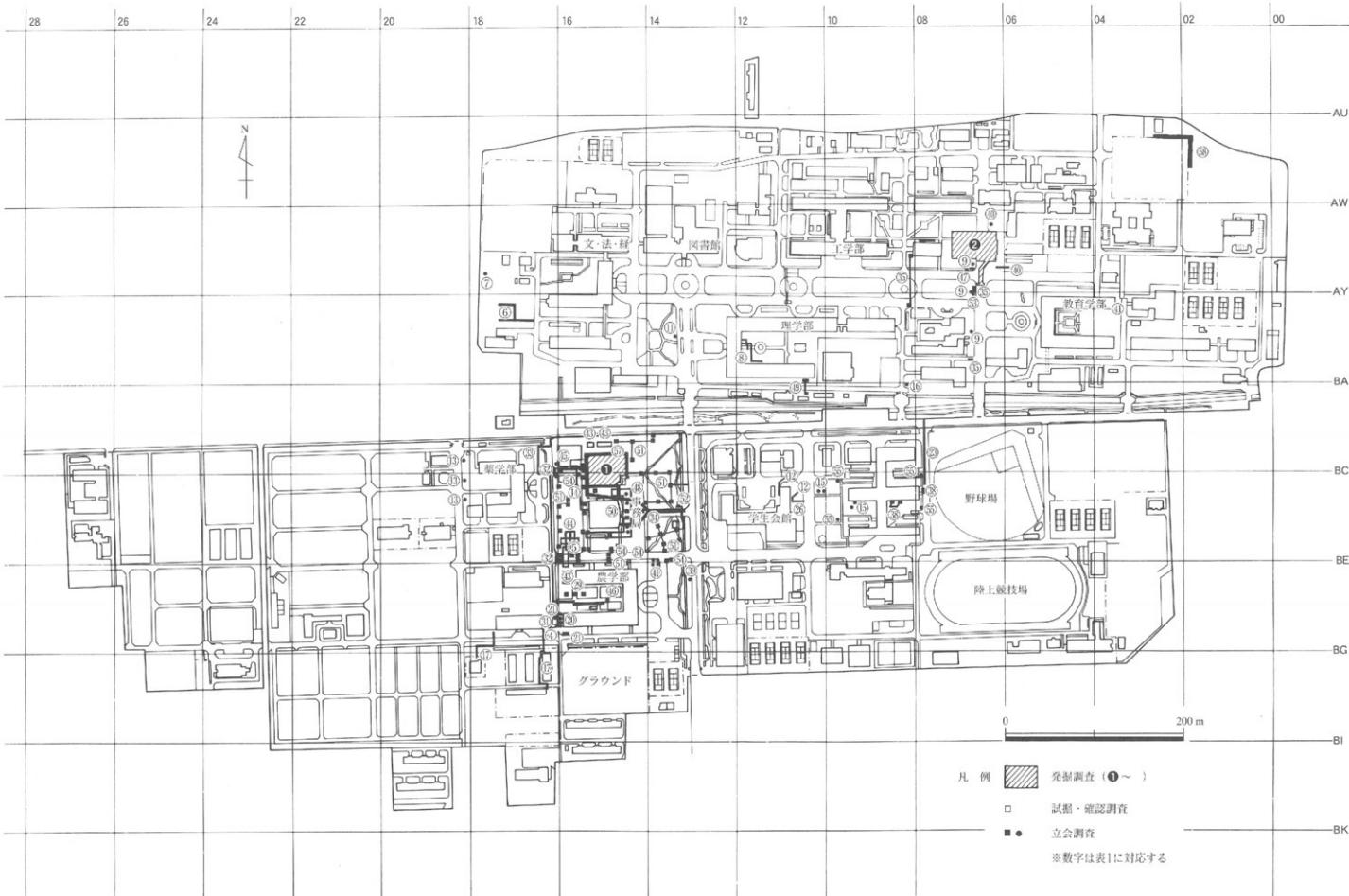


図18 今年度の調査地点（1）津島地区（縮尺1/4,000）

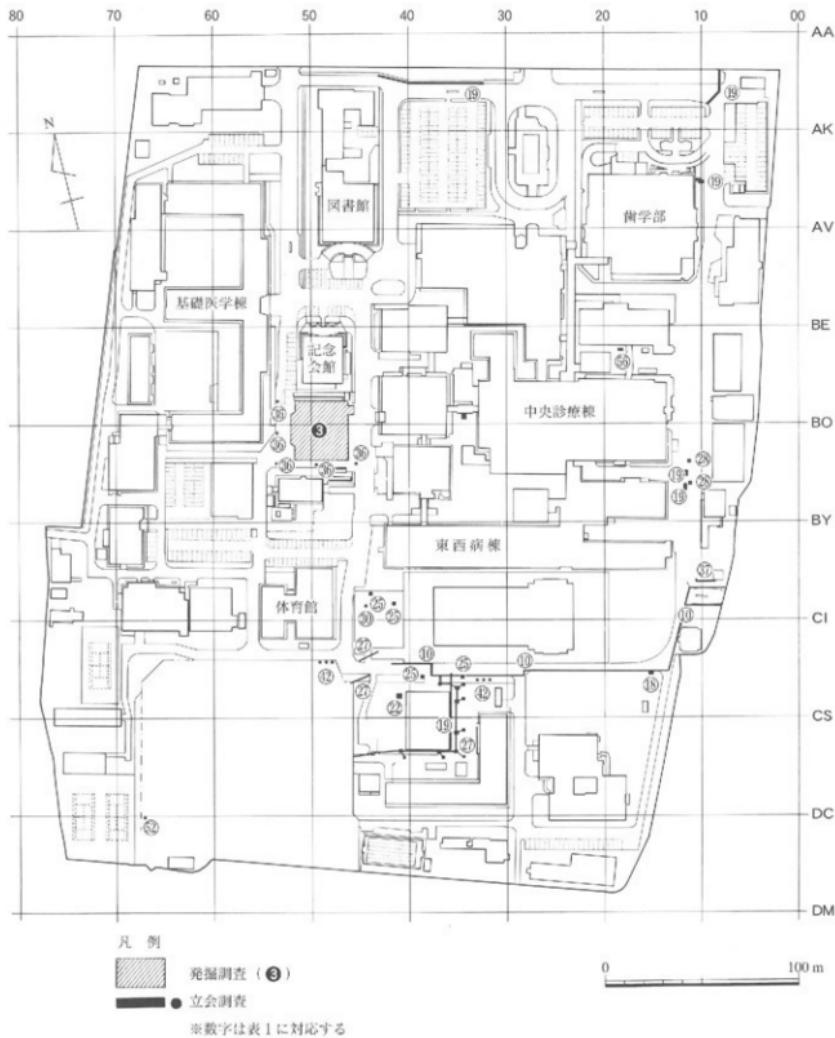


図19 今年度の調査地点（2）鹿田地区（縮尺1/2500）

事務局本部棟・創立五十周年記念館新館に伴う立会調査（津島南BB・BC・BD13～BB・BC・BD15）

a. 調査の経過

2002年10月23日から2003年3月28日にかけて、事務局本部棟・創立五十周年記念館新館に伴う関連設備設置工事が行われ、広い範囲にわたって立会調査を実施した（図20）。このうち、山事務局本部棟東正面の「南北道路」に接する門から五十周年記念館の西側に至る污水・雨水排水管および樹の設置に伴う立会調査では、長距離かつ最深部で表土下約2.7mにも及び、本調査地点の遺構・土層の様相が明らかになった。重機により掘り下げを行い、当初は遺構がみられなかったが、①11月18日に第26次調査区の東約20mに位置し、北西から南東へ斜めに延びる地点では、近世の溝と、「黒色土」と呼ばれる弥生時代早期から前期にわたり津島岡大遺跡・津島遺跡一帯に広がり、鍛錬となっている黒褐色の砂質・粘質土層の落ちを検出し、②11月21日には、続いて南西方向へつながる地点の南端で、その「黒色土」中から多量の土器・石器が出土したため、調査員により手掘りを行つて精査した。③12月20日には第27次調査地点南東、第26次調査地点北東に東西方向に位置する地点で近世・弥生時代の溝と谷部の落ちを検出した。以下では位置関係からそれぞれ①を第2地点、②を第3地点、③を第1地点として、主にこれらの地点の調査成果を中心に述べる。

b. 調査の概要

①層序

- 1層：山陸軍の1907～1908年にわたる屯营地建設時の造成土である。標高は約4mで層厚は65～80cmである。
2層：青灰色粘質土で、一部鉄分を斑状に含む。明治時代の耕作土で、溝2条と畾・鋤痕を検出している。標高は3.2m前後で層厚は5～15cmである。
3層：明褐色砂質土で、二層に細分され上面に鉄分が顕著に沈着し、一部マンガンを含む。近世の耕作土であるが、遺構・遺物とも確認できなかった。標高は、3.1m前後で層厚10～15cm程度である。

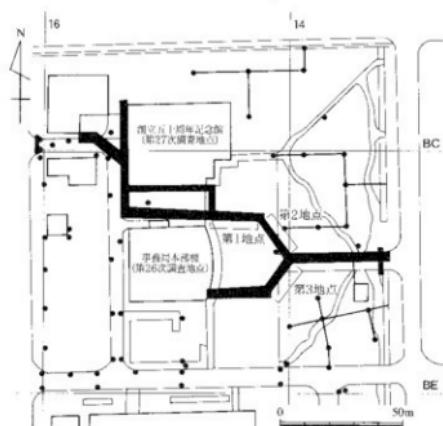
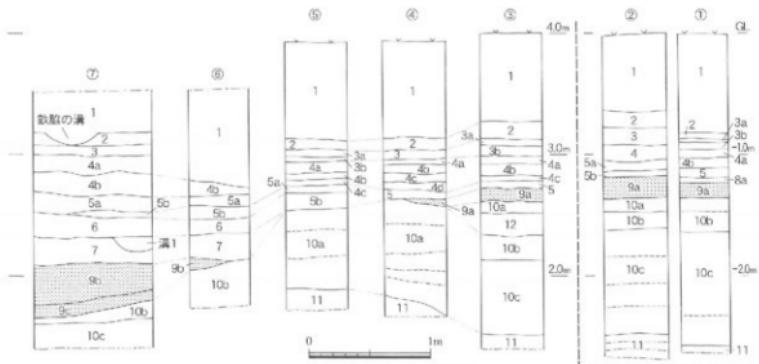


図20 事務局本部棟・創立五十周年記念館新館に伴う立会調査地点（縮尺1/2,000）

4層：灰褐色を呈する砂質土で、三層に細分される。鉄分・マンガンを多く含み、遺構はないが中世の耕作土とみられる。標高は3.0m前後で、層厚は20～35cmである。

5層：二層に細分される灰褐色粘質土で、鉄分・マンガンをわずかに含み、一部で砂質となる。遺構はみられないが古墳時代後期の遺物を含む包含層で、西に向かうほど厚く堆積する。標高2.8m、層厚10～20cmである。

6・7層：第27次調査で確認された東南隅の谷部に堆積する土層で、第1地点西端にのみ存在する。6層はマンガンを多く含む灰白色粘質土、7層が鉄分の多い黄灰色砂質土である。層厚はそれぞれ20cmほどと厚く、断面では7層を切り込む溝を1条確認している。



8層：「黒色土」の上層に薄く堆積する、暗黄灰色粘質土である。粘性が非常に強く、鉄分をやや含む。東端と南の地点にのみみられ、遺物は土器片とサスカイト片が検出されている。標高2.75m、層厚は5~15cmであるが、南端の第3地点では淡青灰色粘質土と2層に分かれる。ほかの調査地点の状況から、弥生時代前期と考えられる。

9層：「黒色土」とされる、鉄分をわずかに含む弥生時代早期から前期の暗褐色土で、第1地点東半と第2地点北半には存在しない。遺構は、第3地点で溝が1条のみ検出されている。9 a層は標高2.55~2.7m、層厚20cm前後で第2地点から東端にかけてはやや砂質で色調も薄いが、第3地点南端にかけては粘性を帯びて固くしまり、色調も濃くなる。遺物はこの第3地点南端で集中して検出された。9 b・9 c層は谷部に堆積したもので、標高2.1m以下で層厚は5~30cmで粘性が強い。

10層：縄文時代後期の褐色砂質土である。水たまり状の落ち込みの他に遺構はみられず、遺物も出土していない。一部9 a層のしみ込みがある暗褐色の10層が部分的に存在するが、全体に広がる黄褐色の10b層の下にマンガンの多い茶褐色の10c層があり、東へ向かうほど厚くなる。10b・10c層とともに東方向へ流路を埋めるように堆積していく状況が観察でき、さらに細分が可能であるが遺構等の生活痕跡が確認できないため、一括して扱う。標高は1.55~2.6m、層厚は65~120cmとかなり差がある。

11層：縄文時代後期以前の層である。灰褐色粗砂からなる堆積で、ラミナ状に粘質土が混入する箇所がある。一部青灰色で層にしまりがなく、小礫もみられない洪水砂層である。標高は1.5~1.8mである。

②地形

縄文時代後期以前では、基盤となる11層が第2地点半ばで最も標高が高くなり、東へ向かうに従って緩やかに下る斜面が一部で観察できる。この地形を反映するかたちで、縄文時代後期の層が堆積し、第2地点北端から南西へ延びる脊梁部が形成される。東には標高地があり、南には低地、北には第27次調査地点の南東端にかか

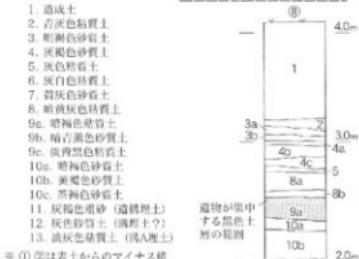


図21 土層柱状図（縮尺1/40）

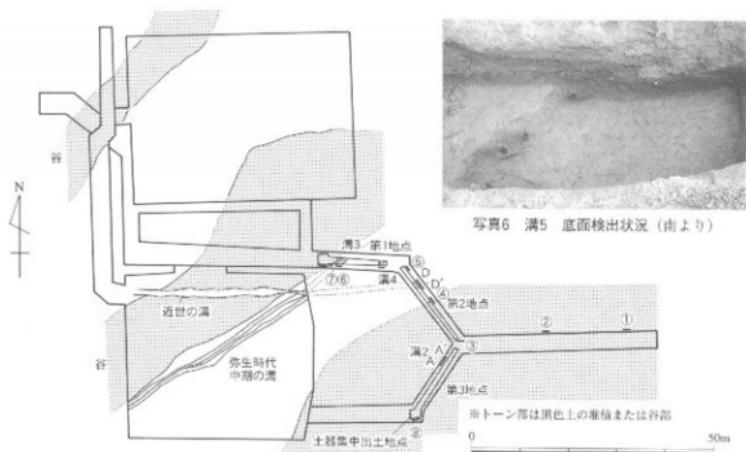


図22-1 土層柱状図位置及び検出遺構平面図（縮尺1/1,000）

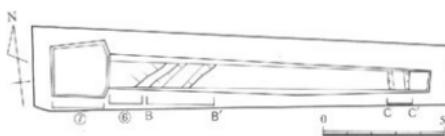


図22-2 第1地点出土遺構断面図（縮尺1/200）

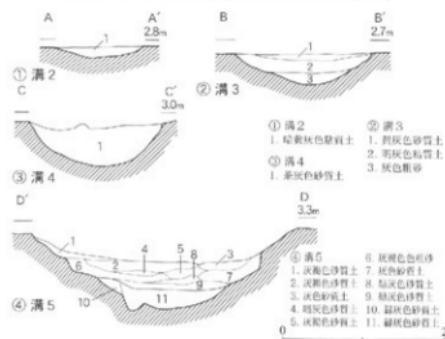


図22-3 溝2～5遺構断面図（縮尺1/60）

る谷部があり、複雑な地形を呈する。ついで全体を弥生時代早期から前期の9a層が覆うが、脊梁部がカットされて平坦になり中世段階の5層が形成され、東を微高地として南西へ緩やかに下る水平堆積が近世まで続く。

③遺構

〈弥生時代〉弥生時代の遺構は、溝2条のみである。第3地点では、9a層を掘り込む平底の溝2を検出している。弥生時代前期のものとみられ、幅は1.11m、深さは0.15mである。遺物はなく、検出面の標高は2.73m、底面は同2.58mであった。方向は不明である。

また、第1地点西端の谷部付近では7層を掘り込む溝3を確認した。幅1.72m、深さ0.38mのすり鉢状の緩やかな底部を呈する。検出上面の標高は2.53m、底面は0.15mである。平面的には北東から北西方向を指向し、層位と位置の関係から第26次調査で検出された弥生時代中期の溝と同一のものと考えられる。なお、遺物は出土していない。

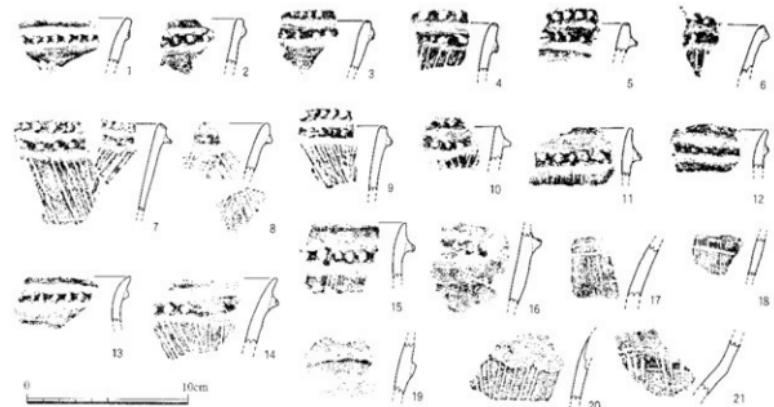
〈近代～近世〉近代から近世では、溝のほか、畝、畝脇の溝、耕痕がある。溝は2条検出し

た。第1地点東端の溝4(図22-2)は、2層から掘り込まれた南北14ラインに並行する近世溝である。幅1.65m、深さ0.55mで、検出面の標高は2.88m、底は2.33mである。丸底を呈し、遺物は検出されなかった。

第2地点の溝5(図22-3)は、幅3.39m、深さ1.02mをはかるやや大型の溝である。検出面は標高3.19m、底面は同2.17mで、溝として機能していた時期に標高2.43mまで埋まり、その後同2.78mまで細かい单位で土を入れて、最終的に造成土が上端まで至る2段階に分けて短時間で人為的に埋めている。なお、最も下層付近で溝の西寄りに南北方向に並ぶ4本の杭からなる杭列を確認した。杭は径約4cm、長さ約30cmであり、下端が溝の埋土中にあることから、溝が15cmほど埋まってから打ち込まれたものと考えられる。この溝は東西方向を指向し、B-Dラインにはほぼ並行する。底面の標高から西方に向かって流れているが、位置関係と規模、杭を多用する構造から、第26次調査地点で確認された東西方向の近世溝につながるものである可能性が高い。

④遺物

遺物は、溝5で出土した杭以外に土器と石器があり、容量約25リットルのコンテナ1箱分が出土しているが、そのほとんどは第3地点南端の樹設置箇所の黒色土(9a層)上層約10cmほどに限られ、平面的には散在するかたちで検出された。土器は、いずれも大きさ5cm程度以下の細片で図示が可能なものはわずかであった。



| 番号 | 性質 | 形態 | 断面 | | 月・期 | 土・基 | 形・状 | 色・調 | 胎・土 |
|----|----|--------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| | | | 横断面 | 縦断面 | | | | | |
| 1 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 2 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 3 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 4 | 陶器 | 一輪器・筒形 | 円形 | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 5 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 6 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 7 | 陶器 | 一輪器・筒形 | 三角・直い | 平行 | △ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 8 | 陶器 | 一輪器・筒形 | 三角・直い | 平行 | △ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 9 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 10 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 11 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 12 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 13 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 14 | 陶器 | 一輪器・筒形 | 三角・直い | 平行 | △ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 15 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 16 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 17 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 18 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 19 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 20 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |
| 21 | 陶器 | 一輪器 | 二角・直い | 平行 | ○ | 褐色 | 細孔 | 褐色 | 褐色 |

図23 第3地点出土遺物(1)〈土器〉(縮尺1/3)

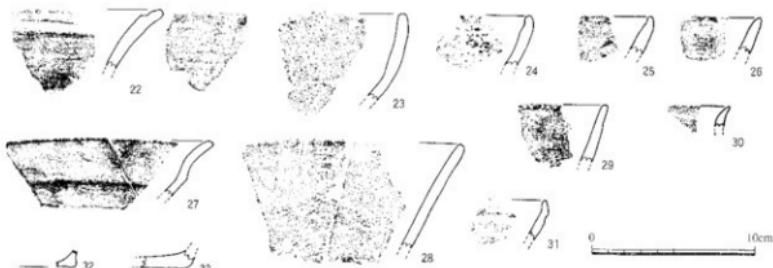


図24 第3地点出土遺物(2)(土器)(縮尺1/3)

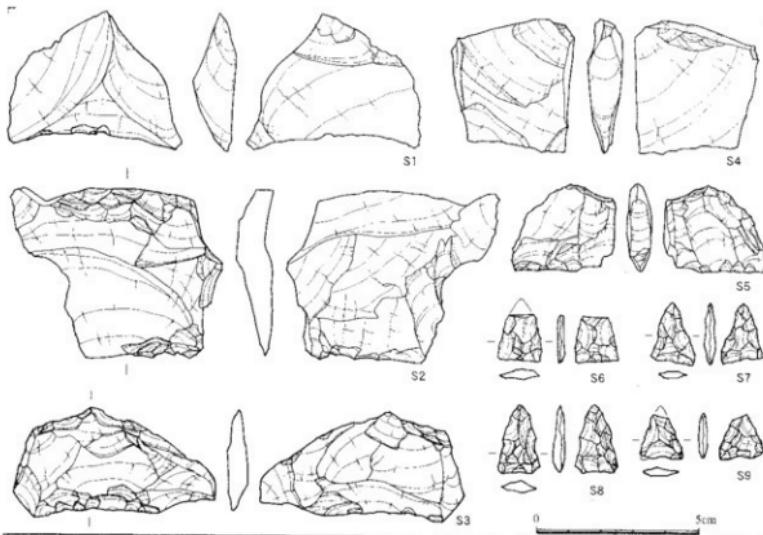


図25 第3地点出土遺物(3)(工具)(縮尺2/3)

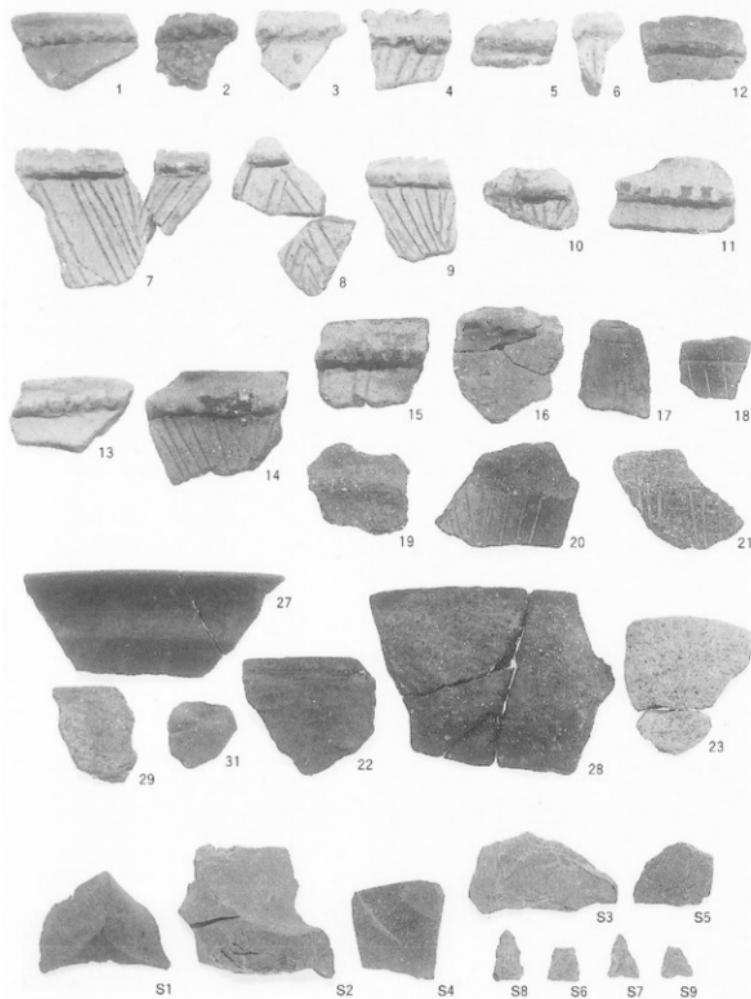


写真7 2002年度事務局・創立五十周年記念館周辺立会調査出土遺物（縮尺1/2）

土器（図23、24、写真7）弥生時代早期の土器では口縁が残る15点（1～15）のうち、刻み目をもつものが7点（3～7、9、10）と、非常に高い割合を示す。突帯文土器の深鉢が多く、口縁が残る15点（1～15）のうち、口縁よりもやや下方に位置し、幅は1cmに満たない細いものが大半である一方、断面形は台形または三角形のものが多く、刻み目も菱形・D形などヒラで明瞭に加工しているものが目立つ。また、突帯をもつ破片23点のうち13点を占める線刻を施した個体の多さも特筆される。器形は、16のみが竈弾型であるほかは、屈曲する肩部をもつタイプとみられる。突帯文土器のほかには、内側や外側に沈線をもつもの（22、31）と口縁下に屈曲部をもつ稍積の浅鉢（27）と鉢類（26、28、30）がある。なお底部が2点出土しているが、時期は船上から類推できるのみである。弥生時代前期の可能性があるものとしては、23や縱方向に2条の沈線をもつもの（29）、図示できなかったが壺または壺の胴部と考えられる破片が10数点あり、確実に器形を判別できるものはない。

全体に突帯文土器の占める割合が高く、その特徴は第2次調査川土資料に近似する傾向を示している。資料枚数が少ないとから検討に十分耐えうるものではないが、突帯幅の狭さ・貼り付け位置の低さなどから第3次調査川土資料よりもやや新規に位置づけられるとみられる。共伴する浅鉢等にも古相のものがないことも、これを補完する証左のひとつであるが、詳細は今後の資料の増加を待ったのちの再検討に委ねたい。

石器（図25、写真7）石核・楔形石器・石礫といった製品のほか、サスカイトのフレークやチップ（以下、剥片類）が多く認められた。剥片類も含めたサスカイト総重量は、 5m^2 足らずの面積にもかかわらず274.6g（うち剥片類177.7g）と、かなりの密度である。サスカイトのほか、泥岩や結晶片岩の破片が1点ずつみられた。

c.まとめ

今回の立会調査では、黒色土（9a層）の広がりと、該期の石器製作地の存在が明らかになったことが成果として挙げられよう。既往の第26・27次調査、旧本部機修設地における試掘・確認調査等の状況もあわせ、南に黒色土が広がり、標高の高い東の一帯にも延びていることが明らかとなった。第3地点から200m南に下った第2次調査地点で黒色土の大きな段差が確認されており、その地点を南限として北東方向へ緩やかな傾斜をもちつつ高くなっていく微高地に居住域が存在するとみられ、今回の第1地点は、北に隣接する第27次調査地点で黒色土が低位に落ち込むことから、その微高地の北端にあたるものと考えられる。また、第2次調査B地点でも指摘されているように、上層の出土に限られるチップ類の存在は、居住域あるいは近接する石器製作域であった可能性を示唆しているといえる（吉留・柴1986, pp.39-40）。石器の内容的にも、種類は少ないが第2次調査では確認されなかった石核が存在していること、また面積あたりのサスカイト剥片類の重量（35.54g/m²）は、比較的密であるとされた第2次調査B地点（1.21g/m²）の約30倍に達しており、またサスカイト製石器出土重量（19.38g/m²）についても第2次調査B地点・BH13区（B地点：0.29g/m², BH13区：0.57g/m²）との間にかなりの格差があることから、今回の第3地点南端は石器製作の中心域であったと考えられる¹⁾。（忽那敬三）

註

- (1) 石器類の器種の多様さから、第3地点より200mほど南に位置するBH13区が実際の居住地に、より近い地点である可能性が高い。

参考文献

- 吉留秀敏・柴一郎編 1986『岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ（農学部構内BH13区・他）』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第2号・岡山大学埋蔵文化財調査室
 山木悦正編 1992『津島岡人遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5号・岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
 横田美香 2003『津島岡人遺跡第26次調査』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2001』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp. 1-3
 高田造司編 2003『津島岡人遺跡13』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18号・岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

鹿田遺跡第13次調査（総合教育研究棟、鹿田 BM45区、BL～BR46～51[8]）

a. 調査の成果

本調査では、広範囲にわたる弥生時代終末～古墳時代初頭の土器窪まりをはじめ、中世の建物や井戸、中世末から近世の土坑群や大形の溝、畦畔など、多くの遺構を検出した。これまでに構内で調査した近接する地点とあわせて、鹿田遺跡の全体像を捉える上で重要な成果が得られた。近世・近代については、水田経営、大型の溝、多数の土坑の状況が明らかとなった。平安時代～鎌倉時代については、長期的な集落経営の状況が明らかとなった。古墳時代後期は、1条の溝が検出された。弥生時代終末～古墳時代初頭については、3箇所の土器窪まりの調査が大きな成果といえる。弥生時代に関しては、これまで不明確であった後期初頭の様相について知見が得られた。

調査期間：2002年4月30日～10月25日

調查面積：934m²

調査担当：光木 順（主任）、山本悦世、岩崎志保、野崎貴博、忽那敬三、森田浩司

主な遺構・遺物：近世～近代の水田3面・土坑26基・溝2条・陶磁器・瓦 平安時代後半～鎌倉時代の

建物3棟・柱穴群・井戸10基・溝10条・土師質土器・白磁・備前焼、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器泡まり3箇所・貝1基・漆9名・弥生時代後期の漆7名

b. 調査の経過

造成土の除去 2002年4月18日から4月26日までの期間に、重機によって造成土取りを行った。この過程で既設の樹木基礎の除去も行った。

発掘調査 4月30日から調査を開始した。6月後半まで中世末～近世の水田や土坑群の調査を行った。6月末～8月半ばまで平安時代後半～鎌倉時代の井戸や建物、溝を調査した。8月後半から古墳時代初頭頃の上器溜まりや弥生時代の遺構の調査を行い、10月25日に調査を終了した。

現地説明会 9月15日に現地説明会を開催し、72名の見学者を得た。土器溜まりを中心に、古墳時代・中世・近世の遺構について説明を行った。

c. 調査の概要

① 雷度

1層：大正時代の造成士である。

2図：近代の耕作土で、上面に畦畔を確認している。

3題：近世の傑作上で二層に細分できる

4図：由世の匂合層である。上面で由世末～近世ごろの土壌群

や漢、山野の井戸や漢、柱穴跡を検出した。

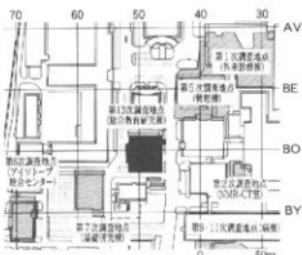


図26 第13次調査地点位置図(縮尺1/40000)

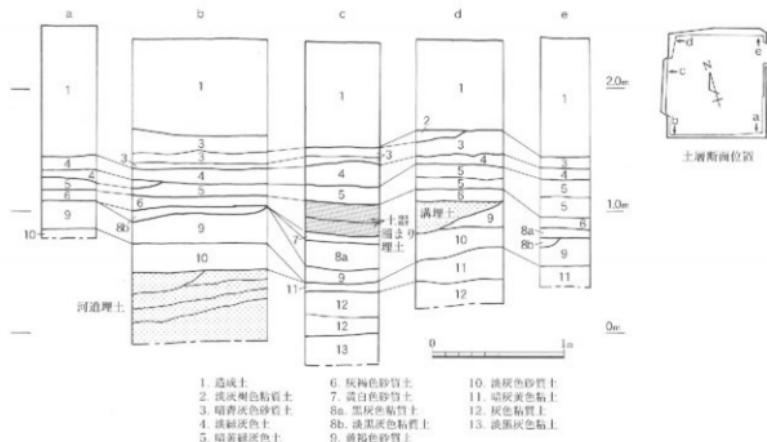


図27 第13次調査土層断面図（縮尺1/40）

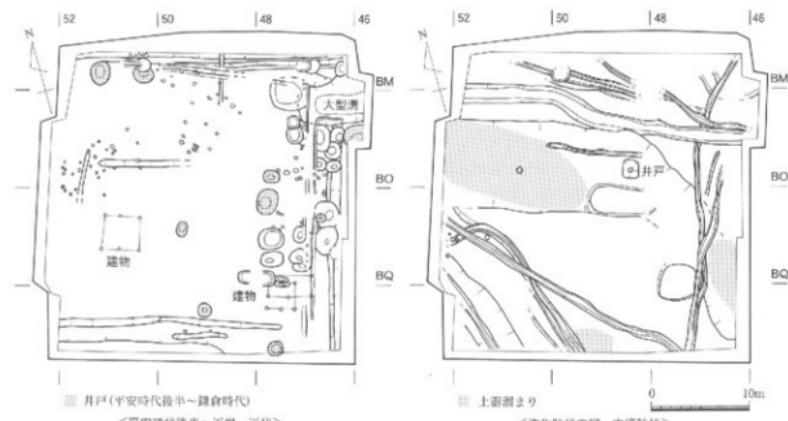


図28 第13次調査遺構全体図（縮尺1/500）

- 5層：平安時代後半～鎌倉時代の包含層と捉えている。畦畔を形成している土と耕作土に大別できる。
- 6層：弥生時代終末～古墳時代の包含層である。土器溜まりや溝、井戸などを検出した。
- 7層：8層がたわむ部分を中心に堆積する土層である。
- 8層：弥生時代後期初頭頃の土層で、窪地に堆積する。色調から二層に分層できる。
- 9層：弥生時代中期～後期の基盤層と考えられる。溝や柱穴を確認した。
- 10～13層：弥生時代中期頃の土層である。

②地形

弥生時代中期には、北東と南西に河道が流れ、北側に微高地がひろがっていた。この地形が以後の遺跡形成に大きな影響を与えていた。後期になると、窪地と微高地が交互に形成されている。窪地は、北東隅と中央から南東にみられる。弥生時代終末～古墳時代初期の土器溜まりは、中央から南東にわたる窪地と南側の微高地に形成される。古墳時代後期においても、旧地形に沿って溝がつくられている。土地の平坦化が認められるのは、平安時代後半から鎌倉時代にかけてである。

③遺構・遺物の概要

〈近世・近代～中世末〉 2～4層において、水田2面、上坑26基、溝2条を検出した。畦畔については、調査区北側において東西方向に1条、東側で南北方向に1条を検出した。畦畔はまず4層を利用してつくられ、3層と2層の段階でつくりなおされていた。近世段階から近代まで営まれた水田ととらえている。上坑は調査区の東側に、南北に連なるかたちで密集中していた。溝は調査区の北東部にある。大型の溝は4度にわたりて掘り返されており、時期を経るごとに線小化している。埋土中からは陶器類や瓦などが多く出土し、石祠の廐根部なども出土した。上坑と溝の検出面は4層である。時期については、中世末～近世の範疇でとらえている。庭田の地割りにかかわる主要な溝のひとつと推測する。

〈鎌倉時代～平安時代後半〉 4層および5層において、建物3棟、井戸10基、溝10数条、柱穴約180基を検出した。長期間にわたる居住域ととらえている。それ以前には、5層において検出した調査区南側と東側の畦畔の存在から、耕作地として利用されていたと考えている。

現地で建物として認識したのは3棟であるが、調査区北側と西側にある柱穴群も建物を構成するものであろう。井戸は10基あり、井筒として曲物が利用されている例が2基あった。井戸からは土師質土器や白磁、磁、杓子などが出土した。溝は調査区の四辺付近において検出した。中央付近の東西にのびる溝からは比較的多くの土器が出土し、鎌倉時代末の土器質土器や備前焼などが出土している。

〈古墳時代～弥生時代〉 この時期の遺構は、弥生時代以来の旧地形の影響がより強く反映されている。古墳時代～弥生時代終末 古墳時代後期の遺構としては、溝1条がある。北西から南東に向けて調査区を斜めにのびる溝である。須恵器が出土している。弥生時代終末～古墳時代初期については、土器溜まり3箇所、井戸1基、溝8条の遺構がみられた。検出面は6層である。井戸の発見によって、周辺に住居や建物があることを予測して精査したがみつかなかった。

土器溜まりは3箇所あり、いずれも調査区外まで範囲がひろがるものと考えられる。もっとも規模の大きい土器溜まりは、調査区の中央から西側にかけてひろがり、現状で長さ16m、幅7mをはかる。この土器溜まりは、調査区を東西から南東にわたる窪地に形成されている。同様の窪地で出土したのが南東側の土器溜まりで、現状で長さ8m、幅3.5mをはかる。南側の土器溜まりは微高地につくられていた。範囲は現状で長さ5m、幅3mである。土器溜まりの遺物は、間層を挟まずに遺物が折り重なるような状況で出土しており、ごく短期間のうちに廻収が行われたと考えられる。遺物の内容は、甕や壺、高杯、鉢といった通有な土器が大半を占める一方

で、直口瓶やミニチュア土器などの祭祀的な土器も含まれる。また、製塙土器や土鍤、石鍤といった水辺の生業にかかわる道具も出土した。製塙土器は細片となっており、炭粒とともにまとまって出土した。製塙後の残骸が、一括して廻棄された様相を呈する。井戸は、中央の土器溜まりの東側でみつかった。プランは方形を呈している。底から完形の甕が2段に重ねられた状態で出土した。上層の近くで炭や焦土が堆積した層がみられ、祭祀的行為が想定される。講としては、調査区北側において床地に沿うものと、東側において南北にのびるものを検出した。

弥生時代 弥生時代後期と中期の遺構・遺物を確認した。後期の遺構としては、溝7条、土坑1基がある。検出面は、7層、8a・8b層、9層である。弥生時代中期の遺構の可能性があるものとしては、南西の1条の溝がある。また、土器小片と南西の河岸内から板材が出土した。
(光木 順)

第2節 立会調査の概要

鹿田地区では前節で報告している第13次調査以外に小規模工事に伴った立会調査を15件実施している。このうち、包含層が確認されたものは11地点である。ここでは、遺構が確認されたエネルギーセンター棟新宮に伴う外構(雨水管路)工事地点の立会調査について報告する。

エネルギーセンター棟周辺外構工事に伴う立会調査(鹿田CO~CW36~45、CL~CM43~45、CN~CO44~46)

a. 調査区の概要

本調査地点は、第12次調査地点（エネルギーセンター新宮地）の東辺から南辺へと続く地点である。2002年10月7日～11月17日まで、工事の進行に合わせて随時実施した。エネルギーセンター東辺から南辺にかけては、工事範囲の大半が既調査区内に収まる。また南辺では擾乱を受けている部分も多く、第12次調査地点で確認されている遺構の連続が確認できなかったものもある。さらに調査範囲は管路敷設の掘り方内という制約上、上端幅約1m前後、下端幅約0.9m前後と狭く、また南辺西側から東辺北側にむかって掘削深度を減するため、遺構を確認できたのは40ライン以西であった。特に柱穴や井戸が確認された44ライン以西については精査に努めた。

b. 層序

ここでは掘削深度が大きく、包含層の状況を良好に把握できた44ライン西側の状況をみておきたい。なお、調査区東半は掘削が浅く、擾乱も著しかったため、地形復元のための十分な情報は得られていない。1層は近・現代の造成土、2層は近世～近代の包含層と考えられる。3層は茶褐色砂質土で中世の包含層である。4層は暗茶褐色砂質土で中世の包含層と考えられる。井戸、ピットは4層上面で検出している。5層以下では遺構や遺物は確認されなかったが、隣接する第12次調査地点の成果を参考にすれば、5～7層は古墳時代の包含層、8・9層は弥生時代の純粋層と捉えられる。

c. 遺構

44ライン以西でピット5基、井戸1基、40ライン付近の南壁断面で溝2条を確認した。いずれも中世の遺構である。



図29 第12次調査地点で検出した中世の遺構との位置関係 (縮尺1/400)

ピット 検出した5基のうち、P1～3の3基に礎石と考えられる縄を内包している。P1、P2は4層で検出した。P1は直径約55cm、深さ約30cmの梢円形のピットである。人頭大強の縄2個を平滑な面が上面となるように置く。縄上面の標高は約1.1m、底面の標高は約0.8mである。P2は一辺約45cm、深さ約20cmの隅丸方形を呈するピットである。板石状の縄を4個収め、P1同様、縄の平滑な面が上面となるように据えている。縄上面の標高は約1.0m、底面の標高は約0.8mである。P3は44ラインより西へ約0.5mの南壁断面で確認した。3層上面から掘削される。底面の標高は約0.65m、ピット内に残る縄の上面の標高は約0.7mである。直径は約50cmであり、P1、2とはほぼ同規模である。P1、2の間隔は約2m、P2、3は約6mでほぼ直線上に並ぶため、これらのピットは柱間約2mの礎石建物の柱穴と考えられる。ただしP1、2とP3では縄の上面で約30cmの比高があること、石材の入り方が異なることから、P3は別の礎石建物の柱穴となる可能性もある。第12次調査の範囲では、この礎石建物に対応するようなピットは分布しておらず、建物の棟数や規模については今後の調査によって明らかにする必要がある。

井戸 45ライン付近で確認した井戸は第12次調査で検出した井戸の西側に連続する部分である。4層上面で検出した。検出面の標高は約1m、確認できた最も深い部分の標高は約-1.2mである。井戸は直径約3mになるものと推測される。井戸の上部には大型の縄が乱雑に入っている。周囲に石材ではなく、石組とは考えがたい。その下部では板材を用いた井戸枠が確認された。井戸枠は厚さ約1cmの板材を縦位に置き、その内側に厚さ約3cm

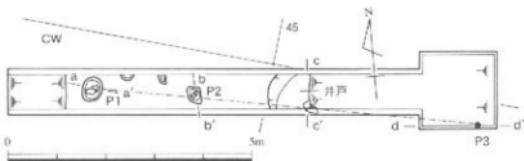


図30 44ライン以西の遺構詳細図（縮尺1/100）

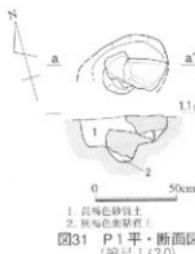
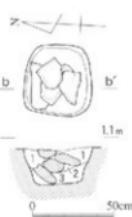
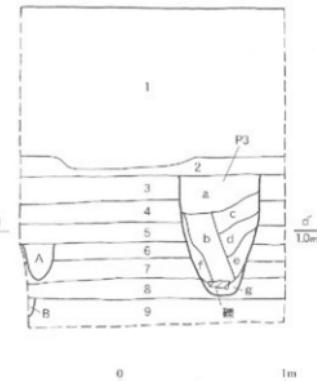
図31 P1平・断面図
(縮尺1/30)図32 P2平・断面図
(縮尺1/30)

図33 基本土層・P3断面図 (縮尺1/30)

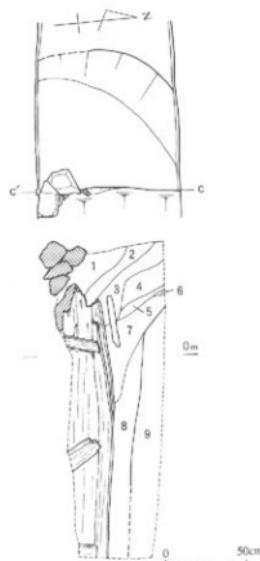


図34 井戸平・断面図 (縮尺1/100)

の柄を切った横木を渡して板材を押さえる組み合わせ式の構造である。調査区の幅が狭く、これ以上の掘削は危険であると判断し、埋め戻して現状で保存した。したがって井戸枠を構成する部材の取り上げはできなかった。

d.まとめ

今回の調査区は第12次調査地点隣接地であり、その調査成果をほぼ追認できた。また、第12次調査地点では溝で区画された南西の範囲に礫石建物となるものを含むピットが密集しているが、その範囲がさらに西に広がることが明らかになったことは新たな成果であったといえよう。

（野崎貴博）

第3節 鹿田遺跡の研究

1. 鹿田遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭の集落について

光木 順

a. はじめに

2002年に実施した鹿田遺跡第13次調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭¹⁾の広範囲にわたる3箇所の土器満まりを検出した。鹿田遺跡の当該期の具体相を考える上で、重要な発見となった。遺構や遺物に関する詳細については、整理途上の段階であるため正報告の中で述べたい。ここでは鹿田遺跡においてこれまで確認されている当該期の遺構・遺物について整理し、その中に本調査地点の様相を位置づける試みを行いたい。

鹿田遺跡においてこの時期の遺構・遺物が確認されたのは、1983年～1984年にかけて行われた第1次調査（外来診療棟）²⁾と1983年の第2次調査（NMR-CT 室）³⁾であり、その後も1・2次調査に接する第5次調査地点（管理棟）⁴⁾や第8次調査地点（RI 治療室）⁵⁾で確認された。また、構内の西部に位置する第6次調査地点（アイソトープ総合センター）⁶⁾や第7次調査地点（基礎研究棟）⁷⁾、南部に位置する第12次調査地点（エネルギーセンター）⁸⁾においても遺跡のひろがりが確認された。

こうした従来の調査研究成果の中に、第13次調査で確認した様相をどのように位置づけることができるだろうか。以下ではこれまでの成果をまとめながら、当該期における鹿田の集落の具体相と、提起されるいくつかの問題について考えたい。

b. 弥生時代終末から古墳時代初頭の鹿田遺跡の全体的様相

これまでの調査で検出した遺構について調査ごとにまとめたものが、図35と表2である。これらをみると、鹿田遺跡における住居や溝などの分布のあり方がある程度わかる。

住居や建物など、人びとが居住していたと考えられる空間は、構内北側の第1次調査地点と第5次調査地点、西側の第7次調査地点で確認している。

第1次調査地点は微高地の中央部付近に位置する。この調査区では9棟の竪穴住居が検出された。それらの住居は、切り合い関係から同時に併存したものは3棟以下であると考えられている⁹⁾。また、住居と井戸がセットとなって存在する状況が確認され、「家」単位の井戸の使用が想定されている。明確な土器満まりも2箇所検出されており、住居に接して形成されたものと考えられる。

第5次調査地点では、調査区の南東隅に1基の竪穴住居が検出された。この竪穴住居は、外来診療棟の住居群とはやや離れた場所にあるといえる。調査区の北側には溝と井戸が検出されている。

上記の2地点とは異なり、建物が検出されたのが第7次調査地点である。4棟の竪穴住居とともに3棟の建物が確認されている。それらの住居と建物は平面的に向きを揃えて配備されており、まとまった群をなすと考えられる。

一方、溝は住居群や建物群とはやや離れた場所において検出されている。すなわち、第5次調査地点の北側や第1次・第6次・第8次・第13次調査で溝が確認されている。第13次調査においては、調査区の中央に溝地が形成されており、居住には不向きな土地となっている。

このようにみると、鹿田の集落は現状において次のように復元できるだろう。すなわち、数件程度の規模で群をなした竪穴住居ないし建物が点在し、そうした居住域の間に溝が配されていた様相が想定できる。居住域とし

表2 鹿田遺跡の弥生時代終末から古墳時代初期の遺構一覧

| 調査地点 | 主要な遺構 | | | | | | 文献 |
|----------------|-------|----|----|----|----|----|-----|
| | 住居 | 植物 | 溝 | 土器 | 柱穴 | 廻廊 | |
| 1次(外東部南側) | 9 | 9 | 14 | 1 | 2 | | 註2 |
| 2次(NMR-CT室) | | | 4 | | 3 | | 註2 |
| 3次(管理棟) | 1 | | 6 | 2 | | | 註4 |
| 5次(アイソトープ) | | | 1 | 8 | | | 註6 |
| 7次(基礎研究棟) | 4 | 3 | 1 | 70 | ○ | 1 | 註7 |
| 8次(園芸施設) | | | | 1 | | | 註5 |
| 12次(エネルギーセンター) | | | ○ | ○ | 2 | | 註8 |
| 13次(総合教育研究棟) | | | 1 | 9 | 3 | | 本研究 |

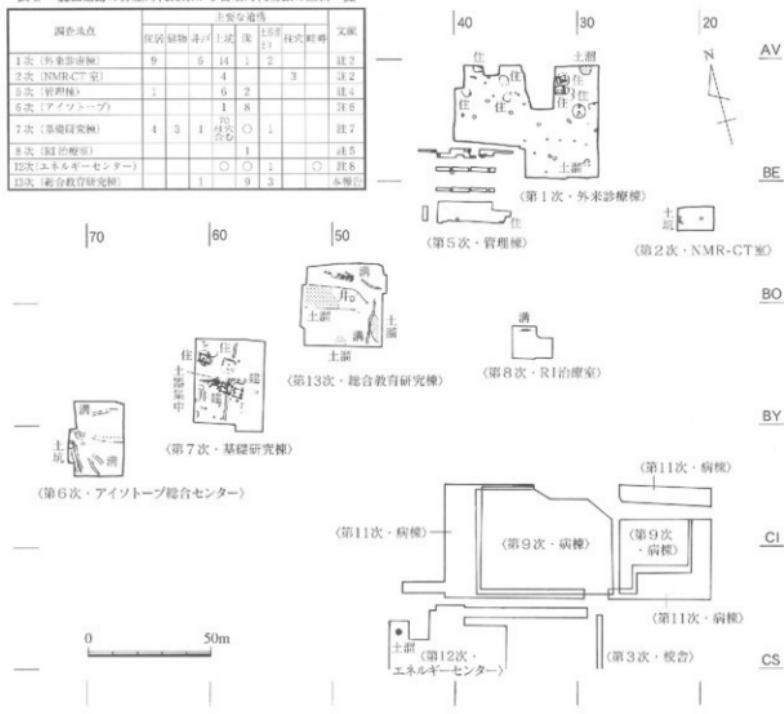


図35 鹿田遺跡の弥生時代終末から古墳時代初期の遺構全体図(縮尺1/2,000)

では第1次調査地点、第5次調査地点南側、第7次調査地点といふ3箇所において現状で想定できる。これらの居住域の周辺に、溝や窪地が形成されている。

したがって、広範囲の土器窪まりが検出された第13次調査地点は、居住域の中間地帯ないしは縁辺部に相当すると捉えることができる。

c. 鹿田遺跡第13次調査の意義

これまでの調査成果と第13次調査で得られた知見をあわせて、当該期の鹿田遺跡の様相を上記のように復元した。鹿田遺跡第13次調査は、居住域とその周辺部の関係を捉える上で重要なデータを提供するものといえる。最後に、鹿田集落を考える上でポイントになると考えられる問題について、第13次調査の成果をもとに述べていきたい。

まず、土器窪まりについては、鹿田の様相をみると居住域内に形成されるパターンと、居住域から離れた周辺部に形成されるパターンがあることがわかる。前者は外来診療棟と基礎研究棟で確認できる。後者については、第13次調査地点が該当するだろう。第13次調査では窪地に2箇所、微高地に1箇所の土器窪まりが形成されてい

た。調査区内および近接する調査地点の状況を勘案すると、居住域から離れた場所に形成されたものと捉えることができる。この2つのパターンについては、土器溜まりが形成される要因自体にちがいが存在する可能性もあるだろう。

上器溜まりと同様に、井戸についても居住域内につくられる場合と周縁部につくられる場合をみてとることができる。前者のパターンとしては、鹿田遺跡第1次・2次調査の報告書で述べられていた、「家」単位で井戸が設けられる状況が挙げられる。一方、第13次調査地点で明らかとなったのは、後者のパターンである可能性が高い。13次調査の井戸は窪地の範囲内にあり、居住域から離れて築かれている。

このようにみると、第13次調査地点は、居住域の周縁部における空間利用のひとつのあり方を示唆するものといえる。こうした周縁部に形成される土器溜まりや井戸がどのような意味を有するのかという点については、それぞれの遺構に関するデ・タの検討や出土遺物の詳細な分析を踏まえた上で、居住域と対比しながら改めて論じる必要がある。

さて、当該期の鹿田集落の歴史的性格を追究する際、広く地域社会の動向の中に鹿田遺跡を位置づける必要がある⁹。この時期の土器溜まりに関しては、他の遺跡との比較研究が重要となると考えられる。例えば、窪地にまとまって土器を廃棄する状況は、岡山市津寺遺跡でも認められる。津寺遺跡では、古・前・Ⅰ期の段階で窪地や廃棄された溝に土器溜まりが形成されるに対し、古・前・Ⅱ期の段階になると廃棄した住居や水田、溝に多量の遺物が廃棄される状況が明らかになっており、後者の段階については集落廃絶時の何らかの祭祀行為が想定されている¹⁰。第13次調査地点における土器溜まりの形成も、広域に発生した現象のひとつとして捉えることができるだろう。高橋謙は当該期の土器溜まりが単純型式で構成されることから、多数の土器を廃棄する行為が、上層の更新と広域にわたる新たな居住地利用の割り直しが行われたことを想定している¹¹。第13次調査で検出した土器溜まり素材に、遺物と出土状況の両面からその形成過程を明らかにする中で、その歴史的意義を論じていきたい。

このように第13次調査地点は、集落内における空間利用のあり方と、集落間における共通する現象の意味を追究する上で、有益なデータを提供するものといえる。

d. おわりに

今回は、鹿田遺跡第13次調査によせて、鹿田における弥生時代終末から古墳時代初頭の集落の具体相について基礎的な整理を行った。本格的な整理作業はこれからであり、旨及可能な部分は限られていたが、当該期の社会復元を行うためのひとつのステップとしたい。

註

- (1) 土器溜まりから出土した土器については現在整理中であるが、鹿田・古・1期（山本1988）におむね相当するものと捉えている。山本況良 1988 「鹿田遺跡の弥生～古墳時代初期の上層」「鹿田遺跡Ⅰ」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.385-395
- (2) 古留秀敏・山本况良編 1988 「鹿田遺跡Ⅰ」「鹿田遺跡Ⅳ」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (3) 許2
- (4) 松木武彦・山本况良編 1993 「鹿田遺跡3」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (5) 小林賀樹理 2000 「岡山大学構内遺跡調査研究年報16」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (6) 松木武彦・山本况良編 1997 「鹿田遺跡4」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (7) 山本况良 2000 「鹿田遺跡第7次調査」「岡山大学構内遺跡調査研究年報16」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.16-18
- (8) 山本况良 2001 「鹿田遺跡第12次調査」「岡山大学構内遺跡調査研究年報18」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.19-26
- (9) 山本况良 1988 「鹿田遺跡における集落構造とその変遷」「鹿田遺跡」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.373-384
- (10) 山本况良 1993 「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団—鹿田集落の歴史的位置づけー」「鹿田遺跡3」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.147-156
- (11) 丸山行雄 1998 「古墳時代前期の津寺遺跡」「津寺遺跡5」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127 岡山県教育委員会 pp.712-717
- (12) 高橋謙 1988 「弥生時代終末期の土器溜まり」「研究報告9」岡山県立博物館 pp.1-32

2. 鹿田遺跡第5次調査土壌15から出土した炭化穀粒について

元九州大学教授 小西猛朗

はじめに

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部にある岡山大学鹿田地区に広がる繩文から近世に至る複合遺跡である。第5次調査で弥生時代～中世に属する遺構では戸井7基、土塙28基、溝54条などが検出された。調査の対象とした土塙15は上部で一边140cmの不整形の隅円方形をなし、深さ55cmの底部では径65～70cmの円形となっていた。そして、底部に近いところで炭・灰層が見られ、その中に羽やイネ科植物の茎など水田と関係する植物遺体が多く含まれていた。この土塙から土師器の椀、皿、杯のほか、瓶や各種の木器などが出土し、それらの遺物から埋められたのは平安時代末期、11世紀中頃～後半と考えられる。

この報告では、鹿田遺跡土塙15で出土した炭化穀粒のうち多くの粒について測定可能な米と大麦の粒について形と大きさを調べるとともに、日本の各漁の遺跡で発掘された炭化穀粒の計測値と比較して、鹿田遺跡における当時の農耕技術を作物育種学的見地から考察を試みた。

a. 試料と調査方法

調査試料とした鹿田遺跡の炭化穀粒は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターで発掘し、水洗した後、風乾して貯蔵していたものである。

出土した炭化穀粒については、精米（糊の付着した玄米）、玄米、大麦、小麦とその他の夾雜物とに分別して、全体の粒に対する割合を示した。

粒の大きさの測定には、壊れやすいものがあったので写真撮影した後、粒長と粒幅を測定し、実際の値に換算した。なお、参考に加えた試料については順次説明する。

各試料について、粒の大きさに関する数値から平均値、分散、標準偏差および変異係数を求めた。また、各試料の平均値間の有意差検定は分散分析からDuncanの多重範囲検定法により、5%水準で比較した。



写真8 鹿田遺跡第5次調査土塙15で出土した炭化物

b. 調査結果と考察

①炭化穀粒と混入している夾雜物

出土した炭化物は写真8に示すように、穀粒には初穂を被った初米、玄米、大麦、小麦があり、夾雜物として雑草種子や焼け焦げて判別不能な植物の断片などが多く混じっていた。これらの炭化穀粒と他の夾雜物を分け、さらに炭化穀粒を初穂の付いた初米、初穂のない玄米、大麦、小麦に細分し、それらの粒数割合を求めた。

表3 炭化穀粒と夾雜物との割合 (%)

| 初米 | 玄米 | 大麦* | 小麦 | その他** | 判別不能 | 調査粒数 |
|-----|------|------|-----|-------|------|------|
| 1.2 | 22.1 | 32.2 | 4.3 | 14.5 | 25.8 | 318 |

*大麦には皮壳と穀壳が含まれる。**初穂や雑草の種子が混在。

表3から明らかなように、炭化穀粒には大麦と玄米が多く、小麦と初米は極めて少ない。また、焼け焦げて著しく変形したものや一部が碎けたものなどの判別不能な炭化物も多く見られた。この鹿田遺跡で出土した炭化穀粒の多くは焼けて、直接ノギスに挟んで粒の大きさを測定できないほど粒が軟化したり、他の夾雜物と癒着した粒が多かった。そこで出来るだけ癒着のない正常な形の粒を選んで供試した。

②炭化米の粒形

この鹿田遺跡の土壌15で出土した遺物から穀粒が埋められたのは11世紀のものと推定されている。そこで参考資料として比較的年代と発掘場所が近く、しかも多くの炭化米について測定してある福岡県小郡市の小郡遺跡の炭化米（7世紀後半と推定）の測定値を佐藤敏也氏の著書「日本の古代米」から引用した。また、現代の玄米として「朝日」を用いた。この品種は明治42年、京都で在来種の中から選び出されたものを、さらに岡山県農業試験場で純系選抜を加えて昭和6年に育成した古い品種である。供試した「朝日」の玄米は岡山大学資源生物学研究所助教授の前川雅彦博士が実験圃場（倉敷市）で栽培、収穫したものを頂いた。

ここで鹿田遺跡の炭化米は、粒の表面を縱に走る筋（稜線）が明瞭で、しかも胚芽が残っていることから、拘精（精白）されていない炭化玄米であることは明らかである。さらに、初穂や初穂の付いた初米が出土することから、この炭化米が玄米の状態で焼かれたのではなく、初米として、あるいは稈穂のまま蒸し焼きされたとも考えられる。この土壤での遺物の出土状況を説明した鹿田遺跡第5次調査報告書によれば、「徳付きのまま燃やされ、蒸し焼き的な状態を生じていることが想定される」とある。

粒 長

表4には各試料についての粒長の平均値、分散、標準偏差および変異係数を示し、さらに平均値間の有意差検定（5%水準）の結果も掲げた。

表4 出土した炭化米および玄米の粒長の比較 (mm)

| 試料番号 | 遺跡名 | 調査粒数 | 平均値 | 分散 | 標準偏差 | 変異係数(%) | 有意差検定* |
|------|--------|------|------|--------|--------|---------|--------|
| 1 | 鹿田遺跡 | 63 | 4.55 | 0.2177 | 0.4666 | 10.25 | a |
| 2 | 小郡遺跡 | 100 | 4.60 | 0.1779 | 0.4218 | 9.16 | a |
| 3 | 朝日（玄米） | 100 | 5.12 | 0.0224 | 0.1498 | 2.92 | b |

*平均値の有意差検定 a ≠ b

今回調査した鹿田遺跡で出土した試料1と参考とした小郡遺跡での試料2の炭化米の例には粒長の平均値に間

して有意な差異がなく、分散、標準偏差および変異係数にも大きな差は認められなかった。これに対して「朝日」の玄米は炭化米に比べて粒は長く、分散と標準偏差は小さく、変異係数は3程度と極めて小さいことから粒長の良く揃った米である。炭化米と現代の玄米と比較してみると、炭化によって粒長が短くなるようであるが、炭化に伴う粒形の変化については考察の項で詳しく触ることにする。

炭化米で粒長の変異が大きくなるのは遺伝的に異なるものが混在しているか、栽培環境の乱れによるものか、さらに炭化の程度の違いによって粒長の短縮程度に差異を生じたとも考えられる。そこで、各試料別に粒長の変異の様相を図36に示した。鹿田遺跡と小郡遺跡の炭化米の粒長は互いに大きな変異を示し、粒長5.2mm以上の炭化米とそれ未満のものとに分けられる。すなわち、前者の長粒群は佐藤(1971)の粒長5.3mm以上の第II群に属し、後者のものが5.3mm未満の短粒の第I群に入る。さらに、鹿田遺跡の炭化米は第I群の中でも複数の頻度分布の山が見られることから、遺伝的に粒長の異なるものが混在していたと考えられる。また、鹿田・小郡の両遺跡の炭化米で第II群の長粒種が見られたことは注目に値する。一方、遺伝的に齊一な「朝日」の玄米では、粒長の頻度分布は正規分布に近い形を示した。

粒幅

供試した試料についての粒幅の変異を表5に掲げた。鹿田遺跡の炭化米は明らかに粒幅が小さく、「朝日」の玄米が最も大きい粒幅の値を示し、小郡遺跡の炭化米がそれの中間の値であった。また、粒幅の分散や変異係数は玄米より炭化米の方が大きい値となった。この炭化米の粒幅の大きな変異を示した原因が遺伝的なものか、生育環境によるものか、炭化程度の差なのか、さらに炭化による粒の膨らみが関与しているかは明らかでない。しかし、先述のように炭化米では遺伝的に異なるものが混在していることは確かである。

表5 出土した炭化米および玄米の粒幅の比較 (mm)

| 試料番号 | 遺跡名 | 平均値 | 分散 | 標準偏差 | 変異係数(%) | 有意差検定* |
|------|--------|------|--------|--------|---------|--------|
| 1 | 鹿田遺跡 | 2.42 | 0.0831 | 0.2883 | 11.90 | a |
| 2 | 小郡遺跡 | 2.75 | 0.1228 | 0.3504 | 12.27 | b |
| 3 | 朝日(玄米) | 2.97 | 0.0131 | 0.1143 | 3.84 | b |

*平均値の有意差検定 a ≠ b

粒形指数

粒の形を一次元的に示すために、粒長/粒幅比を用いることが多い。しかし、粒幅は環境の影響を受けやすく、粒長より粒幅の方が小さい値であることから、求めた粒長/粒幅比の変異は大きい。そこで、ここでは逆に

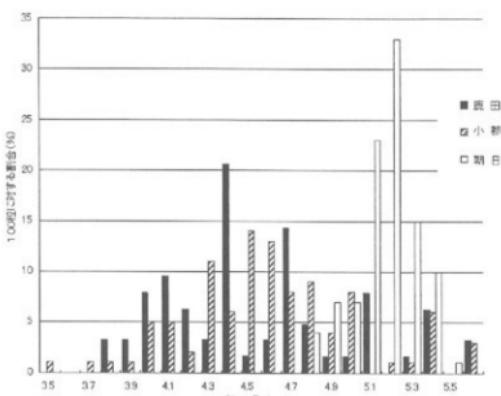


図36 試料別に示した米の粒長の変異

粒幅／粒長比を各粒について求めて粒形指数として示した。この粒形指数が大きいものは円に近い梢円形、値が小さいものは細長い梢円形であることを示す。また、この指數は粒形とともに粒の充実程度を表すものもある。

表6 出土した炭化米および玄米の粒形指標の比較

| 試料番号 | 遺跡名 | 平均値 | 分散 | 標準偏差 | 変異係数(%) | 有意差検定* |
|------|--------|------|--------|--------|---------|--------|
| 1 | 扇田遺跡 | 0.54 | 0.0042 | 0.0654 | 12.20 | a |
| 2 | 小瀬遺跡 | 0.60 | 0.0080 | 0.0892 | 14.79 | b |
| 3 | 朝日(玄米) | 0.58 | 0.0006 | 0.0251 | 4.31 | b |

*平均値の有意差検定 a ≠ b

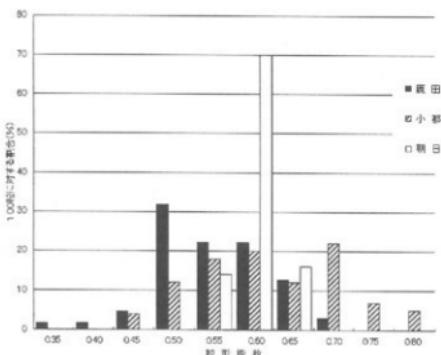


図37 試料別に示した米の粒形指数の変異

か、さらに炭化程度によるものかは明らかでない。しかし、前述の粒長などの変異から見て、遺伝的に異なったものが混在して栽培されていたとみることができる。さらに炭化米については焼けこげたものも見られたことから、これも稲形指数の変異を高めた原因とも考えられる。

書 宿

まず、米が炭化によって粒の形がどのように変化するかについて考えてみる。佐藤(1971)は奈良県唐古跡跡から出土した炭化米は長鶴稻で、その粒長が1.32mmで、現在栽培されている長鶴稻(二枚稻)の粒長が4.55mmで極めて近い数値であることを報告している。これから炭化による粒長の短縮率は5.1%と推定される。一方、安田(1927)は栽培されている有名な品種の玄米を蒸し焼きにして粒の大きさを測定した。盛永(1969)は対応する品種の玄米の大きさと比較して、粒長で16~19%、粒幅で21~27%短縮するとした。しかし、炭化米の中には玄米が焼けた粒の内部が海綿状に膨らみ、粒の形が変形したものもある。こうした点から、炭化による粒形の変化に関しては詳細な検討が必要である。

つぎに、炭化米の粒長について佐藤(1971)は全国の炭化米の大きさについて調べ、5.3mm以下の短粒のものを第Ⅰ群、それ以上の長粒を第Ⅱ群として分類した。図36で示したように、鹿田と小郡の両遺跡でも第Ⅰ群の中に第Ⅱ群の炭化米が混じっていた。この第Ⅱ群の炭化米は弥生時代の福岡県の津古牟田遺跡や須田遺跡からも

表6に示した粒形指数によれば鹿田遺跡の炭化米が供試材料の中で最も細長く、小郡遺跡のものは「朝日」の玄米の粒形指数との差は認められない。しかし、各試料内の変異は炭化米の方が明らかに大きい値を示している。この関係を詳しく見るために、各試料内の粒形指数による頻度分布を図37に示した。「朝日」の粒形指数の変異は極めて小さく、多くの粒が0.6に集中している。これに対して炭化米の変異は大きく、鹿田遺跡の炭化米は粒形指数が低い方に大きく歪み、小郡遺跡のものは0.6を中心に向方に長く尾を引く。この大きな変異が遺伝的なものか、栽培環境の不安定さによるものか。

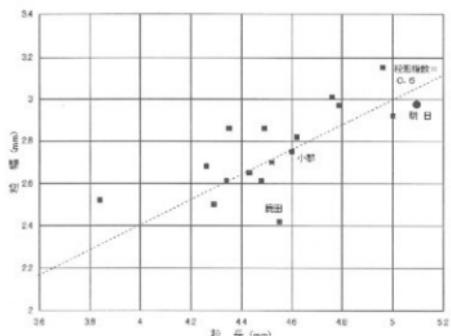


図38 奈良時代～江戸時代の炭化米の粒長と粒幅の関係

ものを加え、粒形を比較してみた(図38)。対象とした炭化米の測定値は16試料によるものであり、その多くは粒形指数=0.6の線の近くに散布する。しかし、塚田遺跡の炭化米は明らかに粒形指数=0.6の線から下に外れ、粒長に対して粒幅が小さい。このことは図37からも明らかなように、粒形指数の頻度分布が低い方に歪み、充実の良くない瘦せ粒が多かったことによる。また、塚田遺跡の炭化米を見る限りでは、玄米で比較的長粒のものや瘦せた粒が出土することから、おそらく幾種類かの遺伝子型(品種)のものが混合状態で強く焼かれたのではないかと推測する。

③炭化大麦の粒形

大麦は穂軸しても粒から穎が離れない皮麦と、小麦のように裸の粒となる裸麦とに分類される。塚田遺跡の炭化した大麦粒をみると、皮麦と裸麦とが混在していた。表7に示すように調査した炭化粒の多くは裸麦で、皮麦も混じている状態である。皮麦のほとんどの粒は裏面の溝の部分には穎が残っているが、表面では穎が大部分剥離して胚が露出しているので、粒の形の測定には裸麦と同じように測定しても支障はない。

ところで、日本の大麦には溝性と呼ばれる半矮性の品種があり、その溝性遺伝子は粒をはじめ葉や茎、芒などのあらゆる器官の長さを短縮するが、幅や厚さには影響しない(高橋1942)。この塚田遺跡から出土した大麦粒の粒形から溝性の粒と認められるものもあるが、粒長の変異は図39に示すように並性(正常)の短い粒と溝性の長い粒が互いに重なり連續的であるので、1

出土している(和佐野1993)。さらに、佐藤(1971)は河内長野市で見出された文政10年(1827)の備荒米を調べ、その多くが第II群の玄米で赤米の公算が大きいと述べている。また、長野県に残る江戸時代の備荒米でも第II群の米が見られ、2年続きの凶作に耐える稲として、このような品種が選ばれたのかも知れない。

塚田遺跡から出土した炭化米は平安時代末(11世紀中頃～後半)と考えられている。そこで、佐藤(1971)が報告している日本の各地から出土した炭化米の試料の中から奈良時代～江戸時代のもので、10粒以上の炭化米について粒長と粒幅を測定した

表7 出土した炭化大麦粒の皮麦と裸麦の割合(%)

| 皮麦 | 裸麦 | 判別不能 | 調査粒数 |
|------|------|------|------|
| 24.7 | 57.3 | 18.0 | 89 |

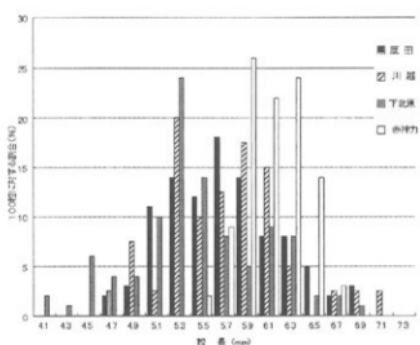


図39 試料別に示した大麦の粒長の変異

鉢毎に粒形だけで並性と渦性の粒を完全に識別することは困難である。しかし、この炭化した穀物の中には明らかに粒の短い渦性のものがみられることから、穀皮については長粒の並性の粒と短粒の渦性の粒が混在していると言える（写真9参照）。これに対して、皮皮では調査した粒に関する限りでは渦性の粒は認められず、すべてが長粒で並性の粒と思われる。

粒 長

炭化米に較べて炭化大麦の場合、多数の粒について測定した報告は極めて少ない。鹿田遺跡の炭化した大麦粒と比較するものとして、奈良～平安時代頃の埼玉県川越市第一中学校敷地内住居跡（仙波古代集落遺跡、ここでは便宜上、川越遺跡という）および千葉県君津郡湊町（現在高津市）更和下北原遺跡で出土した大麦粒がある（直良1956）。さらに比較のために、現代の渦性穀物品種「赤神力」を加えた。川越市の炭化粒については測定した100粒のうち40粒は大麦であるが、それ以外のものは形態的に他の穀類の種子のようである（直良1956）。また、下北原遺跡の大麦については1000粒についての値が記載してあるが、ここでは最初の100粒の測定値を引用した。

表8に示すように、粒長の平均値に関しては試料1～3の炭化大麦の間には有意な差は認められないが、「赤神力」の玄麦より明らかに小さい値を示す。粒長の変異については鹿田遺跡の炭化粒では小さく、下北原遺跡のものは変異が最も大きい。このことは図39に見るように、いずれの炭化大麦も粒長の可成り異なる幾つかの群が混在して変異を拡大し、特に下北原遺跡のものには極端に短い粒が混じっていた。さらに、川越遺跡から出土した大麦粒や下北原遺跡の炭化粒の写真（直良1956）を見る限りでは、粒長のはか粒幅の狭い雑草の種子のようなものなど、粒形の大きく異なるものが混在していた。

表8 出土した炭化大麦および玄麦の粒長の比較（mm）

| 試料番号 | 遺跡名 | 調査粒数 | 平均値 | 分散 | 標準偏差 | 変異係数(%) | 有意差検定* |
|------|---------|------|------|--------|--------|---------|--------|
| 1 | 鹿田遺跡 | 68 | 5.69 | 0.2220 | 0.4712 | 8.29 | a |
| 2 | 川越遺跡 | 40 | 5.67 | 0.2890 | 0.3376 | 9.49 | a |
| 3 | 下北原遺跡 | 100 | 5.42 | 0.3422 | 0.5850 | 10.79 | a |
| 4 | 赤神力（玄麦） | 100 | 6.03 | 0.0691 | 0.2630 | 4.39 | b |

*平均値の有意差検定 a / b

粒 幅

炭化した大麦は玄麦の「赤神力」より有意に粒の幅が狭く、なかでも川越遺跡の炭化麦は他のものより明らかに狭い（表9）。このことは粒幅の狭い粒が多く、粒幅の頻度分布は狭い方に大きく歪んでいた（図40）。

表9 出土した炭化大麦および玄麦の粒幅の比較（mm）

| 試料番号 | 遺跡名 | 平均値 | 分散 | 標準偏差 | 変異係数(%) | 有意差検定* |
|------|---------|------|--------|--------|---------|--------|
| 1 | 鹿田遺跡 | 2.81 | 0.0939 | 0.3065 | 10.90 | a |
| 2 | 川越遺跡 | 2.63 | 0.0705 | 0.2654 | 10.08 | b |
| 3 | 下北原遺跡 | 2.85 | 0.0827 | 0.2876 | 10.08 | a |
| 4 | 赤神力（玄麦） | 3.65 | 0.0378 | 0.1944 | 5.33 | c |

*平均値の有意差検定 a ≠ b ≠ c

鹿田遺跡の炭化大麦の粒幅の変異は他の遺跡のものより大きい。これは図40から明らかのように、粒幅の少し廣い粒が混じっていることによる。炭化粒を観察してみると、焼けて粒が若干膨らんだよう見える粒もあるが、遺伝的に幅広の粒が混入していることが判る。

粒形指數

大麦の場合も、粒幅を粒長で除した値を粒形指數として表した。粒形指數については炭化大麦の間で有意な差異は認められないが、玄麥の「赤神力」より指數は明らかに低い値を示した。このことは、完全に熟していない粒が炭化によって粒長に比して粒幅が大きく短縮したと

見ることも出来るが、元々粒の細い粒が炭化したと考える方が妥当のようである。すべての遺跡の大麦粒が未熟で炭化したとは考え難いからである。

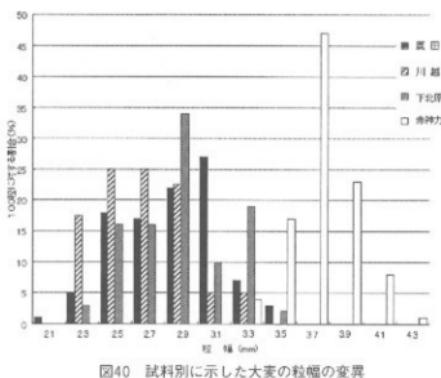


図40 試料別に示した大麦の粒幅の変異

表10 出土した炭化大麦および玄麥の粒形指數の比較

| 試料番号 | 遺跡名 | 平均値 | 分散 | 標準偏差 | 変異係数(%) | 有意差検定* |
|------|---------|------|--------|--------|---------|--------|
| 1 | 鹿田遺跡 | 0.50 | 0.0029 | 0.0542 | 10.90 | a |
| 2 | 川越遺跡 | 0.47 | 0.0031 | 0.0555 | 11.89 | a |
| 3 | 下北原遺跡 | 0.53 | 0.0036 | 0.0600 | 11.32 | a |
| 4 | 赤神力(玄麥) | 0.61 | 0.0014 | 0.0372 | 6.15 | b |

*平均値の有意差検定 a ≠ b

なお、炭化した小麦については粒数も少なく、他の遺跡からの出土報告例も極めて少ないので、今回は取り上げないことにした。

考 察

現時点でも最も古い炭化大麦が出土したのは、福岡市早良区の四箇遺跡からの绳文後期と推定される裸麦1粒である（笠原1987）。その後、弥生時代に入ると九州から関東の各地で炭化した大麦粒が出土している。福岡市博多区の諸岡遺跡では弥生前中期の皮麦が26粒出土し、21粒の粒長と粒幅の測定値が報告されている（粉川1977）。これらの値および添付されたスケッチの2粒と写真の5粒を見るとすべて並性皮麦である。関東では横浜市南区から保土ヶ谷区にかけての弥生後期前葉の住居址から皮麦121粒と裸麦74粒が出土し、皮麦7粒と裸麦3粒の粒長と粒幅の値が示されている（笠原1984）。これらの測定値から見ると並性と渦性の両種が混在しているようである。その後、既に述べた埼玉県川越市の川越遺跡や千葉県富津市の下北原遺跡からの炭化大麦が多数出土している。直良（1956）の示す第65図には川越遺跡と下北原遺跡からの炭化大麦各2粒の表裏の写真が掲載している。これらの写真に関する限りでは、川越遺跡の大麦は渦性の裸麦であり、下北原遺跡のものは並性皮麦と見ることが出来る。岡山市の津寺遺跡では8世紀のものと推定される多数の裸麦が出土し、19粒の測定値が報告され

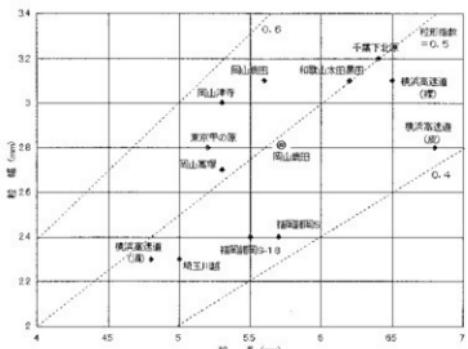


図41 弥生前期～中世の炭化大麦の粒長と粒幅の関係

土した大麦粒の汚真と測定値から見ると、溝性の大麦は最も古いもので横浜市で出土した弥生後期前葉の炭化粒の中に認められている。ここで岡山県における大麦についてみると、裸麦については8世紀には既に津守遺跡の炭化大麦から溝性の種子が見出され、本報告で調査した鹿野遺跡の大麦からも並性に混じて溝性の裸麦が出土している。しかし、皮麦では11世紀頃でもまだ溝性の炭化粒は見出されていない。

つぎに、粒形について鹿田遺跡の大麦と他の遺跡の大麦とを比較してみる。図41から明らかのように、鹿田遺跡の大麦（◎）はほぼ真ん中に位置している。炭化大麦の場合、前述のように並性と渦性が混在するとき、それらの混合割合によって粒形に関する平均値は変動するし、観察によって粒形だけで並性と渦性を正確に識別することは困難である。こうした点から、單に大麥粒だけに止まらず、稈軸やそれに付着した底莖なども並・渦性の識別に有力な情報を与えることもあるので、採集した土の水洗に際して注意を払うべきであろう。

ている（松谷1994）。粒長と粒幅の値から推測すると並性と溝性が混在しているようである。さらに、本報告と同じ鹿田遺跡の別の場所の12世紀代の井戸2から炭化した皮苔2粒が出土し、粒の長さ、幅および厚さの測定値が報告され写真が添付してある（松谷1990）。これらは長粒で、並性であることが判る。

渦性は野牛原である並性の大麦から單一の劣性遺伝子突然変異 (U_{2u} ・ u_{2u}) によって生じたものであり、その分布域は日本の關東以西の地域と朝鮮半島南部に限られる（高橋1959）。上述の多くの品種から出

表11 図41に示した炭化大麦出土遺跡一覧

| 出土遺跡 | 推定年代 | 調査枚数 | 引用文献:記載頁(発表年次) |
|---------------|----------|------|---------------------------------|
| 福岡市諸岡(堀留S) | 弥生前期末 | 6皮 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書38: 115 (1977) |
| 福岡市諸岡(堀留S-18) | 弥生前期末 | 15皮 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書38: 116 (1977) |
| 横浜市道高速2号線 | 弥生後期前葉 | 3桿 | 横浜市道高速2号線理文発掘調査6: 56 (1984) |
| 横浜市道高速2号線 | 弥生後期前葉 | 3皮 | 横浜市道高速2号線理文発掘調査6: 56 (1984) |
| 横浜市道高速2号線 | 弥生後期前葉 | 4皮 | 横浜市道高速2号線理文発掘調査6: 57 (1984) |
| 東京都中野区甲の原 | 弥生後期後半 | 3皮 | 東京考古5: 81 (1987) |
| 千葉県富津市下北原 | 奈良・平安時代頃 | 13皮 | 真良信夫「日本古代農業癡述史」: 281 (1956) |
| 埼玉県川越市 | 奈良・平安時代頃 | 100桿 | 真良信夫「日本古代農業癡述史」: 270-271 (1956) |
| 山口県光市阿岡 | 古墳南朝初頭 | 5桿 | 真良信夫「日本古代農業癡述史」: 268 (1956) |
| 和歌山市太田黒川 | 奈良期 | 5桿 | 佐藤故也「日本の古代米」: 201 (1971) |
| 岡山市鹿田上塚15 | 古代末~中世初頭 | 68混 | 本報告(◎) |
| 岡山市鹿田井戸2 | 古代末~中世初期 | 2皮 | 岡山大学構内道路掘削調査報告3: 103 (1990) |
| 岡山市津寺 | 平安中期 | 14桿 | 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90: 503 (1994) |
| 岡山市高塚 | 中世 | 6桿 | 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150: 159 (2000) |

c. 総合考察

遺跡から出土する炭化粒が焼けて炭化したのか、自然に炭化するものは明らかでないが、鹿田遺跡の場合は明らかに粒が焼けている。鹿田遺跡第5次発掘調査報告書（以下、報告書と略す）によれば、土壌の底の部分に多くの土筒器や木器のほか、下駄、杓子、箸などと共にイネ科植物の茎など水田関係の植物遺体が大量に出土していた。稲については大量の穂付きのまま遺構内で燃やされ、蒸し焼き的な状態で埋められていたと想定されている。このことは多くの初の付いた初米と初殻、さらに写真9で見るよう米粒の表面には縦に走る稜線が残っていることから未だ搗精していない玄米であることが判る。さらに、報告書によれば米麦のほかマクワウリ、雑穀（アワ、ヒエ、キビなど）、マメ科、ソバ、アサ、ヒヨウタン、ナスなど、さらに雑草種子やカキ、サンショウウ、センダン、ブドウまでもが出土している。こうした状況から、土壌15は祭祀性の高い土壌と推定されている。

ここで調査した炭化米と炭化した大麦について総合的に考察してみると、次のことが考えられる。出土した炭化穀粒を詳細に観察してみると、写真8からも明らかなように、可成りの量の大麦粒が混じっていることが判る。そして、その割合は炭化物全体の30%以上であり（表3）、しかも、その半数以上は裸麦であった（表7）。文献によれば、奈良朝から平安朝の初期にかけて朝廷はしばしば備荒のため麥作を奨励し、小麦より大麦の方が多かったと言われている。そして、13世紀後半には麥が水田の裏作として作られ、裏作の麥そのものは農民の取り分として租税の対象とならなかったので、備前や備後では特に二毛作が多かったことが何える（古島1956）。さらに江戸中期になども備前・備中の岡山藩での大友に対する農民の同心は高く、「備前国・備中国之内分産物帳」に大麦で32品種が記載されているのに小麦は僅か8品種に過ぎない。そして、大麦32品種のうち16品種には品種名の後に裸麦を表す「はだか」が付けられている。さらに「はだか」という文字は付かないが、現存する裸麦品種と同じ名前のものを入れると裸麦の品種数はさらに増す。因みに稻についても梗稻で88品種、糯稻で25品種が報告されていた（盛水・安田1986）。

米については上記のように、すべてが玄米で搗精した米は含まれていない。しかも図38に示したように粒幅が狭いことから粒が完全に熟しないうちに収穫され、穂付きのまま遺構内で燃やされたようである。このことは、日本では旧暦の8月1日、八朔の日に未熟な穂穂を抜き穂して収穫し、稻米、ひらい米として儀式的に供物に習慣があったこと（柳田1969）、また収穫前に抜き穂して神に供える「初穂神事」による収穫物とも考えられる。これに対して大友は完熟した粒であることから土壌15が埋め戻されたのは稻の収穫期より少し前の頃ではないかとも推測される。米や大友、小麦などのはか種々の食用作物の種子が出土することから見れば、祭祀への供物とも考えられる。鹿田遺跡では多くの井戸や土壌が発掘されているが穀物が出土したのは、この土壌15のほかに第3次発掘調査の井戸2（12世紀代）の底部からコギシギン、マクワウリ、キカラスウリ、センダンなどの種子に混じって炭化米と炭化大麦（皮麥）が2粒ずつ出土しているに過ぎない。このことから今回対象とした土壌15は祭祀に關係する特別に意味をもつものと思われる。

d. 要 約

- 1) 鹿田遺跡の土壌15から出土した11世紀中頃～後半のものと考えられる炭化穀粒は蒸し焼きにされ判別不能のものが多かったが、大友と米が大半を占め、小麦は極めて少なかった。
- 2) 炭化米には初の付いた初米が混入し、また玄米の表面に縦に走る稜線があり、多くの粒で胚乳が残っていることから、穂付の穂穂が焼かれた可能性が高い。
- 3) 炭化米の粒長、粒幅および粒形指数（粒幅／粒長）は大きな変異を示した。これらの形質の頻度分布から、遺伝的に可成り異なるものが混在していたと考えられる。
- 4) 日本の各地で出土した奈良時代から江戸時代の炭化米に較べて、鹿田遺跡の炭化米は粒幅が明らかに小さいことから、完全に成熟しない前に収穫されたものではないかと考えられる。

- 5) 大麦については、その大半が裸麦であり、半穀性の溝性の粒が混じっていた。これに対して皮麦ではすべてが正常型の並性であった。
- 6) 大麦でも粒長や粒幅、粒形指数の変異は大きく、それらの頻度分布から遺伝的に異なるものが混入していたことが明らかである。
- 7) 以上の結果を総合して、当時の農業事情を作物育種学的に考察した。

引用文献

- 笠原安夫 (1984) 横浜市道高尾2号線No.6遺跡出土炭化稻子の判定。横浜市道高尾2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 No.6產跡一Ⅳ: 55-67。図版: 162-168。
- 笠原安夫 (1987) 福岡市西側道路の穀子分析について。福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集: 189-201。
- 粉川耕平 (1977) 福岡遺跡14棟近辺出土の炭化稻子について。福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集: 115-117。
- 古島敏雄 (1956) 日本農業史 (岩波全書225), 岩波書店 (東京)。
- 松谷曉子 (1990) 岡山大学構内遺跡から出土した炭化稻子と灰燼について。岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4号: 103-106。
- 谷谷穂子 (1994) 波津遺跡・田洞寺区出土植物遺残。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90: 499-507。
- 盛永俊太郎 (1969) 稲の日本史 上 (盛永俊太郎編), 茨城書房 (東京)。
- 盛永俊太郎・安田 雄 (1986) 江戸時代中期における諸港の農作物。享保・元文諸國産物帳から。日本農業研究所, 直良慎夫 (1956) 日本古代農業史 3・え・ら書房 (東京)。
- 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第6期 施田遺跡-3-第5次調査-。岡山大学埋蔵文化財調査研究センター, (1993)。
- 佐藤敏也 (1971) 日本の米文化。雄山閣出版株式会社 (東京)。
- 高橋隆平 (1942) 本邦人麥品种の分類と地理的分布に関する研究。第1報 芒芽の長さの二項曲線の意義。農学研究34: 273-314。
- 高橋隆平 (1950) 大麦品种の分類と地理的分布に関する研究。第14報 溝性遺伝子の遺伝関係とその地理的分布。農学研究39: 57-62。
- 和佐野吉久生 (1993) 九州北部古代遺跡の炭化米の被ダメ素性にに関する考古・遺伝学的研究。育種学誌43: 589-602。
- 柳田国男 (1969) 稲の日本史 上 (盛永俊太郎編), 茨城書房 (東京)。
- 安田真雄 (1927) 日本大古の米。農業及園芸2: 981-982。
- なお、炭化大麦粒の比較に際して引用した文献については、表11に記載した。

謝 謝

この調査に当たって炭化穀物を提供され、有益なご助言を賜った岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの山本徳世助教授、岩崎志保助手、光木 邦助手に感謝の意を表したい。また、一部の試料について同定して下さった岡山大学環境理工学部沖 隆子教授と木幡昌種「朝日」の種子を頂いた岡山大学資源生物学研究所前川雅彦助教授に深謝する。さらに、福岡県仙波古代集落遺跡については財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の小野美代子氏から、千葉県上北原遺跡については財团法人千葉県文化財センターの玉井ゆかり氏からご教示を頂いた。記して謝意を表す。

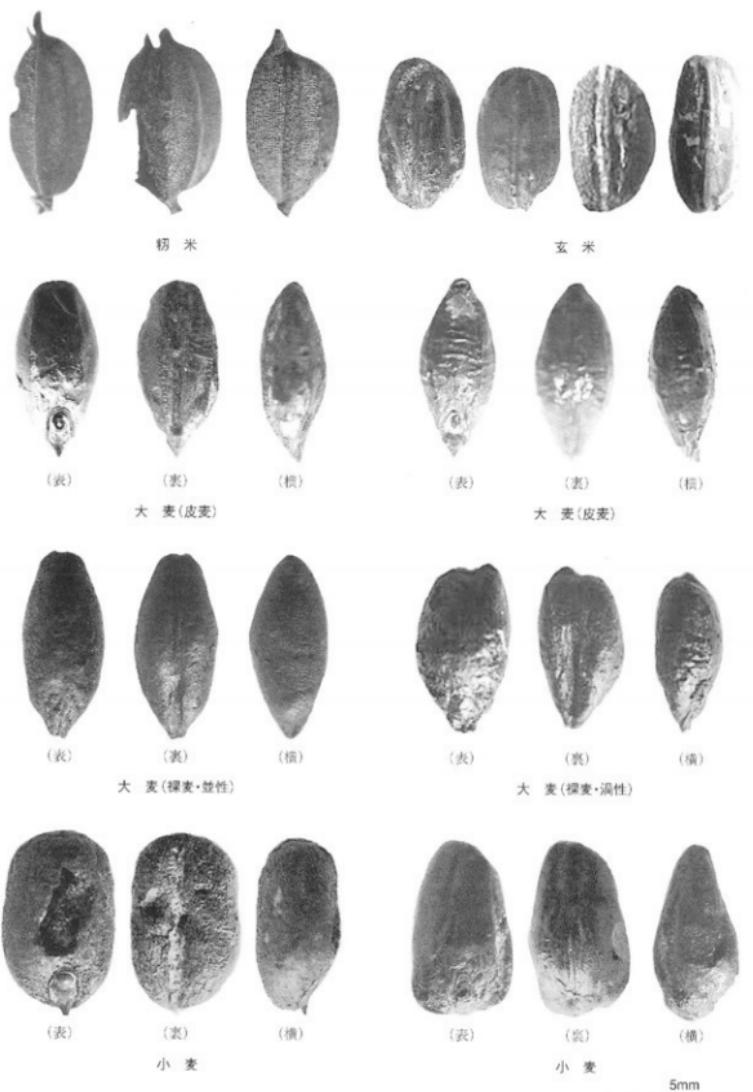


写真9 鹿田遺跡第5次調査土壤15で出土した炭化穀粒

第3章 調査資料の整理・研究と展示・公開

第1節 調査資料の整理・研究

1. 調査資料の整理・分析

(1) 出土遺物のレントゲン撮影について

津島岡大遺跡から出土した下記の遺物について、外観からはわからない形状等の確認、および接合方法の確認のためレントゲン写真を撮影した。撮影にあたっては医学部保健学科、田口勇仁先生・丸山敏則先生に御教示、ご協力頂いた。

1. 撮影資料と現状

①第12次調査 6層出土 棒火矢^① (写真10~12)

近世の棒火矢である。アカガシ製で、先端に鉛玉を埋め込む。外観からは鉛玉の接着方法は不明であるため、これを確認することを目的とした。

②第12次調査 溝27出土 銅片^② (写真13・14)

10世紀前半に埋没した溝から出土した銅片である。錫のため原形は不明であるため、原形の確認のためのレントゲン撮影を試みた。

③第19次調査 溝34出土 鉄製摘鎌^③ (写真15・16)

弥生時代後期～古墳時代の溝から出土した鉄製摘鎌の刃部である。錫ぶくれのために折り返しの形状が見づらく、この点の確認のためにレントゲン撮影を試みた。

2. 結果と考察

①第12次調査 棒火矢

写真11・12に示されるように、特に石突部分のような外側から見えない箇所についての興味深い所見を得ることができた。X線の透過の悪い最も白い部分が鉛にあたり、玉の中央部に横方向の刻みがあることが明確に見てとれる。外観ではこの刻み部分にまで、木製受け口部分がある。

1段目の段直下では、細いひび状の線が横方向



写真10 棒火矢の現状

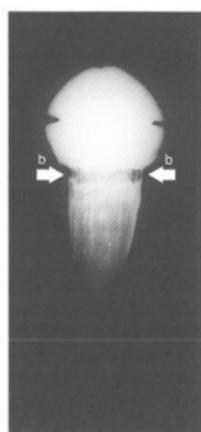


写真11 棒火矢のレントゲン写真(正面) 写真12 棒火矢のレントゲン写真(背面)

に観察される（矢印a）。これは、この部分に空白部があることを示しており、亀裂や隙間があることが推測される。

また1段目の段直下のくびれ部では、中央部が最も白く、両外側は薄く観察される（矢印b）ことから、同じ木質部分でも厚みに差異があることがわかる。

以上の点を考え合わせると鉛玉と矢の本体との間には亀裂あるいは隙間があることから、別つくりで製作され、直接には接着していない可能性が考えられる。このことから鉛玉下半に芯となるものを差し込み、この芯によって本体と接着しているという製作方法を想定した。

棒火矢は繰り返し使用されるものであったことから、石突部は付け替えて使用する一方、矢本体は焼けたり、傷が付くために使い捨てであった、といった使用状況を想定できる。

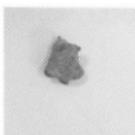


写真13 銅片の現状



②12次調査 銅片（写真13・14）

本資料については、金属学的分析により銅製であることが判明しているが、鉛分により形状が不明であり、原形・用途についても不明であった。レントゲン写真によって本来の形状を探ろうと試みたが、エックス線の透過が悪く、形状を窺い知ることはできなかった。



写真15 鉄製摘鎧の現状

③19次調査 摘鎧（写真15・16）

この資料についても鉛分により、両側の折り返し部分の形状が外観からは、はっきりとしなかった。折り返し部分の形状を把握するために、レントゲン撮影を試みたが、写真16に見られるように、結果は、外観観察を補強するほどの材料を得ることはできなかった。

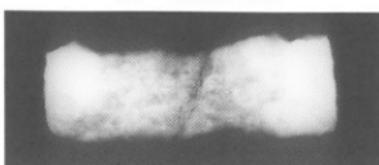


写真16 鉄製摘鎧のレントゲン写真

3.まとめ

今回医学部保健学科の田口先生・丸山先生にご教示・ご協力いただき、出土遺物のレントゲン撮影を行うことができた。いずれの資料もすでに報告済みのものではあったが、棒火矢については、予想以上の成果を得られ、より一層の理解が進んだ。その他の2点の資料については、今後も別の視点から分析を試みることとしたい。

（岩崎志保）

註

- (1) 岩崎志保 2003「包装袋出土の遺物」「津島岡大遺跡11」pp.270-274
- (2) 萩田次夫 2003「津島岡大遺跡第12次調査より出土した金製品の分析」「津島岡大遺跡11」岡山大学理系文化財調査研究センター pp.351-353
- (3) 野崎貴博編 2003「津島岡大遺跡12」岡山大学理系文化財調査研究センター

(2) 今年度の調査資料の整理

2002年度に実施した調査資料の整理・研究・分析は、内容・時代とともに多岐にわたっている。その成果として本年度は『津島岡大遺跡11』・『津島岡大遺跡12』の2冊の報告書を刊行することができた。

考察の中でも弥生時代前期の水田耕作形態についての問題、近世における条里の問題については未解決の点もあり、対象とする時期幅を広げたうえで問題点の分析・指摘を行い、2003年度以降に刊行する報告書に掲載することとしている。

また自然科学的分析では、津島岡大遺跡第27次・第28次調査、及び鹿山遺跡第13次調査において、遺跡周辺の環境復元を目的とした花粉分析・植物珪酸体分析を実施し、また津島岡大遺跡第27次調査の糞址、同第28次調査出土の糞について年代測定を実施した。各々の結果については本報告に譲ることとする。その他に、鹿田遺跡第5次調査土坑15出土の炭化米についての分析が小西猛朗氏により、また1991年度に実施した木器保存処理の経過についての分析が諸元興寺文化財研究所により行われ、その成果を第3章に掲載した。
(岩崎忠志)

表12 2002年度室内作業一覧

| 調査次数 | 作業内容 |
|----------------------------------|--------------|
| 津島岡大遺跡第15次調査（大学院ベンチャービジネスラボラトリー） | 種子選別・遺物接合・復元 |
| 津島岡大遺跡第17次調査（環境理工学部校舎Ⅰ期） | 遺物接合・復元・実測 |
| 津島岡大遺跡第22次調査（環境理工学部校舎Ⅱ期） | 遺物接合・復元・実測 |
| 鹿田遺跡第7次調査（基礎医学棟） | 遺物接合・復元 |
| 津島岡大遺跡第23次調査（総合研究棟） | 遺物注記 |
| 津島岡大遺跡第26次調査（事務局本館棟） | 遺物注記 |
| 鹿田遺跡第8次調査（RT治療室） | 遺物注記 |
| 鹿田遺跡第10次調査（共同湯） | 遺物注記 |
| 鹿田遺跡第11次調査（病棟1期追加分） | 遺物注記 |
| 鹿田遺跡第12次調査（エネルギー・センター） | 遺物注記 |
| 津島岡大遺跡第10次調査（保健管理センター） | 報告書刊行 |
| 津島岡大遺跡第12次調査（図書館蔵書館） | 報告書刊行 |
| 津島岡大遺跡第19次調査（コラボレーションセンター） | 報告書刊行 |
| 津島岡大遺跡第21次調査（1学部ユレベータ） | 報告書刊行 |
| 津島岡大遺跡第27次調査（創立五十周年記念館） | 遺物洗浄～報告書編集 |

2. 出土資料の保存処理

(1) 岡山大学における保存処理後遺物の現状と課題

財団法人元興寺文化財研究所 藤田 浩明 伊藤 健司

1. はじめに

近年、発掘調査に伴い出土する木製品や金属製品などに関する学際的な注目度は高まり、これらの遺物に対して保存処理を行ない、一般に公開し、後世に伝えていく必要があるとの認識は定着してきたように思う。しかし、保存処理後遺物の経年変化について調査や点検などが実施されている機関は皆無に近いと言えよう。と言うのも、バブル崩壊後の経済的な問題から調査員などの採用は行なわれず、慢性的な職員不足や発掘調査に追われて時間的余裕がなく、このような調査や点検は出来ず、いわゆる「保存処理のしづらなし」が実情である。現状の技術レベルにおいては、1点1点異なる性格を有する文化財にとって完璧な保存処理を行なうことは非常に困難を極めるため、このような保存処理後の調査や点検などが遺物にとっては非常に大切であり、重要なことである。

今回筆者らは、岡山大学に保管、展示されている「庵田遺跡」出土木製品、及び「津島岡大遺跡」出土アンペラ状木製品を対象に、保存処理後遺物の調査を行なったので、その結果を報告する。

なお、現在筆者らは、平成12年度から15年までの4ヵ年にわたり、「保存処理後遺物の経年調査」を研究課題として科学研究費の配分を受け、保存処理後遺物の実態と経年変化ならびに長期安定性の把握を主目的にして研究を実施するものであり、今回の調査も本研究の一環である。

（平成14年度 科学研究費 基盤研究（A）（2）「保存処理後遺物の経年調査」研究代表者 伊藤 健司 課題番号 12308005）

2. 収蔵状況

「庵田遺跡」から出土した木製品の保存処理は、平成4年度に財元興寺文化財研究所（以下元興寺）が担当した。保存処理方法として、ポリエチレングリコール（以下PEG）含浸法、アルコール・キシレン・樹脂法の二方法が使用されている。また、「津島岡大遺跡」から出土したアンペラ状木製品も、平成2年度に元興寺が担当し、PEG含浸法にて処理を行なった。

保存処理後遺物は埋蔵文化財センター内の収蔵室と小展示室、並びに文化科学系総合研究棟にある考古資料展示室に保管、展示されている。収蔵室においては、遺物をそのまま、あるいは厚紙の上に遺物を置き、それをシーラーパックしたものと一般的なコンテナに納め、ステンレス製のラックに収蔵されていた（写真17）。



写真17 収蔵状況

3. 保存処理後遺物の現状

調査は2002年7月1日に行なった。しかし、時間の関係ですべての遺物を調査できず、保存処理後の木製品60点、アンペラ状木製品1点を実施した。さらに、岡山大学埋蔵文化財センターで保存処理されたものも一部実見した。

3-1 収蔵室の保存処理後遺物

PEG含浸法で処理した遺物としては、田舟・下駄・浮子などを実見した。ほとんどの遺物に湿り気があり、ある

いはPEGの染み出しによるべとつきが感じられた。このため、これらの遺物は全体にやや黒化していた。

遺物の一部に、復元部と遺物本体との境目を中心として、白色粉体の析出が認められた（写真18）。しかし、遺物本体に析出は確認できなかった。

アルコール・キシレン・樹脂法で処理した遺物としては、舟車や人形、曲物を実見した。これら的一部に、表面がべとつき、遺物の下に敷いてあった厚紙に黄ばんだシミが見られた（写真19）。

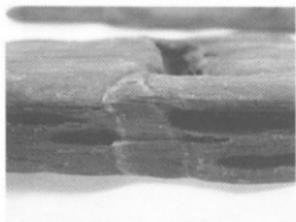


写真18 復元部の白色粉体

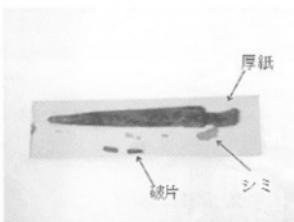


写真19 舟車収蔵状況

人形や舟車など脆弱な遺物の下には、保護材として厚紙が敷いてあったが、遺物よりも強度がないため保護材としての機能を果たしていない状況であった。

収蔵室には埋蔵文化財センターで保存処理された遺物も収蔵されていた。処理法はPEG含浸法を用いており、遺物は元興寺で処理されたものと同様に、シーラーパックされた状態で保管されていた（写真20）。時間の関係で詳細な調査はできなかつたが、処理されている遺物は、「後処理」としての表面処理がなされないままシーラーパックされていたため、保存処理後の色調の変化は明確には確認できなかつた。しかし、この収蔵室はプレハブの1Fであり、空調設備等もほとんどないことから、保存処理後に発生したPEGの染み出しなどの変化はあるものと考えられる。



写真20 収蔵室

3-2 埋蔵文化財センター小展示室の保存処理後遺物

PEG含浸法で処理した遺物としては、樅状木製品や短甲木製品などが展示されている（写真21）。これらの遺物はシーラーパックから取り出して展示してあるため、湿り気やPEGの染み出しによるべとつきは感じられなかつた。しかし、樅状木製品のみに、PEGが流れ出し白く固化した状態が見られた。

アルコール・キシレン・樹脂法で処理した遺物としては、人形や曲物、横櫛などを実見したが、変化は認められなかつた。

3-3 総合研究棟考古資料展示室の保存処理後遺物

PEG含浸法で処理した遺物としては、砧・短甲木製品・アンペラ状

木製品などが展示されている（写真22）。砧などの小型の遺物はシーラーパックから取り出して展示してあるが、元々は収蔵庫に保管してあったものであり、その時点で起こったであろうPEGの染み出しによる黒化が若干見られた。また、これらが展示されていたケースを開けた時、刺激臭を感じた。アンペラは土付き遺物であり、また大型であるため、単独で密閉式の展示ケースの中で展示されていた（写真23）。表面の一部に、PEGが点状に染み出している部分が見られたが、それ以外に大きな変化は認められなかつた。



写真21 小展示室



写真22 展示状況



写真23 アンペラ展示状況

アルコール・キシレン・樹脂法で処理した遺物としては、人形や曲物、横棒などを実見したが、変化は認められなかった。

4. 変化の要因と課題について

今回の調査において、展示してある遺物には比較的問題は少なかったようだ。収蔵されているものの中には何らかの変化が生じていた。その変化の要因としては、大きく以下の5つが考えられる。

- ① 保存処理方法
- ② 展示・収蔵を含めた保管環境
- ③ 取扱い
- ④ その他（樹脂の劣化など）
- ⑤ ①～④の複合したもの

今回調査を実施した遺物に関しては、①、②の要因に起因するものがほとんどであった。

①の要因については、まず復元部の彩色上に生じた白色粉体が考えられる。この現象はPEGに含まれる有機酸とアクリル絵具または水道水に含まれるカルシウムとが結合し、発生したと考えられる。これらは復元部の彩色上だけに析出し、遺物そのものに影響を与えるものではない。対処法としては、水またはアルコールで軽く押すようにして取り除けるが、彩色用アクリル絵具も同時に除去してしまう可能性があるので、注意が必要である。

次に、人形や壺など表面のべとつきが考えられる。これらは遺物に、より保湿性を持たせるために、樹脂含浸終了後表面に塗布されたポリエチレングリコールメタクリレート（PEGMA）が重合しなかったものと考えられる。これらは短期間の使用で、現在では使用しておらず、遺物そのものに影響を与えるものではないが、通気性を良くすることで、べとつきは抑えられるとしている。

②の要因については、PEGが染み出ことによる表面のべとつきや黒化などの変化が考えられる。保管や収蔵、展示状況を見ると、特に温湿度管理がなされていなかった。収蔵室の遺物に関しては、シーラーパックされた状況であり、展示されている遺物に比べると、通気が全く無い状態であった。このような条件下ではPEGの染み出しや表面の変色は避けられないことである。また、埋蔵文化財センターで後処理を行なっていない遺物については今後、学術的に資料価値や展示効果の高い遺物などを中心に表面処理や接着・復元などの「後処理」を検討していくべきである。

総合研究棟考古資料展示室の展示ケース内の刺激臭については、展示ケースや室内の塗装に用いられた塗料の臭いと考えられる。環境測定を行なわないと明確な判断はできないが、これらも含め、展示・収蔵を含めた保管環境については課題が残る結果となった。

5. 課題の改善策について

今回実施した岡山大学での調査の結果、4で述べたようにいくつかの課題が認められたので、今後に向けての改善策を提示しておきたい。

保存処理した遺物は、基本的に空調設備のある温湿度管理が可能な施設で、温度20℃、湿度60%RHでの展示や保管が望ましい。しかし、このような施設がない場合でも、ある程度の湿度管理と通気の問題を配慮すれば、遺物の変化は防止できると考える。特にPEG合浸法で処理した遺物は、乾燥した環境のもと、空気に触れるような状態で保管・展示することが重要である。そのため、通気性の悪いシーラーパックでの保管は避けるようにし、薄葉紙や綿布団の上に遺物を直接収納するなどの改善が必要である。また、展示室において、空気に触れる状態で展示されている遺物についても、ケース内に除湿剤や除湿器を入れたり、室内に除湿機を配備するなどの湿度管理を行なっていくべきであろう。

最後に、今回調査を行なった遺物の中で、保存処理後に破損や折損を起こした遺物は確認できなかった。このことは、遺物の取扱いや移動がきちんとなされていることを示している。ただし、保存処理後の遺物の取扱いについてであるが、人形や扇など細長い遺物や、脆弱な遺物、接着・復元の多い遺物は、必ず遺物より強度のあるダンボールなどの当て材をそえて保管や移動を行なうことが望ましい。そうすることで、今後、更に破損や折損などの事故を防ぐことができる。

6. おわりに

今回調査を行なった遺物は、保存処理が終了してから、約10年が経過したものばかりである。にもかかわらず、すでに若干の変化が生じている遺物もある。このことは保存処理方法そのものに起因するものもあるが、処理後の保管環境に問題があるものも存在する。今回の調査を通じて、先述したとおり、完璧な保存処理を行なうことが非常に困難を極める現状において、いかに保存処理後の調査や点検が大切なものが改めて痛感する結果となった。今後は、これを契機に保存処理後遺物に対する適切な管理を再考していただき、少しでも改善されることを期待したい。

最後になりましたが、今回の調査を行なうにあたり、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの山本悦世氏、高田浩司氏、鶴那敬三氏には大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 五代勝貴・吉村佐紀ほか「柄杓の保存処理と修復」『古文化財の科学38』古文化財科学研究会 pp.59-64 (1993)
- 植田直見・伊藤健司ほか「復元部の彩色上に発生した白色粉体について—保存処理した出土木製品の場合』『日本文化財科学会第18回大会要旨集』日本文化財科学会 pp.108-109 (2001)
- 伊藤健司・森川清明『島根県内における保存処理後遺物の經年調査—宍道町・八雲村・大田市の現状と課題—』『鳥羽考古学会誌第19集』pp.123-130 (2002)
- 伊藤健司・奈良県橿原市における保存処理後遺物の現状と課題』『元興寺文化財研究No. 82』元興寺文化財研究所 pp.14-18 (2002)

(2) 今年度の保存処理

A. 保存処理後遺物の管理状況の改善について

1. はじめに

2002年7月1日に来所した財元興寺文化財研究所の伊藤健司・藤田浩明両氏により、保存処理後の遺物について、前項のような管理上の問題点が指摘された。これを受け、当センターでは両氏より提示された方法に基づき、ただちに管理方法の改善を行った。以下では、その取り組みと処置後の現状について述べる。

2. 管理状況の改善

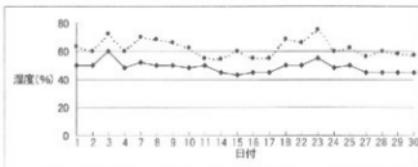
木製品および出土木資料を中心とした、各種保存処理を施した植物質の遺物について、当センターではこれまで各資料に除湿剤を同梱した状態でシーラーパックし、鉄製の棚に収納していた。まず、通気性の問題を指摘されたシーラーパックをすべて開封し、湿気を吸いきっていた除湿剤を取り除いた。続いて、防湿のためビニールフィルム（通常はビニールハウス用に使用される薄手のもの）をカーテン状に重ねあわせ、棚下は裾を巻き込んで棚全体を覆った（写真24）。棚の構造と遺物の出し入れを考えた利便上、完全に密閉することはできないため、要所をビニールテープで貼り合わせている。この状態でも防湿効果はあるということであったが、温湿度計を数か所に設置して計測したところ、ビニールカーテンの内外の湿度に変化がそれほど見られなかった。そのため、さらに棚3mあたり1台の割合で除湿機を設置し、温度を40～50%に保つように設定して、ビニールカーテン内の湿度が50%を超えた場合に稼動させる処置を施した。湿度の計測は現在も継続して行っており、季節による湿度変化のデータを得ている。



写真24 処置後の状況

3. 処置後の現状

図42は、湿度の高い7月における、ビニールカーテン内外の湿度変化を示したものである。これを見ると、ビニールカーテン内外の湿度差は5～20%（平均約13%）で推移し、かなりの効果を上げていることがわかる。表面的には遺物からのPEGの染み出しは抑制されているようである。しかし、すでに染み出して黒化したものについては、以前の状態を回復するまでには至っていない。



（上：カーテン外、下：カーテン内）

図42 2002年7月の湿度変化

4. おわりに

以上のように、空調のないプレハブ建物であっても、それほど多くの費用をかけずに効果的な処置が可能であることが実証された。今回は、当センターの収蔵庫に関する取り組みについて扱ったが、総合研究棟考古資料室についても現在検討の基礎となるデータを探集中であるほか、2003年度には小型の遺物用に低湿保管庫を導入することになっている。今後も保存処理後遺物の保管・展示について順次改善を試みていく予定である。（忽那敬三）

B. 今年度の保存処理作業

PEG 保存処理 2000年度から継続していた第5期処理を2002年11月に終了し、第6期処理を開始した（表13）。第6期処理では、津島岡大19次（コラボレーションセンター）、22次（環境理工校舎Ⅱ期）、鹿田7次（医学部基礎医学棟）調査出土の木器を投入している。主な遺物は、弥生時代前期～中期の農具と思われる加工材（津島岡大19次）、古代の舟物・札状の加工材・木曇の杭や構成材（同22次）、中世の杭・板材・札状の加工材（鹿田7次）など、小型の製品がほとんどを占める。なお、今年度は外部処理を委託していない。

(忽那敬二)

表13 第5・6期木器保存処理工程

| | | |
|-------|---------|--------------|
| 第5回処理 | 2002年4月 | 90%で昨年度より継続 |
| | 4月30日 | 95%へ |
| 第6回処理 | 11月6日 | 100%に到達、引き上げ |
| | 11月12日 | 40%で開始 |
| | 2003年3月 | 40%で次年度へ継続 |

表14 2001年度以前の木器保存処理工程

| 処理時期 | 期間 | 処理回数 |
|------|------------------|---|
| 第1期 | 1992年7月～1993年11月 | 鹿田遺跡1次（附属病院外来診療棟）・2次（NMR・CT室） |
| 第2期 | 1994年6月～1996年8月 | 鹿田遺跡3次（医学部短期大学校舎本体）・4次（医学部短期大学校舎周辺配管）・5次（医学部管理棟）・津島岡大3次（男子学生寮）・6次（生物応用工学科棟）・5次（大学院自然科学研究科棟） |
| 第3期 | 1996年12月～1999年6月 | 鹿田遺跡3次（医学部短期大学南共同溝）・津島岡大3次・6次 |
| 第4期 | 1999年7月～2000年10月 | 鹿田遺跡3次・4次、津島岡大3次 |
| 第5期 | 2001年1月～2002年3月 | 鹿田遺跡3次・4次、津島岡大3次・9次（牛体機能応用工学科）・10次（保健管理センター）・12次（附属図書館）・13次（福利厚生施設北棟）、90%で次年度へ継続 |

第2節 調査成果の展示・公開

第6回岡山大学キャンパス発掘成果展の概要

a. 概要

2002年10月21日から11月1日まで、「使ってみよう！石の道具」と題して第6回となる岡山大学キャンパス発掘成果展を開催した。今回は初の試みとして日曜開催も実施した。

今年の特色は、常設展示室に加えて、石器に関する特別展示を企画し、なかでも石器の製作・使用に重点をおいたことである。具体的には石皿・磨石・敲石を使用して木の実をつぶす、スクレイパーで野菜・肉を切るといった作業を見学者に行ってもらうコーナー、石礫を付けた矢頭でのねらうコーナー、石器製作コーナーの3つの企画コーナーを設けた。石器製作コーナーでは、サスカイト原石から割り取り、加工して、打製石器を作製した。また昨年好評であった土器の接合コーナーも継続して設けた。全体として体験の度合いの多い企画展示となつた。

広報活動としては、昨年同様、本学附属図書館による「池田家文庫貴重資料展」と期間を同じくし、相互に広

報するといった連携をはかり、合わせて学内外へのビラの送付・ポスター掲示・マスコミを通じての宣伝を行った。また前年度の見学者や本センターの発掘調査現場説明会等の参加者に対する案内送付を行った。これにより、年々増加傾向にあるリピーターの獲得に効果があるものと思われる。

b. 開催結果

見学者は合計252名である。数字としては昨年を下回っているが、これは高校等の団体見学がなかったためと思われ、団体をのぞく実数は昨年並みである。今回は日曜開催を実施したが、日曜1日のみで全体の2割強の来場者を得た(図44)。土曜・日曜両日で103名(40%)の見学者があり、やはり休日開催は効果があるものと考えられる。

実施したアンケートの回収枚数は190枚で回収率75%である。主な結果については下表を参照して頂きたい。見学者の学内外割合は、学内35%、学外65%である。今回の主テーマである石器関連コーナーはいずれも好評であり、特に石器探し・石器作りコーナーを「おもしろい企画」の筆頭に掲げた人が多かった。

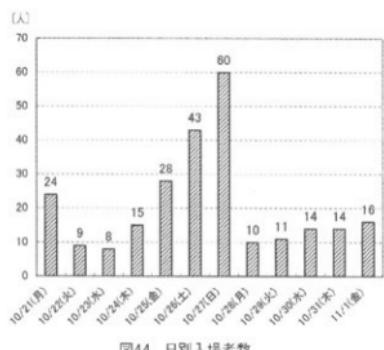


図44 日別入場者数

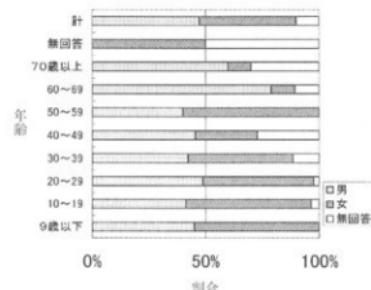


図45 入場者の男女別割合

c. まとめ

今回6回目となるキャンバス発掘成果展は、秋に定期的に実施するようになって3年が経ち、安定した来場者を得ることができるようになってきた。今年は大学・高校の授業がらみの見学は見られなかつた一方で、小・中学生や親子連れの姿が目立つたように思われる。来場者の声を総合すると、一般的な博物館展示とは異なり、実際の遺物に触られる点や、石器作り・注記・接合といった体験的な部分を支持する声が強いと思われる。

こういった発掘成果の公開普及活動は、今後のセンターにとって重要な部分を占めていくものと考えられるが、通常業務とのバランスもまた重要なポイントである。この点に留意して、今後の展示会活動をより内容濃いものへ、また地域の中での生きたとりくみへとしていくことが今後の課題である。

(岩崎志保)



図43 展示会のポスター

第3節 2002年度調査研究員の個別研究活動

1. 科学研究費採択状況

- 山本悦世：平成14年度科学研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」（研究代表者 山本悦世）
 岩崎志保：平成14年度科学研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」（研究代表者 山本悦世）：研究分担者
 横田美香：平成14年度科学研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」（研究代表者 山本悦世）：研究分担者
 野崎貴博：平成14年度科学研究費（若手研究B）「古墳時代の棺制度の考古学的研究」
 高田浩司：平成13年度科学研究費（若手研究B）「弥生時代銅鏡と古墳時代銅鏡の比較研究」

2. 論文・資料報告

- 山本悦世：『京風古窓群』吉備人出版
 「津島岡大遺跡11」（共編）
 「耕作地の問題点」「津島岡大遺跡11」（共著）
 「弥生時代後期の土坑に関する一考察」「津島岡大遺跡11」
 「弥生時代後期前葉の土器について」「津島岡大遺跡11」
 岩崎（山下）志保：『津島岡大遺跡11』（共編）
 「耕作地の問題点」「津島岡大遺跡11」（共著）
 「弥生時代の土器について」「津島岡大遺跡11」
 「刻紋銅鏡考」「先史学・考古学論究Ⅳ」
 横田美香：『縄文時代後期の石包丁状石器』『津島岡大遺跡12』
 野崎貴博：『津島岡大遺跡12』（編）
 「岡山平野における弥生時代前期～中期の洪水と集落の動態」「津島岡大遺跡12」
 「津島岡大遺跡における近世の柔半甲遺構について」「津島岡大遺跡12」
 「埴輪招きの群構成」「環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－」
 高田浩司：「中部瀬戸内と畿内の打製石刀－その経済的側面と概念的側面－」「考古学研究」49巻1号
 「吉備南部における古墳社会形成期の様相－集落の分析を中心として－」「環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－」
 光本 順：「弥生から古墳時代における副葬品配貢の展開－岡山地域の事例と分析－」「環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－」

3. 研究発表等

- 山本悦世：「縄文時代遺跡の動向と生業」第13回中四国縄文研究会
 忽那敬三：「発掘の基本と実際」加古川市民牛糞大学講師
 高田浩司：「縄文時代中部瀬戸内内の『石包丁状石器』－弥生時代の打製石刀との比較から－」第13回中四国縄文研究会
 光本 順：「分銅形土製品の製作から廃棄に至る展開過程」人類史研究会第14回大会

4. 資料収集・実態調査

- 山本悦世：弥生土器資料調査（岡山県古代吉備文化財センター・滋賀県能登川町埋蔵文化財センター）、津島遺跡の実態調査（岡山県古代吉備文化財センター）、古代土器の資料調査（高槻市埋蔵文化財センター）、縄文弥生遺跡の実態調査（鹿児島県上野原遺跡周辺・橋牟礼遺跡ほか）
 岩崎志保：弥生時代後期土器の調査（岡山県古代吉備文化財センター）
 野崎貴博：平成14年度科学研究費「古墳時代の棺制度の考古学的研究」に関する資料調査（三重県・大阪府・宮崎県）
 高田浩司：縄文・弥生時代の石器、銅鏡の資料調査、古墳の調査（岡山県・福岡県・大分県）
 光本 順：分銅形土製品の資料調査（岡山県古代吉備文化財センター、山陽町郷土資料館ほか）

第4章 2002年度における調査・研究活動のまとめ

調査 本年度は全体として調査件数の多い年度となった。発掘調査は津島地区で3件（津島岡大遺跡第27~29次調査）、鹿田地区で1件（鹿田遺跡第13次調査）行われた。昨年度からの継続調査である津島岡大遺跡第27次調査（創立五十周年記念館）では、縄文時代後期の大型の炉や土坑が検出され、その特異な構造を理解するために力が注がれた。なお、その調査成果は、2003年度初めに刊行された発掘調査報告書の中でもまとめられている。第28次調査（自然科学系総合研究棟）では、弥生時代前期の畦畔や縄文時代後期の集落域のひろがりに関する貴重なデータが得られた。第29次調査では、小規模な調査であったが縄文時代後期以降の旧地形や弥生時代から古墳時代における溝群の存在を確認し、津島岡大遺跡の縁辺部の様相が垣間見えた。鹿田遺跡では、第13次調査（総合教育研究棟）が実施され、特に弥生時代終末から古墳時代初期の広範囲な土器溜まりの存在が確認されたことが特筆される。当該期の鹿田の集落を様相を復元し、集落における土地利用のあり方や土器溜まりの歴史的意義を考える上で重要なデータが蓄積された。

立会調査では、津島地区において、事務局・創立五十周年記念館周辺の調査で、弥生時代早期を中心とするまとまった土器や石器が出土した。この近辺では試掘・確認調査もなされたが、そうした調査成果から旧地形の復元や石器製作地の推定がなされるなど、当該期の居住の一端が明らかとなってきた。鹿田地区的立会調査では、エネルギーセンター周辺において中世の礎石建物の柱穴や井戸などが検出され、鹿田遺跡第12次調査（エネルギーセンター）の成果とあわせて、当該期の集落を復元する際の有益な知見が得られた。

研究 調査件数の多い年度であったが、その中で『津島岡大遺跡11』と『津島岡大遺跡12』の2冊の発掘調査報告書を刊行することができた。事実報告の充実に努めるとともに、前者においては弥生時代の耕作地や土坑、本器、弥生時代後期後葉の土器、近世の棒火矢の考察を収録し、後者においては弥生時代前期から中期の洪水や、近世の条里遣柵、縄文時代後期の石包丁状石器に関する考察が盛り込まれた。津島岡大遺跡第27次調査の報告書の作成も、本年度を主体に行われた。本紀要に収められているレントゲンを用いた遺物のつくりに関する研究や、炭化穀粒の研究、保存処理後の木製品の経年変化に関する研究は、当センターと学内および学外の研究者との交流の中で生まれたものともいえる。大学の一機関として、こうした多方面との連携は、今後ますます重要となるであろう。その他の刊行物としては、『センター報』が定期的に2回刊行され、研究と普及活動の役割を果たした。

展示・公開 頻繁に実施される調査と報告書作成の中で、10月末ごろに第6回目となる岡山大学キャンパス発掘成果展を開催できたことは、調査成果をひろく学内・学外へ還元する上で、重要な意味をもつ。展示会は第4回以降、定期開催を継続しており、普及活動が着実に地域に根付きつつあるといえよう。

課題 このように、本年度は調査と研究、展示・公開のいずれにおいても活発であり、前年度までの流れをくんだ堅実な活動が実施されたといえる。その成果は、本紀要や報告書、センター報において表われているが、ただし、今後の活動における改善点や課題も存在する。ひとつは、遺物の保管場所の不足がある。多くの調査を手がけた本年度は、多量の研究資料の蓄積をもたらしたとともに、収蔵スペースの不足状態を招いている。円滑な調査研究のためにも、改善に向けた何らかの取り組みが必要である。第二に、本年度は2冊の発掘調査報告書をはじめとして調査研究成果が刊行されたが、大学改革の中で、いっそうの着実な実績の蓄積に努める必要がある。展示・公開活動も、当センターの調査研究活動の蓄積が地域社会や学術分野にアピールできる重要な資源であることを示す有効な場として、可能な限り継続し、発展させる努力が必要であろう。

（光本 顺）

付 編

日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について

岡山大学津島地区および鹿田地区では従来、日本測地系による国土座標第V座標系に基づいて構内座標を独自に設定していた。その後、2002年4月1日に改正された測量法の施行に伴い、2003年度以降に作成する報告書・概報に使用する国土座標について、日本測地系から世界測地系へと変更している^①。

この新たな構内座標は、世界測地系による国土座標第V座標系に基づいている。変更においては、従来の構内の区割りを踏襲するために津島地区と鹿田地区における原点の位置を移動せず、その数値を日本測地系から世界測地系へと変更した。原点の位置を従来と同じ位置に設定しているため、構内座標による区割りはこれまでのものと地図上では大きな離隔は生じない。

津島地区の原点に関しては、これまで原点を日本測地系による座標($X = -144,500.0000m$, $Y = -37,000.0000m$)としていたが、世界測地系による座標($X = -144,156.4617m$, $Y = -37,246.7496m$)に変更した。鹿田地区についても、原点を日本測地系による座標($X = -149,800.0000m$, $Y = -37,400.0000m$)としていたが、新たに世界測地系による座標($X = -149,456.3718m$, $Y = -37,646.7700m$)を採用した。

区割りの間隔や呼称方法については、従来のものを踏襲している。津島地区については国土座標系の座標北を基軸に、一辺50mの間隔で、東西・南北に方形の区割りを行った。これは、本地区的地割りが南北・東西方向にはほぼ合致することと、岡山市街地にのこる条里制の地割りが正方位となる状況に対応したものである。座標軸の名称は原点を基準に、東西線に沿って北から南へAA~BGライン、南北線について東から西へ00~48ラインとしている。50m四方のグリッド名については、東西・南北方向の輪線の名称を組み合わせた北東隅の交点の名称を用いている。したがって、原点はAA00となり、その他の交点についてもAW03, AZ05, …となる。鹿田地区については、原点を起点として座標軸をN=15°Eに振ったものを基軸とし、一辺5mの方形区画によって地区割りを行っている。座標軸の名称は原点を基準に、東西線について北から南へAA~DMライン、南北線について東から西へ00~80ラインとしている。5m四方のグリッド名については、津島地区と同様に北東隅の交点の名称を用いている。

(光本 順)

註

- (1) 2003年度に刊行された報告書のうち、『津島国大道路13』(岡山大学構内道路を採調会報告第18冊)については、従来の日本測地系による国土座標を使用している。

表15 新旧構内座標の対照

| | 旧原点（日本測地系） | 新原点（世界測地系） |
|----------|---|---|
| 津島 地区 | $X = -144,500.0000m$ $Y = -37,000.0000m$ | $X = -144,156.4617m$ $Y = -37,246.7496m$ |
| 鹿田 地区 | $X = -149,800.0000m$ $Y = -37,400.0000m$ | $X = -149,456.3718m$ $Y = -37,646.7700m$ |

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

(1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

昭和62年11月26日岡山大学規程第48号
改正 平5. 2. 25 規程4号
平7. 3. 31 規程19号
平12. 3. 31 規程36号

(設置)

第1条 岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。
(目的)

第2条 センターは、本学の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査にすること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理および保存に附すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に附すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

(自己評価等)

第2条の2 センターは、岡山大学学則（平成6年岡山大学規程第64号）第2条の定めるところにより、センターに係る点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けるよう努めるものとする。
3 第1項の自己評価を行うため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「自己評価委員会」という。）を置く。

4 自己評価委員会に附し、必要な事項は、別に定める。

(教育研究等の状況の公表)

第2条の3 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

(センター長)

第3条 センターにセンター長を置く。
2 センター長は、専門的知識を有する本学の専任教師のうちから学長が命ずる。
3 センター長は、センターに関する業務を掌理する。
4 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

第4条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。
2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要的な職員を置く。
3 室長は、専門的知識を有する本学の専任教師のうちから学長が命ずる。
4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。
5 室長の任期は2年とし、再任を妨げない。
6 調査研究員及びその他の職員は、上級の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

第5条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るために、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。
2 専門委員は、本学の専任教師のうちから学長が命ずる。
3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理運営の基本方針等)

第6条 センターの管理運営の方針等は、岡山大学部局長会で審議する。

(運営委員会)

第7条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員

会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に因し、必要な事項は別に定める。

（趣則）

第8条 センターの事務は、施設部企画課において処理する。

（趣則）

第9条 この規則に定めるもののはか、センターに因し必要な事項は、学長が別に定める。

附 則

1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

2 この規程施行後最初に任命されるセンター長、室長及び専門委員の任期は、第3条4項、第4条第5項及び第5条第3項の規程にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

附 則

この規程は、平成5年5月25日から施行する。

附 則

この規程は、平成7年4月1日から施行する。

附 則

この規則は、平成12年4月1日から施行する。

（2）岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

昭和62年11月26日岡山大学規程第50号

改正 平12. 3. 31規程93号

（趣旨）

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規程第48号）第7条第2項の規程に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に因し、必要な事項を定めるものとする。（審議事項）

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という）の運営に関する具体的な事項を審議する。

（組織）

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二 本学の教授のうちから学長の命じた者若干名

三 センターの調査研究専門委員のうちから学長の命じた者一人

四 センターの調査研究室長

五 施設部長

2 前項第2号の委員の任期は、1年とし、再任を妨げない。

（委員長）

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

（委員以外の者の出席）

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員会以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

（庶務）

第6条 運営委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

附 則

1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

2 この規程施行後最初に任命される第3章第1項第2号の委員の任期は、同条第2項の規程にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

附 則

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

(3) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程

平成5年2月25日岡山大学規程第5号

改正 平12.3.31 規程94号

（趣旨）

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（昭和62年岡山大学規程第48号）第2条の2 第4項の規程に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「委員会」という。）の組織および運営に關し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第2条 委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）に係わる点検及び評価の実施並びにその結果の公表に關し、必要な事項を審議する。

（組織）

第3条 委員会は、次の各号に掲げる者で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 二 埋蔵文化財調査研究センター調査研究室長
- 三 センターに勤務する教官のうちから若干名
- 四 埋蔵文化財調査研究センター、運営委員会委員のうちからセンター長が委嘱した者若干名
- 五 施設部長

3 前項に定める委員のはか、センター長が必要と認めた者を加えることができる。

（委員長）

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

（会議）

第5条 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

（庶務）

第6条 委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

（録則）

第7条 この規程に定めるもののほか、委員会に關し必要な事項は、別に定める。

附 則

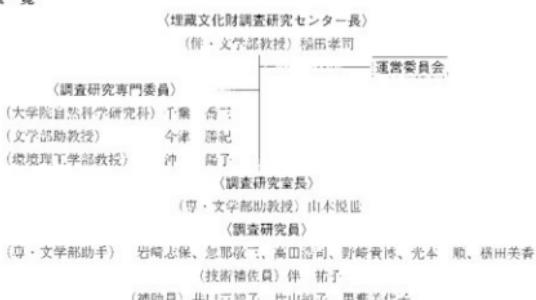
この規程は、平成5年2月25日から施行する。

附 則

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

2. 2002年度埋蔵文化財調査研究センター組織

(1) センター組織一覧



(2) 運営委員会

委員

| | | | |
|---------------|------|------------------|----------------|
| センター長 | 橋田孝司 | 大学院自然科学研究科教授 | 千葉義三(調査研究専門委員) |
| 文学部教授 | 新納 崑 | 大学院自然科学研究科教授 | 柴田次夫 |
| 文学部教授 | 久野修義 | 埋蔵文化財調査研究センター助教授 | 山本晃也(調査研究室長) |
| 大学院医歯学総合研究科教授 | 村上定郎 | 事務局 | 森内吉一 |
| 環境理工学部教授 | 名合宏之 | | |

3. 2002年度審議・決定事項

- 2002年4月15日 教員の個人評価に係わる評価基準について
 平成13年度決算について
 年報について
 平成14年度事業計画について
 谷島岡大遺跡第27次(五十周年記念館)調査概要
 岡山大学考古資料展示室について
 2002年11月26日 助手の再任について
 平成14年度予算について
 個内発掘調査概要報告
 2003年1月21日 平成15年度予算案について
 平成16年度概算要求について
 中期目標・中期計画について
 運営委員会委員の任期について

4. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

平成12年5月15日

埋蔵文化財調査研究センター長
施設課 部長

I 請負業者が留意すべき事項

1. 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
2. 発掘作業の現場に「施山掘削」と「十止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。
3. 工事用電力の保安責任者をおこなうこと。
4. 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守されること。

II 発掘現場で注意すべき事項

1 服装・装備・用具等

- 1) 安全で機能的な服装にする。
- 2) 平坂面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
- 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
- 4) グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
- 5) スコップ・草刈りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。

2 掘削

1) のり面の角度

造成土：運家の土壌の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造

成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。

堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。

発掘区の壁際を深さ1.5m以上削削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の設の巾は、60cm以上とする。

2) のり面の保護

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。

3) 深い造構（深さ1.5m以上の造構）

造構削削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。

なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。

3 高所（高さ2m以上の場所）での作業

1) 作業中には安全帯を使用する。

2) 崩落を防ぐ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。

3) 2段以上の巣合は、分解して移動させる。

4 発掘用機械類の操作

（ベルトコンベア・ポンプ等）

1) 同臺用電源の設置と取り扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。

2) ベルトコンベア・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。

3) ベルトコンベアを乗ねたつなぎ日の部分には、なるべく土が落ちないような措置をする。

4) 原則としてベルトコンベアの直下での作業、通行を選ける。

5) ベルトコンベアの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。（車機関係）

1) 車機の免許所有者以外は運転しない。

2) 運転者は、周囲の安全に注意する。

3) 移動中は、車両の旋回半径内に立ち入らない。

5 健康管理

1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

III その他

1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。

2) 制限区の状況や進捗などの特殊性・重要性等により、上記の2の1)～3)どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

付 表

付表1 1982年度以前の構内主要調査(1980~1982年度)

| 年次 | 造営名・調査地区名 | 種類 | 所轄 | 調査委員会名 | 調査委員会場 | 立地面積 (m ²) | 文獻 | 備考 |
|--|----------------|-----|---------------|---------------------|----------|---------------------------|----|------------------------|
| 1980 | 廃H | アキ | 海 | 岡山教育局総務部 | 岡山市技术委員会 | 8 | | |
| | 津島南 BD06 | アキ | 海 | 吉屋會議室 | | | | |
| | 津島北 | アキ | 文伝 | 合併処理施設 | | | | |
| | 津島北 | アキ | 文法群 | 合併処理施設 | | | | |
| | 津島南 BD06 UC09 | アキ | | 基幹整備(共同調査) | | | | |
| | 津島南 BD~D604~IV | アキ | | 主防護施設(配水塔施設) | | | | |
| 1981 | 廃H | アキ | 灰磚 | 高架化施設会議室 | | | | |
| * | * | * | * | 熱物実験室講習室 | 岡山県教育委員会 | | | 試化調査を主とする灰磚化設備等の調査 |
| * | * | * | * | 物理削除施設新設会議室 | 岡山市教育委員会 | | | |
| * | * | * | * | 運動場改修 | | | | |
| 津山 AV06~10A/W 05~14A/WB, BD07M/ 10 | アキ | 排水渠 | 排水渠整備 | | | | | 津山 A/W14区で弥生時代包含層確認、沿武 |
| 小笠原貝塚 津島北 AW14 | アキ | 灰磚 | 排水渠中塚(NP-1)解説 | 岡山大学 | 24.0 | 3 | | (津山開拓第1次調査) |
| 津島市 | アキ | 学生 | 武道館新設 | 岡山教育委員会 | 2.3 | | | |
| 津島北 AV15~26 | アキ | 灰磚 | 校舎新設 | | 7.0 | | | |
| 廃H | アキ | 灰磚 | 校舎新設新設 | 西日本建設委員会 | 8.0 | | | |
| * | * | * | * | 外壁モザイク装飾 | 箕面市教育委員会 | 4.0 | ? | |
| * | * | * | * | 敷地狭小施設改修(給水管、ガス管埋設) | 岡山県教育委員会 | 1 | | |
| 尾山 A3~A47/A422 ~26 | アキ | 海 | 東延ケーブル施設 | 岡山大学建築文化財研究室 | | | | |

文献

- 1 矢木亮一 「岡山大学附属施設跡地の歴史的変遷と今」[津山市立歴史資料]「津山県立文部省報告」13 1983 岡山教育委員会
 2 井本 浩 「岡山県立文部省附属施設跡地の歴史的変遷と今」[津山県立文部省報告] 13 1983 岡山教育委員会
 3 香留秀典 「岡山大学附属施設小会議室改修(A/W14区)の余掘取扱」岡山大学理工学部発表会発表集 1985 岡山大学建築文化財研究室

付表2 2001年度以前の構内主要調査(1983~2001年度)

付表2-(1) 発掘調査

| 序号 登記 番号 | 年次 | 造営名 | 調査地区 | 所轄 | 調査委員会 | 調査面積 (m ²) | 調査 概要 | 文献 |
|----------------|------|---------------------------|---|------------------------|------------------------|-------------------------------|---|----|
| 2 1983 9 | 1983 | H14 AT~D028~40 | 廃H | 来迎寺古墳新設 (鹿野第1次調査) | | 83.7, 27~11.22 84.1.9~8.31 | 弥生時代土器段子~中・近世集落 跡 | 7 |
| 3 1983 10 | 1983 | H14 BG~D18~21 | 廃H | KMR-CT 施設 (鹿野第2次調査) | | 83.8.1~12.30 | 弥生時代後期~中世集落 | 7 |
| 10 1983 11 | 1983 | 津島南 D04~16F H04/H04~15 | 廃H | 排水渠 (津島開拓第2次調査) | | 84.1.9~3.5 | 弥生時代~中世集落 | 4 |
| 10 1983 12 | 1983 | 津島南 SH13 | 廃H | 台付古墳 (津島開拓第2次調査) | | 83.11.14~11.22 84.1.9~3.5 | 弥生時代~中世集落 | 4 |
| 31 1986 1 | 1986 | 廃H | CJ~CJ'~28 CT~CY~8~27 CX~DD~26 DD~DG22~23 | 廃H | 段々新設(鹿野第3次調査) | 86.6.2~11.29 | 2300 古代~中世の集落跡 | 10 |
| 36 1986 2 | 1986 | 芦島北 | AV00/AW00~01 | 学生 | 男子空手道部 (津島開拓第3次調査) | 86.12.1~87.6.18, 8.2~9.5 | 研究時代後期~弥生時代中期の河 道、弥生時代の集落社、木栅址、 古代~近世の水田跡 | 19 |
| 38 1986 3 | 1986 | 芦島南 | D2~E09 | 学生 | 崖上運動施設 (津島開拓第4次調査) | 87.1.19~1.22 | 70 弥生時代西側の堤、中川河濱 | 6 |
| 52 1987 2 | 1987 | 廃H | DH~DH3~42 | 廃H | 管理収容室(鹿野第5次調査) | 87.10.6~88.3.2, 3.23~3.31 | 弥生時代中頃下~中、古神の集 落社 | 24 |
| 54 1987 3 | 1987 | 廃H | UD~DF25.0~ D27~28 | 廃H | 校舎基礎の起挖 (鹿野第4次調査) | 87.11.2~11.21 | 30 古代の河堤 | 10 |
| 65 1988 1 | 1988 | 津島北 | AY06~08 AZ06~07 | 大日 | 自然石研磨利用 (津島開拓第5次調査) | 88.6.27~89.3.19 | 研究時代後期~弥生時代中期の居 家式と河濱、弥生時代~近世の水 田跡 | 27 |

| 令和 年号 | 年 度 | 番 号 | 地名 | 調査 地区 | 面積 (ha) | 調 査 名 称 | 調査 期間 | 面積 (ha) | 調 査 名 称 | 文 章 |
|----------|----------------|--------|-----|---|------------|--|-----------------------------------|------------|---|---------|
| 67 | 1968 | 2 | 津島北 | AV - AW04 - 05 | T | 生物心臓(学年別) (津島岡大第5次調査) | 88.9.20 - 89.3.31 | 600 | 続文化後荒、青年時代荒原の野 戦闘と河岸、青年時代-近世の水 田畠 | 35 |
| 70 | 1968 | 3 | 津島北 | AV - AW05 - 06 | T | 花菖蒲・学年別 (津島岡大第5次調査) | 88.10.12 - 89.3.31 | 800 | 続文化後荒、青年時代荒原の野 戦闘と河岸、青年時代-近世の水 田畠 | 35 |
| 65 | 1990 | 1 | 津島北 | AV - AZ06 | 大島 | 河岸形学年別研究 (津島岡大第5次調査) | 90.4.3 - 4.21 | 90 | 古墳時代後援の書 | 27 |
| 92 | 1990 - 1991 | 2 | 東郷 | BW - BC07 - 71 | A | アヒル ^{サバゲー} 谷底センサー (津島岡大第6次調査) | 90.11.20 - 91.6.30 | 600 | 第2、古墳時代後援、土塁、障壁 時代の水田、井戸、建物等 | 40 |
| 96 | 1991 | 2 | 津島南 | UD18 - 19 | A | 鹿島(古生代後 津島岡大第5次調査 A油池) | 91.7.23 - 12.23 | 600 | 続文化後荒の土壌、石器、石器類 発生時代-近世の水田畠 | 32 |
| 96 | 1991 | 3 | 津島南 | UD13 | A | 合谷(古生代) (津島岡大第5次調査 B油池) | 91.7.23 - 12.2 | 140 | 先史人類、古石器、古代-近世水 田畠 | 32 |
| 104 | 1992 | 1 | 津島北 | AJ - AW04 | A | 牛伏山(古生代) (津島岡大第5次調査) | 92.7. - 93.1.29 | 650 | 続文化後荒開拓、先史時代-近世の野 戦闘と河岸、先史時代-近世の水 田畠 | 47 |
| 108 | 1992 - 1993 | 2 | 津島南 | BB - BC10 - 11 | A | 保健管理センター (津島岡大第10次調査) | 93.2.1 - 3.3. 4.27 - 7.31 | 400 | 先史時代後援と廃城跡、陳一吉 代母丹井、古墳時代住居跡、五輪塚 墓、羽林塚 | 64 |
| 115 | 1993 | 2 | 津島北 | AV - AW11 - 12 | A | 鶴谷(古生代) (津島岡大第11次調査) | 93.9.14 - 94.1.15 | 640 | 続文化後荒-生糞使用小字耕種、 鶴谷川の氾濫地、古墳時代水田耕 ほか | 36 |
| 127 | 1993 | 1 | 津島北 | AV - AW13 - 14 | A | 同前(津島岡大第12次調査) | 94.2.9 - 3.31. 4.1 - 11.30 | 1472 | 續文化後荒、古代時代-古墳時代 後援水田耕種、古墳時代-古墳時代 水田 | 64 |
| 134 | 1994 - 1995 | 2 | 津島北 | AV - AX11 - 12 | A | 利根川(古生代) (津島岡大第13次調査) | 95.6.10 - 12.30 95.7.10 - 10.4 | 816 | 續文化後荒開拓 ^{リカ} 、生糞使用水田 開拓、第2、古墳時代-古墳時代水田 の開拓 | 41 |
| 144 | 1995 | 2 | 津島南 | BB - BC12 - 13 | A | 利根川(古生代) (津島岡大第14次調査) | 96.10.25 - 2.14 | 806 | 津島川の水田、水田、古墳時代の水 田、土手 | 46 |
| 147 | 1995 - 1996 | 3 | 津島北 | AW00 - 01 | A | サツマイモ ^{サツ} チャーピンキスラ ボリリ - 1番 (津島岡大第15次調査) | 96.1.16 - 4.25 | 1600 | 久慈川流域の歴史、奈良時代-平安 ・江戸、江戸時代の水田、 江戸、利根川、古墳時代の水田・溝 ・堀、第2、古墳時代-古墳時代の水 田、土手 | 38 |
| 153 | 1996 | 2 | 津島市 | UD19 - 20 | A | 利根川(古生代) (津島岡大第16次調査) | 96.5.7 - 13. | 30.3 | 利根川流域の歴史、奈良時代-平安 ・江戸、利根川、古墳時代の水田・溝 ・堀、第2、古墳時代-古墳時代の水 田、土手 | 44 |
| 154 | 1996 | 3 | 津島北 | AW02 - 01 | A | 信成寺(古生代) (津島岡大第17次調査) | 96.5.21 - 1.9 | 165 | 利根川(古生代) (津島岡大第17次調査) | 46 |
| 173 | 1997 | 1 | 二軒 | - | A | 実験化糞池とその施設、水井 工事等(福道跡第1次調査) | 97.5.10 - 5.20. 7.28 - 31 | 269 | 利根川(古生代) (津島岡大第18次調査) | 45 |
| 174 | 1997 | 3 | 二軒 | - | A | 実験化糞池に付する施設(スローウ ォール構造)、福道跡第2次調査 | 97.11.25 - 12.3 | 120 | 元町、二軒、古生代の水田、通 便路 | 45 |
| 179 | 1997 - 1998 | 4 - 1 | 黒川 | TR 55 - TX 61, BY 56 - 57区 | A | 黑川旁学年統計 (廣田跡第1次調査) | 98.2.27 - 8.6 | 829 | 利根川(古生代) (津島岡大第19次調査) | 50 - 33 |
| 186 | 1998 | 2 | 津島市 | DU11 | A | 福利寺遺跡(古) (津島岡大第20次調査) | 98.4.7 - 4.10 | 16 | 石代の水田耕種 | 33 |
| 187 | 1998 | 3 | 津島北 | TA09 - 10 | A | コラシニア・シンセンセンタ ^サ 跡(古 生代) (津島岡大第21次調査) | 98.7.27 - 99.2.18 | 1019 | 続文化後荒 ^{リカ} 、多生時代の河道、 古墳時代の水田、中耕作、近世水 田栽培と農業、漁業 | 65 |
| 188 | 1998 | 4 | 豊川 | TP - TS00 - 32 | A | 豊川沿岸(古) (豊川跡第1次調査) | 98.7.28 - 9.1 | 136 | 古市町代代、中耕作、 古市町代代、中耕作 | 33 |
| 189 | 1998 | 5 | 津島北 | AY07 | A | 牧谷(古) (津島岡大第2次調査) | 98.10.19 - 28 | 16 | 毛色毛上トヨ ^{リカ} 、ヒット部、 中耕作 | 33 |
| 190 | 1998 | 6 | 津島北 | AX09 | A | エレベーター ^古 に伴う水田 (津島岡大第23次調査) | 98.11.6 - 24 | 30.2 | 続文化時代中耕土。城址時代開拓 ・古市町代代、土代作、保土保、 古市町代代(中耕土)1点。 | 65 |
| 191 | 1998 - 1999 | 7 | 豊川 | CD33 - 37、CE - CF26 - 37、CG - CJ20 - 37、CK - CI25 - 37 | A | 桂桂寺(古) (津島岡大第24次調査) | 98.11.27 - 99.5.11 | 2088 | 氷虫町代代(水田耕種)、中耕作、 中耕作、中耕作、水田・土耕、古市町代 代(水田耕種)、中耕作、水田・土耕、 中耕作の水田、(水田耕種)出土。 | 53 |
| 192 | 1998 - 1999 | 8 | 津島北 | AW02 - 03 | A | 穂倉(古) (津島岡大第25次調査) | 99.3.1 - 7.12 | 773.5 | 続文化後荒 ^{リカ} 、土代作、古市町代 代(水田耕種)、中耕作、水田・土耕、 古市町代代(水田耕種)、中耕作、 水田・土耕、古市町代代(水田耕種)、 中耕作、水田・土耕、古市町代代(水田耕 種)、中耕作、水田・土耕。 | 53 |
| 220 | 1999 | 3 | 豊川 | CD - CE10 - 22, DD - DF16 - 22 | A | 同上(古) (津島岡大第26次調査) | 99.5.7 - 99.10.14 | 264.1 | PC-Bガッタリ ^{リカ} トト直立では 古代の水田、排水溝等は直立では 無 ^{リカ} 、逆斜面。 | 56 |
| 221 | 1999 | 4 | 黒川 | CD - CM19 - 42 | A | 病院(古) (津島岡大第27次調査) | 99.8.19 - 13.22 | 2320 | 弘生(古)代田面正、古代-古墳時代 中耕作 ^{リカ} 、逆斜面 ^{リカ} 。 | 56 |
| 222 | 1999 | b | 津島北 | AZ15 - BA14 | A | 水谷(古) (津島岡大第28次調査) | 00.2.3 - 7.26 | 1339 | 続文化後荒 ^{リカ} 、代田 ^{リカ} 、古市町代 代(水田耕種)、中耕作、水田・土耕、 古市町代代(水田耕種)、中耕作、 水田・土耕。 | 56 |

付表2-(2) 試掘・確認調査

| 登録番号 | 年次 | 番号 | 造営名 | 開削区域 | 所属 | 調査名 | 延長距離 | 造成土質 | 種別 | 文獻 | |
|------|------|----|------|-------------------------|----|------------------------|---------|---------|--|------------------------------|---|
| 4 | 1983 | 1 | 津島南 | BH13 | 農 | 合併跡地予定地 | 2.5 | | 佐生時代高砂郡片川(83年度発掘) | 1 | |
| 5 | 1983 | 2 | 津島南 | BH17 | 農 | 博六井中間バンブ子予定地 | 3.5 | | | 1 | |
| 6 | 1983 | 3 | 津島北 | BE-301488, BH19B816 | 農 | 排水設置地予定地 | 2.0 | | 29箇所で試坑。佐生時代高砂郡片川(83年度発掘) | 1 | |
| 7 | 1983 | 8 | 津島北 | AW05 | 工 | 松谷貢賞予定地 | 3.0 | 1 | 土整計画山田 | 1 | |
| 12 | 1983 | 3 | 津島北 | BC-BU15 | 事 | 大學寺施設新子予定地 | 2.0~3.0 | 0.9 | 土耕計画山田 | 1 | |
| 28 | 1983 | 2 | 津島北 | BH10 | 保 | 保護施設タクシーホテル予定地 | 2.0~3.0 | 0.8 | 清水山田 | 1 | |
| 14 | 1983 | 4 | 津島南 | EH22-23 | 農 | 高島町予定地予定地 | 2.0~3.0 | 0.6 | 土耕計画山田(1987年度土立会) | 1 | |
| 25 | 1983 | 7 | 津島北 | BU03 | 工 | 津島町新幹子予定地2.0 | 0.9 | 0.9 | 七筒山田(1987年度土立会) | 1 | |
| 21 | 1984 | 1 | 東川 | BU00-3 | 农 | 矢野北地予定地 | 1.4 | 0.5~1.0 | 中川・鶴賀・赤堀・金森・鶴見・土佐原 | 2 | |
| 22 | 1984 | 2 | 東川 | CT-CU29C 19-20-22-23 | 営理 | 鶴見原山田学校新予定地 | 2.7 | 0.8~1.0 | 中川・芦田の施設丘陵山田(1984年度別段別記) | 2 | |
| 23 | 1985 | 3 | 津島北 | AV-AW99-05 | 工 | 男子生活教育予定地 | 2.0~3.0 | 1 | 鶴文時代・中川の造林・道場(1986年度発掘報告) | 5 | |
| 24 | 1985 | 2 | 津島北 | AX02 | 农 | 安佐施設予定地 | 2.6~3.4 | 1.2 | 鶴文・佐佐木山田(1987) | 5 | |
| 25 | 1985 | 1 | 津島南 | PH08 | 農業 | 講習施設予定地 | 3.5 | 1.2 | 津島農業講習所(1986年度土立会) | 5 | |
| 29 | 1985 | 4 | 東川 | AJ33-AJ40- AJ-AK26 | 农林 | 八木川施設整理施工に先づつ 範囲確認跡 | 2.2~3.0 | 0.9~1.4 | 佐生時代・中川の植物 | 5 | |
| 33 | 1986 | 3 | 本郷南 | DP-BG09 | 学生 | 尾辺沿岸構造新予定地 | 2.4 | 1.2~1.7 | 1.1 | 佐生時代・朝倉山・中野川直轄山田(1986年度発掘報告) | 5 |
| 37 | 1986 | 4 | 津島北 | AY-AZ02 | 大川 | 自然教育施設新予定地(1985年度発掘報告) | 1.6~3.2 | 0.6~0.8 | 鶴文時代中川・安佐の植物・溝(1986年度別段別記) | 6 | |
| 45 | 1987 | 4 | 二牛 | AP02 | 工 | 外国人宿泊施設予定地 | 2.2~2.8 | | 笠置・芦生時代・鶴文時代の道場・溝確認 | 8 | |
| 46 | 1987 | 5 | 津島北 | AV11 | 植 | 鶴台施設整備センター新予定地 | 2.0~3.0 | 2 | 黒毛牛を推奨2.2m前後で標準(1985年度別段別記) | 8 | |
| 48 | 1987 | 6 | 津島北 | AY09 | 施 | 身体障害者用スレーベーラー施設予定地 | 3.0~3.5 | 約1.0 | 笠置・中野の施設・中川・古代の水路(抵抗して施設を立てに及ぶ) | 8 | |
| 49 | 1987 | 7 | 津島南 | BG09 | 教委 | 身体障害者用スレーベーラー施設予定地 | 2.5 | 0.7 | 鶴文時代土耕跡を認証文献・中川・近野山土耕山田(歴史・発展して歴史観)と並ぶ | 8 | |
| 51 | 1988 | 17 | 津島北 | AX06-06AW04 | T | 吹き放設施設予定地 | 2.0~3.5 | | 黒毛牛を推奨3.0m前後で標準(1985年度別段別記) | 11 | |
| 62 | 1988 | 19 | 津島北 | BH18-19 | 農業 | 施設跡地新設施設及び津島子農業施設 | 2.3 | 1.1~1.2 | 黒毛牛を推奨3.0mで標準(1985年度別段別記) | 11 | |
| 63 | 1988 | 20 | 津島北 | NIC29 | 小 | 国際交流会館 | 2.5 | 1.2 | 黒毛牛を推奨3.0mで標準(1985年度別段別記) | 11 | |
| 77 | 1989 | 3 | 津島北 | AZ17 | 大川 | 合併処理施設予定地 | 4.0 | 1.6~2.0 | 中野・芦生の本川の継続・溝(1985年度工事手帳) | 14 | |
| 78 | 1989 | 4 | 津島北 | BD02 | 学生 | 学生宿舎予定地 | 2.0~3.2 | 1 | 鶴文時代・草野・扇原の開闢(1980年度工事手帳) | 14 | |
| 79 | 1989 | 2 | 津島南 | AZ-BA05 | 牧 | 身体障害者用スレーベーラー | 2.5 | 0.8 | 鶴文時代・鶴羽山の開拓の跡み 津島農業講習所(1985年度別段別記) | 14 | |
| 83 | 1989 | 5 | 津島北 | AV-AW13 | 園 | 園芸施設予定地 | 3.0 | 1.4~1.6 | 古代木川・芦生・古代の溝(1985-1990年度別段別記) | 14 | |
| 84 | 1990 | 3 | 津島南 | SC02 | 学生 | 学生合宿用施設予定地 | 2.5 | 1.1 | 芦生時代・御殿跡・中野・岩井片川(1987) | 16 | |
| 89 | 1990 | 4 | 笠置地区 | 晋 | 晋 | 資助・扶助料新付付託施設整備 | 2.5 | 0.7 | 中川・笠置の施設・恩澤(1987) | 16 | |
| 90 | 1990 | 5 | 東川 | BY-BZ68 | ア | アイツト・ブ組合センター予定地 | 2.3 | 1.2~1.3 | 中野・芦生の施設など(1990-91年度別段別記) | 18 | |
| 91 | 1990 | 6 | 津島北 | AW-AX11 | 少 | 福利厚生施設予定地 | 3.9 | 1.4~1.6 | 鶴文・古墳時代の溝・中野・芦生 | 18 | |

| 組合 番号 | 年度 | 番号 | 地名 | 調査 地区 | 周囲 | 調査 内容 | 強制 率(%) | 造成率(%) | 現 状 | 文獻 |
|----------|------|------|------|----------------------------------|----|-------------------------|------------|----------|--|----|
| 121 | 1992 | 3 | 佐賀市 | TB-10F-22-23 | 石 | 農中経用耕作地実測調査 | 1.5 | | 半～近世耕上。GL=1.3mで耕上と、側文・縦の柱目。 | 3 |
| 135 | 1994 | 3 | 佐賀市 | BS20 | 農業 | 動植物調査 | 2.0 | 0.9 | 古式土塹、馬糞堆、茅葺は田舎地に占められる。茅葺は古式のもののみ。 | 31 |
| 140 | 1995 | 4 | 佐賀市 | BS26 | 事 | 園芸栽培地新設予定地 | 4.1・2.4 | 1.6 | 古式土塹、馬糞堆、茅葺は田舎地に占められる。茅葺は古式のもののみ。 | 38 |
| 146 | 1995 | 5 | 津島市 | AW2-03 | 堤 | 環境工学部研究 | 2.4 | 1.2 | 古式土塹、茅葺は上土層、古式の茅葺は下土層。 | 38 |
| 150 | 1995 | 6 | 津島市 | SP07 | 學 | ボクシング部グラウンド移設 | 3.0 | 3 | 斜面2.5mで馬糞堆を確認。茅葺、古式土塹の2種。古代土塹は、茅葺の2種の黒色を確認。 | 36 |
| 176 | 1997 | 5, 6 | 一村 | | 石 | 実験研究施設工事に伴う調査 | 1.66~2.1 | 0.8 | GL=1.4mでシート貯の壁。以降が砂利と土代地。TP2では古式土塹、茅葺の黒色を確認。 | 50 |
| 177 | 1997 | 8 | 福岡 | B-67 | 例 | 高嶺区立換、筑紫第7工事調査 | 2.2 | 0.9 | 中丘、朱塗時代の駆除跡を確認。 | 59 |
| 193 | 1998 | 9 | 津島北 | AT20 | 土 | コマツレ、タクシセンター新設工事に伴う調査 | 2.7~3.4 | 1.3 | 築山2.5mで土壌、茅葺と周辺の古式土塹の2種。 | 55 |
| 194 | 1998 | 10 | 津島北 | AW2-03 | 堤 | 新設(?)新設に伴う調査 | 4.5 | 1.2 | 古式土塹、茅葺と、古式時代の黒色を確認。 | 56 |
| 195 | 1998 | 11 | 津島 | CH-CG3-14, CH-25・26, CK-36, CK15 | 穴 | 病院新設に伴う調査 | 2.0~2.4 | 1.0 | 古式土塹、中丘2面、透けた透溝山の傾斜。古式土塹は透け地盤が古い傾斜。古式時代以前についての透溝山。 | 53 |
| 196 | 1998 | 12 | 奈良地区 | | 草 | バイオ実験施設工事に伴う調査 | 1.5 | 0.4 | 透溝山の地盤。透溝山確認。 | 55 |
| 197 | 1998 | 13 | 佐賀市 | AW01 | 土 | システム工学科新設に伴う調査 | 2.8 | 1.0 | 1.8mで透溝山、側文板積の遺構確認。 | 53 |
| 198 | 1998 | 14 | 佐賀市 | AV-02・03・06, AV08 | 市 | 健保施設新設に伴う調査 | 2.4~3.8 | 0.8~1.6 | TP1, 3, 5と透溝山、TP2, 4は透溝山、TP3で馬糞堆、TP4で馬糞堆。 | 53 |
| 213 | 1999 | 6 | 津島市 | AZ15, DA14 | 支流 | 総合研究センターに伴う調査 | 12.7, 23.5 | 0.6, 1.1 | 透溝山から透溝山、且、透溝山より馬糞堆、透溝山、以下透溝山の透溝山。 | 56 |
| 224 | 1999 | 7 | 津島北 | AV08 | 二 | 透溝山新設に伴う調査 | 1.2 | 0.2 | 透溝山2.5m、透溝と古式土塹。 | 56 |
| 243 | 2000 | 6 | 津島北 | AV00, AX00, 02, GL, AZ09, AW08 | 透溝 | 透溝と発生場所における透溝山(透溝)に伴う調査 | 2.6~3.2 | 1.7~0.9 | 6面の透溝山、透溝、古式時代の透溝山。古式透溝山。 | 6 |
| 257 | 2000 | 7 | 津島北 | BD11 | 透溝 | 創立百年記念の新設に伴う調査 | 2 | 0.8 | 透溝山(0.8m、透溝山2.1m)で透溝山を確認。 | 61 |

付表2-(3) 立会調査

| 組合 番号 | 年度 | 番号 | 調査地名 | 調査 月日 | 周囲 | 調査 内容 | 北側 面積 (m ²) | 造成 率(%) | 地 質 | 文獻 |
|----------|------|--------|------|-------------------------------|----|---------------------------|-------------------------------|------------|---------------------------|----|
| 1 | 1983 | 12 | 東山 | | 牧 | 昭和学校芝生 | 4.0~5.0 | | SAT帶中 | 1 |
| 6 | 1983 | 23 | 鹿戸 | AO-AW22 | 田原 | 駄糞地と排水溝設置調査 | 1.3 | | 透生馬代安土質、分離形上層 | 1 |
| 20 | 1984 | 20 | 佐賀市 | B-15-17 | 事 | 南北合併地開拓排水管設置 | 1.0~2.2 | 1.0 | 透、土壤化土塙、透生馬代、透溝 | 2 |
| 26 | 1985 | 6 | 鹿戸 | AW-BU23-31 | 鹿戸 | 外象地排水溝設置新設水管理 | 1.3~1.7 | 0.7~1.3 | 透、透中の透溝、透路を確認。 | 5 |
| 30 | 1985 | 12 | 鹿戸 | AGK1AG24/F23 | 鹿戸 | 黒的透自然透地透工事、透気透膜、ハイドロカルト埋設 | 1.2~1.7 | 0.9~1.3 | 透、透中の透溝、透路を確認。 | 5 |
| 33 | 1986 | 12 | 津島北 | BP08-09 | 透 | 透沟工事 | 2.3 | 1.3 | 透沟と透溝、透路 | 6 |
| 49 | 1986 | 2 | 津島北 | TG08 | 透 | 透沟工事 | 0.2~2.0 | 0.8 | 透沟土塙等 | 6 |
| 42 | 1986 | 24 | 津島 | CL-C312C-01 CX15X-D1A4 | 透 | 透溝及び透溝工事 | 2 | 0.8~1.0 | 中透化土塙 | 6 |
| 43 | 1986 | 25 | 津島市 | SP07-08 | 透 | 透溝透地透工事 | 1.8 | 0.9 | 中透化土塙 | 6 |
| 44 | 1987 | 8 | 鹿戸 | BC37 | 透 | 透溝透地透工事 | 2.5 | | 透生馬代と透台、透隙透路。 | 8 |
| 66 | 1988 | 17 | 津島北 | BG10-11 | 透 | 透溝透地透工事 | 2.2 | 1.5 | 透沟と透土塙下約2mで断続。 | 11 |
| 74 | 1988 | 8 | 津島北 | AZ20 | 大白 | 透沟透地透工事 | 1.4 | | 透沟向かう落ち土塙。 | 14 |
| 75 | 1988 | 10 | 津島北 | AA05 | 透 | 透沟透地透工事 | 1.9 | 1.0 | 透生馬代被覆水口、透能透。 | 14 |
| 80 | 1989 | 46 | 鹿戸 | CE30-37-44CJ- CR45C-L28-29 | 鹿戸 | 透沟透地透工事 | 1.2~1.5 | 0.7~1.0 | 小透貫水塙。 | 14 |
| 85 | 1990 | 16, 19 | 津島北 | AV08-0 | 透 | 透山並木透地透工事透地透工事 | 0.4~3.0 | 0.6~2.4 | 透溝、透沟上層、透能透。(1989年完成透能透)。 | 18 |
| 88 | 1990 | 20 | 津島北 | BG02-04BD03- 04 | 透 | 透沟透地透工事透地透工事 | 2.3 | 1.2 | GL=2.3mで透溝と透能透。 | 18 |
| 95 | 1991 | 9 | 津島北 | EC18 | 透 | 透沟透地透工事透地透工事 | 2.0 | 0.8 | 透溝と透能透。 | 21 |
| 99 | 1991 | 17 | 津島北 | BD16 | 透 | 透沟透地透工事透地透工事 | 1.7~1.8 | 0.5 | 透溝と透能透。 | 21 |

| 総合 等号 | 年度 | 番号 | 電柱名 | 調査地区 | 所見 | 調査名稱 | 指標深度 | 造成土質 | 概 要 | 文 句 |
|----------|------|----|-----|--|----|---|-----------|-----------|---|--------|
| 200 | 1998 | 22 | 津島北 | A709, BA09 | 埋 | ヨコドレ・ショットセンター支障配管設置工事 | 1.4 | 1.0 | 1.4mで黒色土上砂 | 33 |
| 201 | 1998 | 24 | 津島北 | TC112, BC112 | 埋 | 西瀬利街灯設置工事 | 1.4 | 0.95 | 中灰層まで削除 | 53 |
| 202 | 1998 | 31 | 津島北 | AX003～AY006 | 埋 | 松原新設に伴うガス配管改修工事 | 1.2～1.4 | 0.65～0.95 | 中耕界まで削除 | 53 |
| 203 | 1998 | 31 | 津島市 | BC110 | 埋 | 学生会館改修に伴うトラック停車場充填工事 | 2.2 | 1.45 | GL～1.7mまで底被り状態、 2.2mまで骨材混在土質 | 33 |
| 204 | 1998 | 25 | 津島北 | BA00 | 埋 | NFT式雨水移設工事 | 1.5 | 0.9 | 底被り土質、褐色系粘土質 | 33 |
| 205 | 1998 | 26 | 津島北 | BV73 CN78 | 埋 | 松原新設に伴う底被り地盤工事 | 1.2 | 1.0 | 中耕界まで削除 | 53 |
| 206 | 1998 | 41 | 津島北 | AX003～AY007 | 埋 | 深谷駅東管埋設工事 | 1.4 | 0.6～1.4 | 9箇所のうち5箇所で中耕層まで、 2箇所まで削除、1箇所まで底被り地盤工事 | 53 |
| 207 | 1998 | 42 | 津島北 | AU02, AW02 | 埋 | 馬場橋設に伴う埋木移植 | 2.2 | 1.1～1.3 | 2.0mで底被り層、2.2mで岩 丈木移植を2箇所 | 53 |
| 208 | 1998 | 44 | 津島北 | AV003, AW03 | 埋 | 校舎新設に伴う生活排水管敷設工事 | 1.97 | 1.4 | 古壁界まで削除、現京・土壌 管内充填 | 33 |
| 209 | 1998 | 48 | 津島北 | AW03 | 埋 | 校舎新設に伴うガス配管改修工事 | 1.45 | 1.0 | 中耕界まで削除 | 53 |
| 210 | 1999 | 8 | 津島北 | - | 施 | 施内井戸設置工事 | 1.15～1.35 | 0.5～1.2 | 2箇所に3.5mまで黒色土質 | 50 |
| 211 | 1999 | 10 | 津島北 | AW02, 03 | 埋 | 新規工事用に伴う生活污水管敷設工事 | 0.8～1.6 | 1.18～1.25 | 15箇所のうち10箇所で底被り層まで 削除 | 56 |
| 212 | 1999 | 12 | 津島北 | AZ008, 09 | 埋 | ヨコドレ・ショットセンター新設工事 に伴うハンドホール | 1.48～2.1 | 1.03～1.16 | 2箇所のうち1箇所で古壁界まで 削除 | 56 |
| 213 | 1999 | 13 | 津島北 | AW02 | 埋 | 板金(主柱)新設に伴うスローブ 設置工事 | 3.5 | 1.2 | 自然25cm。黒色土層に現京、及 代土地、古代土、海又後期ピット 遺跡 | 56 |
| 214 | 1999 | 15 | 鹿児 | BW65～71 | 埋 | 研究棟新設に伴う給水排水管敷設工事 | 1.2～1.4 | 0.9 | 中耕界まで削除 | 56 |
| 220 | 1999 | 18 | 鹿児 | ER05 | 埋 | 細胞化新設に伴う排水池 | 2.2 | 1.1 | 園林地2.0m、近江浜、中浜溝、 ヒツジ畠 | 56 |
| 221 | 1999 | 27 | 美山 | BY 42～44, DL 43～44 | 埋 | 施設整備(吸水池)地中配管 | 1.25～1.45 | 0.45～0.5 | 中耕界まで削除 | 56 |
| 222 | 1999 | 41 | 鹿児 | CF21～28, CP～ CL28, CL～CF28 ～30 | 埋 | 施設整備(吸水池)地中配管 | 1.7 | - | 野松山1.8m、松川11年新設3区画 部分で古壁ピット段階 | 56 |
| 223 | 1999 | 38 | 津島 | A209 | 理 | コアボーリングセンタ・新設工 事・構木 | 1.0～1.2 | 0.8～1.0 | 6箇所のうち1箇所で黒色土対応 など古壁 | 56 |
| 224 | 1999 | 46 | 津島 | CN16, CW16, DA 46 | 埋 | 施設新設に伴う污水管 | 2.3 | 1.2 | 古壁界付近1.5m、土壌改良、中 性層の変遷過程 | 56 |
| 225 | 1999 | 47 | 鹿児 | CT158, CW・DA・ DC-DD・DF59 | 埋 | ダグラウンド隕球ネットガード | 2.0～2.3 | - | 11箇所のうち6箇所が河岸段、 7～10箇所が鹿島水系、最北端で は河港段 | 56 |
| 226 | 1999 | 48 | 鹿児 | BT51 | 埋 | 病院新設に伴う污水排水管 | 2 | 1 | 造成土下7箇所段階、古時代階 まで削除 | 56 |
| 228 | 2000 | 10 | 鹿児 | CW～DA32～43 | 埋 | 施設新設工事・構造試験改修工 事 | 0.7～0.95 | 0.7 | 既掘工事内、GL～0.7mで明治初期 の包埋層、若葉色粘土層(1.1m), 褐色粘土層(1.1m) | 61 |
| 230 | 2000 | 12 | 津島北 | AX03, AZ02 | 埋 | 電線塔上部(1層)軒行式 | 0.6～0.7 | 0.5 | GL～0.5mで底被り状態、中耕内 土を検出 | 61 |
| 231 | 2000 | 13 | 鹿児 | AE30, AE35, AE 48, AH42～44, AE 48 | 西面 | 監視構造排水改修工事 | 1.0～1.1 | 0.5～1.0 | 4箇所削除、うち2箇所に造成工 事下に暗赤色鉄錆(2箇所) | 61 |
| 233 | 2000 | 15 | 津島北 | AU07 | 埋 | JPhone小屋株式会社 事務所自 由車・荷役荷物搬入基盤ゲーリング柱 施工・車道工事施工 | 2.7 | - | 技術広場工事の箇所、地山 | 61 |
| 234 | 2000 | 14 | 鹿児 | AE16 | 埋 | 火災リスク切替に伴う配管切替工事 及びバルブ改修工事 | 1.3～1.5 | 1.0～1.1 | 造成土下に暗赤色鉄錆(2箇所)を確認 | 61 |
| 236 | 2000 | 17 | 津島北 | RA12 | 埋 | 津島通区電柱工事 | 1.6 | 1.0 | 底被り土層に灰白色粘土層(1.0m), 暗赤色鉄錆(1箇所) | 61 |
| 241 | 2000 | 22 | 津島北 | AU02, AV03 | 埋 | 岡山大学(1層)学部校舎(1層) 新設工事 | 0.7～1.0 | 0.7 | 造成土下に暗赤色鉄錆(2箇所)を確認 | 61 |
| 242 | 2000 | 23 | 津島北 | AY09 | 埋 | 岡山大学(2層)施設改修工事一時 休止地盤整備復旧工事 | 1.3 | 0.9 | 造成土下に暗赤色鉄錆(2箇所)を確認 後地盤下に灰白色粘土層(1.0m), 暗赤色鉄錆(1箇所) | 61 |
| 246 | 2000 | 25 | 鹿児 | - | 埋 | 岡山大学(4層)施設新設その他の 工事(新設・開発・構築) | - | - | 淡と黒れわたる地盤などと確認 | 61 |
| 247 | 2000 | 26 | 津島北 | AY10, AZ10 | 理 | 岡山大学(3層)施設改修復旧改 善工事(改修) | 0.85～1.60 | 0.8～1.1 | 技術広場下にGL～1.6mまで 堆積土、GL～1.5mで中耕内土 を検出が北西方面に向かって推 進 | 61 |
| 248 | 2000 | 26 | 鹿児 | CN15, ZZ, 27, CO 36, 43, CS 45, CV45 | 埋 | 花壇及び外洋の植栽工事 | 1.6 | - | 白灰色土層、暗赤色粘土層、暗 赤色鉄錆(2箇所)を確認、いずれもし まり土(底被り)付近と想われる | 61 |
| 250 | 2000 | 29 | 鹿児 | DJ27 | 埋 | 岡山大学(3層)施設改修工事(1層) 新設工事 | 0.8～1.15 | 0.7 | GL～0.7mで底被り土層(1.0m), 0.85mで暗赤色粘土層(2箇所) | 61 |
| 262 | 2000 | 47 | 鹿児 | DG～DJ26～67 | 埋 | 鹿児町通花壇排水改修工事(1層) 新設工事 | 2.1～2.3 | 1.8～1.5 | 130mにわたりて改修路筋を行 な仕事、古代土層、現京 | 61 |
| 266 | 2000 | 42 | 津島北 | AW08, AX08 | T | 関山大学(4層)施設改修工事 新設工事 | 1.6～2.05 | 1.45 | GL～1.45mで底被り状態(1.0m), GL～1.82mで底被り状態(1.0m), 暗赤色粘土(中耕?)を確認 | 61 |

| 登録番号 | 年度 | 番号 | 施設名 | 調査地区 | 所属 | 調査実施年 | 調査深度 | 深度孔数 | 概要 | 文獻 | |
|------|------|----|-----|---|---------------|----------------------------|---------|-----------|---|---|----|
| 269 | 2000 | 44 | 津島北 | DA13, 16 | | 若松町実験施設柱端柱工事 | 1.5~1.7 | 1,0 | GL-1.4mで中空層+鉄筋層間の 隙間、上層を一基層 | 61 | |
| 276 | 2001 | 4 | 津島北 | AZ10 | 理学部校舎改修瓦気密性工事 | | 1.6 | 1.0~1.2 | ハンガーポール方式で中空の清 除GL-1.4mで灰色粘土で、GL- 2.1mまで灰色粘土。谷間にあた る可能性あり。 | 66 | |
| 277 | 2001 | 1 | 津島南 | BR-BC16 | 市 | 本郷山電線設置工事 | | 1.5~2.1 | 1.2~1.4 | GL-0.6mで中空層上に、以下實 尾乞粘土、後赤色粘土、灰岩或 灰岩質土、アンガル石を複数層上。 中空層より深所 12.5mで掘削、うち1.2mでGL- 1.4mで灰色粘土層(古代)を 確認。 | 66 |
| 278 | 2001 | 13 | 津島南 | BS14 | 市 | 本郷山汚水桿反対工事 | | 1 | 0.6 | GL-0.6mで中空層上に、以下實 尾乞粘土、後赤色粘土、灰岩或 灰岩質土、アンガル石を複数層上。 中空層より深所 12.5mで掘削、うち1.2mでGL- 1.4mで灰色粘土層(古代)を 確認。 | 66 |
| 279 | 2001 | 27 | 津島南 | BD-BC13 | 市 | 本郷山地盤改良工事 | | 0.5~1.6 | 1.0 | 中空層より深所 12.5mで掘削、うち1.2mでGL- 1.4mで灰色粘土層(古代)を 確認。 | 66 |
| 280 | 2001 | 30 | 津島南 | BS-BC14 | 市 | 本郷山地盤改良工事 | | 0.9~1.6 | 0.65~0.8 | 12.5mで掘削、途中0.45~0.25 m、底底層以下を確認。中空 層まで掘削 | 66 |
| 281 | 2001 | 31 | 津島南 | BS14 | 市 | 本郷山地盤改良工事に伴う旧支工 監査調査報告書 | | 0.85~1.05 | 0.45~0.75 | 12.5mで掘削、途中0.45~0.25 m、底底層以下を確認。中空 層まで掘削 | 66 |
| 282 | 2001 | 37 | 実作 | BR-CA43-CA43 -55, CA44-CL 45, BR-CA55 | 院 | 底台教育研究施設改修工事に伴う機械設 置工事 | | 1.65 | 0.7~0.9 | 中空層まで掘削、中空の上部が多 数露出した遺跡あり | 66 |

付表3 墓藏文化財調査研究センター収蔵遺物概要

| 所属 | 種類 | 地 区 | 要 会 名 号 | 総数 | 土器 | 器物 | 木器 | 漆器 | 傳子 | その他 | チラシ | 書 名 | 文獻 |
|----|----|--|---------|-----|------|----|-----|----|----|----------------------------|-----|----------|-------|
| 医歯 | 発掘 | 東日本第1次調査会(外米谷会) | 398 | 495 | 15.3 | 60 | 0.5 | 1 | 28 | 先史・古墳・中世・近世・現代 | 7 | 佐藤信重著等遺物 | |
| 医歯 | * | 東日本第2次調査会(NMTCCT会) | 118.9 | 94 | 0.4 | 20 | 0.5 | | 4 | 弥生・古墳・中世・近世・木葉等 | | | |
| 医歯 | * | 東日本第3次調査会(秋吉会) | 131.6 | 96 | 0.3 | 90 | 0.3 | | 5 | 古代・中世 | | | 19 |
| 医歯 | * | 東日本第4次調査会(笠置会) | 3.5 | 2 | 0.3 | | 0.2 | | 1 | 古代・奈良時代 | | | |
| 医歯 | * | 東日本第5次調査会(笠置会) | 130 | 87 | 2.5 | 20 | 1.5 | | 19 | 伊勢原野・中世・近世 | | | 21 |
| 医歯 | * | 東日本6次調査会(アソブ・アソブセミナー) | 62 | 59 | 0.5 | 1 | 1.5 | | | 中世・晉國製陶 | | | 49 |
| 医歯 | * | 東日本第7次調査会(喜多研究会) | 81 | 66 | | 10 | | | 1 | 弥生・近世 | | | 33 |
| 医歯 | * | 東日本第8次調査会(吉川治彦会) | 8 | 8 | | | | | | 弥生・近世 | | | 35 |
| 医歯 | * | 東日本第9次調査会(神浦) | 120.1 | 96 | 0.1 | 23 | | | 9 | 弥生・近世・木標示点 | | | 36 |
| 医歯 | * | 東日本第10次調査会(吉田清) | 2 | 2 | | | | | | 古代・近世 | | | 36 |
| 医歯 | * | 東日本第11次調査会(西村正則) | 74 | 66 | | 5 | | | 2 | 弥生・近世・木標示点 | | | 36 |
| 医歯 | * | 東日本第12次調査会(スクエアセミナー) | 147 | 77 | 1 | 54 | | | 15 | 弥生・近世・佛 | | | 61 |
| 医歯 | * | 東日本第13次調査会(総合歴史研究会) | 251 | 211 | 5 | 20 | | | 28 | 弥生・近世・土管屋まで | | | |
| 全 | * | 北山人第1次調査会(NP-1) | 5 | 0.5 | 0.5 | 4 | | | | | | | 30 33 |
| 全 | * | 北山人第2次調査会(土器の性別埋蔵実験) | 17.5 | 22 | 1.5 | | | | 4 | 橿生・古代 | | | 38 43 |
| 全 | * | 北山人第3次調査会(男子の性別) | 67 | 49 | 1.5 | 2 | 4.5 | | 10 | 橿生・古代・近世・石瓢形 輪・軒瓶(江戸時代) | | | 48 |
| 学生 | * | 北山人第4次調査会(性別調査) | 1 | 1 | | | | | | 橿生・古代・近世・人形埴輪・水波鏡盒・食器等 | | | 4 |
| 大白 | * | 津島岡大字3次調査会(自然条件と地質) | 82 | 68 | 3 | 1 | 8 | | 2 | 橿生・古代・近世・人形埴輪・本 製繩(樺皮) | | | 27 |
| 工 | * | 津島岡大字6次調査会(生物の利用技術) | 49 | 33 | 1 | 9 | 6 | | | 橿生・古代・近世・人形埴輪・本 製繩(樺皮) | | | 35 |
| 工 | * | 津島岡大字7次調査会(鉱工学科) | 31.5 | 10 | 0.5 | 1 | | | 20 | 橿生・古代・近世 | | | 35 |
| 全 | * | 津島岡大字8次調査会(伝伝子型態論) | 11.5 | 10 | 0.5 | | | | 1 | 橿生・古代・近世 | | | 35 |
| 工 | * | 津島岡大字9次調査会(生物学) | 50.5 | 30 | 2.5 | 3 | | | 15 | 橿生・古代・近世 | | | 37 |
| 全 | * | 津島岡大字10次調査会(考古学) | 84 | 69 | | 5 | | | 10 | 橿生・古代・近世 | | | 39 |
| + | * | 津島岡大字11次調査会(地質) | 5.5 | 3 | 0.5 | | | | 2 | 内文後期 | | | 39 |
| + | * | 津島岡大字12次調査会(考古学) | 35 | 24 | 1 | 20 | | | 10 | 内文後期・古墳 | | | 39 |
| + | * | 津島岡大字13次調査会(考古学・古墳) | 12.3 | 12 | 0.5 | | | | | 内文後期・古墳 | | | 41 |
| + | * | 津島岡大字14次調査会(歴史・古墳) | 13 | 12 | | | | | 1 | 歌川・古墳 | | | 46 |
| + | * | 津島岡大字15次調査会(セラライトペ ンチャ・ジネクス・ラボラトリー) | 67 | 13 | 10 | 20 | | | 24 | 萬古・後期・朝鮮・新石・ハサ・アン ツ | | | 38 |

| 所管 | 種別 | 件数(1年: 2,301 リットル) | | | | | | 指 定 等 | 大 手 | |
|-------|----------|--------------------|--------|--------|------|-------|-----|--------|-------------------------|----|
| | | 品目 | 上回り | 下回り | 木炭 | 種子 | その他 | サンゴ | | |
| 内閣 | * 沿岸水質汚染 | 品目別大第16号料金(船舶油燃費) | 0.3 | 0.3 | | | | | 上家町朝・菅島造物 鴨文鳥島・浜丸・中津 | 43 |
| 農 | * | 品目別大第17号料金(農業機械) | 26 | 61 | 3 | | | 12 | 鴨文鳥島・若狭 | 45 |
| 全 | * | 品目別大号料金(漁業用具等) | 1 | 1 | | | | | 鴨文鳥島・若狭 | 33 |
| | * | 津島鳥・若狭(3年) | 45 | 21 | 1 | 4 | 2 | 16 | 鴨文鳥島・若狭 | 33 |
| | * | (コラボーションセンター) | | | | | | | | |
| 能 | * | (津島鳥・若狭) | 1 | 1 | | | | | 鴨文鳥島・若狭 | 33 |
| 工 | * | (津島鳥・若狭) | 7 | 5 | 2 | | | | 鴨文鳥島・若狭 | 33 |
| 農 | * | 品目別大号料金(農業機械) | 34 | 26 | 2 | 3 | | 2 | 鴨文鳥島・近海・古代船等付、佐野物 | 33 |
| 文部省 | * | 品目別大号料金(総合研究会) | 22 | 29 | 1 | 90 | 2 | 5 | 鴨文鳥島・近海・石博 | 56 |
| 文部省 | * | 品目別大号料金(総合研究会) | 2.1 | 1 | 0.1 | 1 | | | 鴨文鳥島・近海 | 61 |
| 農 | * | (今治市近海) | 0.3 | 0.1 | | 0.2 | | | 鴨文鳥島・近海 | 61 |
| 事 | * | 品目別大号料金(漁業用具等) | 41 | 26 | | 3 | | 10 | 鴨文鳥島・若狭 | 61 |
| | * | (事務用木製品) | | | | | | | | |
| | * | 品目別大号料金(漁業用具等) | 16 | 15 | 1 | | | | 鴨文鳥島・近海 | |
| | * | 品目別大号料金(漁業用具等) | 17 | 15 | 2 | | | | 鴨文鳥島・近海 | |
| 農 | * | 品目別大号料金(漁業用具等) | 2.1 | 2 | 0.1 | | | | 鴨文鳥島・近海 | |
| 農 | * | 品目別大号料金(漁業用具等) | 9 | 8 | | | | 1 | 鴨文鳥島・若狭・中津 | 55 |
| 農 | * | 品目別大号料金(漁業用具等) | 2.1 | 2 | | | 0.1 | | 中津・若狭 | 55 |
| 医療・保育 | 鷹取・黒潮海 | | 1 | 1 | | | | | 鴨文鳥島・中津 | 5 |
| 教育 | * | 津島鳥・貝見半島 | 1 | 0.7 | 0.5 | | | | 鴨文鳥島・赤穂前島 | * |
| 大自 | * | 研究観 | | | | | | | 鴨文鳥島・赤穂前島 | |
| 市 | * | 自然科学研究科付属 | 1 | 1 | | | | | 鴨文島・中津 | 6 |
| 理 | * | 津島鳥・久日人帶島(生息) | 1 | 1 | | | | | 1・近海 | * |
| 政 | * | 津島鳥・赤穂前島 | 0.3 | 0.3 | | | | | 鴨文・赤穂 | * |
| 政 | * | 津島鳥・赤穂前島 | 0.3 | 0.2 | | | | | 鴨文・赤穂・中・古伊 | * |
| 政 | * | 津島鳥・学生会館附 | 0.4 | 0.2 | | | 0.2 | 小豆 | * | |
| 教育 | 試験・施設 | 津島鳥・身障者用ニレーバー | 0.3 | 0.3 | | | | 鴨文 | * | |
| 國 | * | 津島鳥 | 0.8 | 0.8 | | | | 古瀬・才祇 | * | |
| 学年 | * | 津島鳥・学生会館用ガソリン | 0.4 | 0.4 | | | | 鴨文・才祇 | 18 | |
| 資料 | * | 津島鳥・資源生息地会館付 | 0.1 | 0.1 | | | | 小豆 | * | |
| ア | * | 津島鳥・アソシエーションセンター | 1 | 1 | | | | 中津・赤穂 | * | |
| 事 | * | 津島鳥・施設付属建物 | 0.5 | 0.5 | | | | 赤穂?・中津 | * | |
| 農 | * | 津島鳥・動物糞便施設 | 0.1 | 0.1 | | | | 鴨文?・赤穂 | 33 | |
| 施 | * | 津島鳥・環境管理工場 | 0.1 | 0.1 | | | | 中津 | 33 | |
| 一 | * | 津島鳥・津島鳥リバーフロント | 1 | 1 | | | | 津島 | 33 | |
| 今 | * | 津島鳥・システム・学習機 | 0.1 | 0.1 | | | | 津島 | 33 | |
| 立会 | * | 津島鳥・シスマム | 2 | 2 | | | | 今治 | 33 | |
| * | * | 津島鳥 | 1 | 1 | | | | 今治 | 33 | |
| * | * | 津島鳥 | 1 | 1 | | | | 今治 | 33 | |
| * | * | 津島鳥 | 0.5 | 0.5 | | | | 今治 | 33 | |
| * | * | 津島鳥 | 0.5 | 0.5 | | | | 今治 | 33 | |
| 公 | * | 津島鳥・赤穂・本島 | 0.3 | 0.3 | | | | 今治 | 33 | |
| 公 | * | 津島鳥・赤穂・本島 | 0.3 | 0.3 | | | | 今治 | 33 | |
| * | * | 99年度 | 0.3 | 0.3 | | | | 今治 | 33 | |
| * | * | 99年度 | 0.8 | 0.8 | | | | 今治 | 33 | |
| * | * | 99年度 | 3 | 3 | | | | 今治 | 33 | |
| * | * | 99年度 | 8.5 | 2.3 | 6 | | | 津島 | 48 | |
| | | 総額数 | 2091.9 | 1882.3 | 67.1 | 450.2 | 25 | 15.1 | 253.2 | 4 |

*木炭・精炭・ナスカルについて、資料が難しくなつて、特に数量が形態が複雑であるため、算出の仕方が複雑であることを示す。

付表4 埋蔵文化財調査室刊行物

| 番号 | 名 | 日 | 発行年月日 |
|----|------------------------|---|----------|
| 1 | 岡山大学附属内連跡調査報告書。1983年度 | | 1985年3月 |
| 2 | 岡山大学附属内連跡調査報告書2。1984年度 | | 1985年3月 |
| 3 | 岡山大学附属内連跡調査報告書3。1985年度 | | 1985年5月 |
| 4 | 岡山大学附属内連跡調査報告書4。1986年度 | | 1986年3月 |
| 5 | 岡山大学附属内連跡調査報告書5。1987年度 | | 1987年3月 |
| 6 | 岡山大学附属内連跡調査報告書6。1988年度 | | 1987年10月 |

付表5 埋蔵文化財調査研究センター刊行物

| 番号 | 名 | 日 | 発行年月日 |
|----|---------------------------------|---|----------|
| 7 | 瀬戸遺跡1 岡山大学附属内連跡調査報告書第1号 | | 1985年3月 |
| 8 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第2号。1987年度 | | 1988年10月 |
| 9 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第3号。1988年度 | | 1989年10月 |
| 10 | 瀬戸遺跡2 岡山大学附属内連跡調査報告書第4号 | | 1990年1月 |
| 11 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第5号。1988年度 | | 1989年10月 |
| 12 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第6号。1989年度 | | 1989年8月 |
| 13 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第7号。1990年度 | | 1990年2月 |
| 14 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第8号。1989年度 | | 1990年11月 |
| 15 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第9号。1990年 | | 1990年7月 |
| 16 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第10号。1990年 | | 1991年3月 |
| 17 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第11号。1991年 | | 1991年8月 |
| 18 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第12号。1990年 | | 1991年12月 |
| 19 | 瀬戸南遺跡3 岡山大学附属内連跡調査報告書第1号 | | 1992年3月 |
| 20 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第2号。1992年 | | 1992年3月 |
| 21 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第3号。1992年 | | 1992年12月 |
| 22 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第4号。1993年 | | 1993年8月 |
| 23 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第5号。1993年 | | 1993年3月 |
| 24 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第6号。1993年 | | 1993年3月 |
| 25 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第7号。1993年 | | 1993年2月 |
| 26 | 瀬戸南遺跡4 岡山大学附属内連跡調査報告書第8号 | | 1993年3月 |
| 27 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第9号。1993年 | | 1993年12月 |
| 28 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第10号。1994年 | | 1994年3月 |
| 29 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第11号。1994年 | | 1994年4月 |
| 30 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第12号。1995年 | | 1995年2月 |
| 31 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第13号。1995年 | | 1995年3月 |
| 32 | 寺山遺跡5 岡山大学附属内連跡調査報告書第14号 | | 1995年3月 |
| 33 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第15号。1996年 | | 1996年12月 |
| 34 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第16号。1996年 | | 1997年10月 |
| 35 | 寺山遺跡6 岡山大学附属内連跡調査報告書第17号 | | 1996年12月 |
| 36 | 寺山遺跡7 岡山大学附属内連跡調査報告書第18号 | | 1997年2月 |
| 37 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第19号。1997年 | | 1998年3月 |
| 38 | 寺山遺跡8 岡山大学附属内連跡調査報告書第20号 | | 1998年10月 |
| 39 | 寺山遺跡9 岡山大学附属内連跡調査報告書第21号 | | 1999年1月 |
| 40 | 寺山遺跡10 岡山大学附属内連跡調査報告書第22号 | | 1999年3月 |
| 41 | 寺山遺跡11 岡山大学附属内連跡調査報告書第23号 | | 1999年9月 |
| 42 | 寺山遺跡12 岡山大学附属内連跡調査報告書第24号 | | 1999年11月 |
| 43 | 今、みがみる古事記 岡山大学附属内連跡調査研究センターの20年 | | 1997年1月 |
| 44 | 吉田日光遺跡Ⅱ 岡山大学附属内連跡調査報告書第1号 | | 1997年12月 |
| 45 | 吉田日光遺跡Ⅲ 岡山大学附属内連跡調査報告書第14号 | | 1998年3月 |
| 46 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第15号。1998年 | | 1998年3月 |
| 47 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第16号。1998年 | | 1998年3月 |
| 48 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第17号。1998年 | | 1998年3月 |
| 49 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第18号。1998年 | | 1998年10月 |
| 50 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第19号。1999年 | | 1999年1月 |
| 51 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第20号。1999年 | | 1999年3月 |
| 52 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第21号。2000年 | | 2000年5月 |
| 53 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第22号。2000年 | | 2000年5月 |
| 54 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第23号。2000年 | | 2000年1月 |
| 55 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第24号。2000年 | | 2000年3月 |
| 56 | 西ノ瀬戸遺跡 岡山大学附属内連跡調査報告書第41号 | | 2000年3月 |
| 57 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第42号。2000年 | | 2000年8月 |
| 58 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第43号。2000年 | | 2000年9月 |
| 59 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第44号。2000年 | | 2000年12月 |
| 60 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第45号。2001年 | | 2001年3月 |
| 61 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第46号。2001年 | | 2001年5月 |
| 62 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第47号。2001年 | | 2001年10月 |
| 63 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第48号。2002年 | | 2002年3月 |
| 64 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第49号。2002年 | | 2002年3月 |
| 65 | 津山城下遺跡 岡山大学附属内連跡調査報告書第6号 | | 2002年3月 |
| 66 | 津山城下遺跡 岡山大学附属内連跡調査報告書第7号 | | 2002年3月 |
| 67 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第8号。2002年 | | 2002年3月 |
| 68 | 岡山大学附属内連跡調査報告書第9号。2002年 | | 2002年3月 |

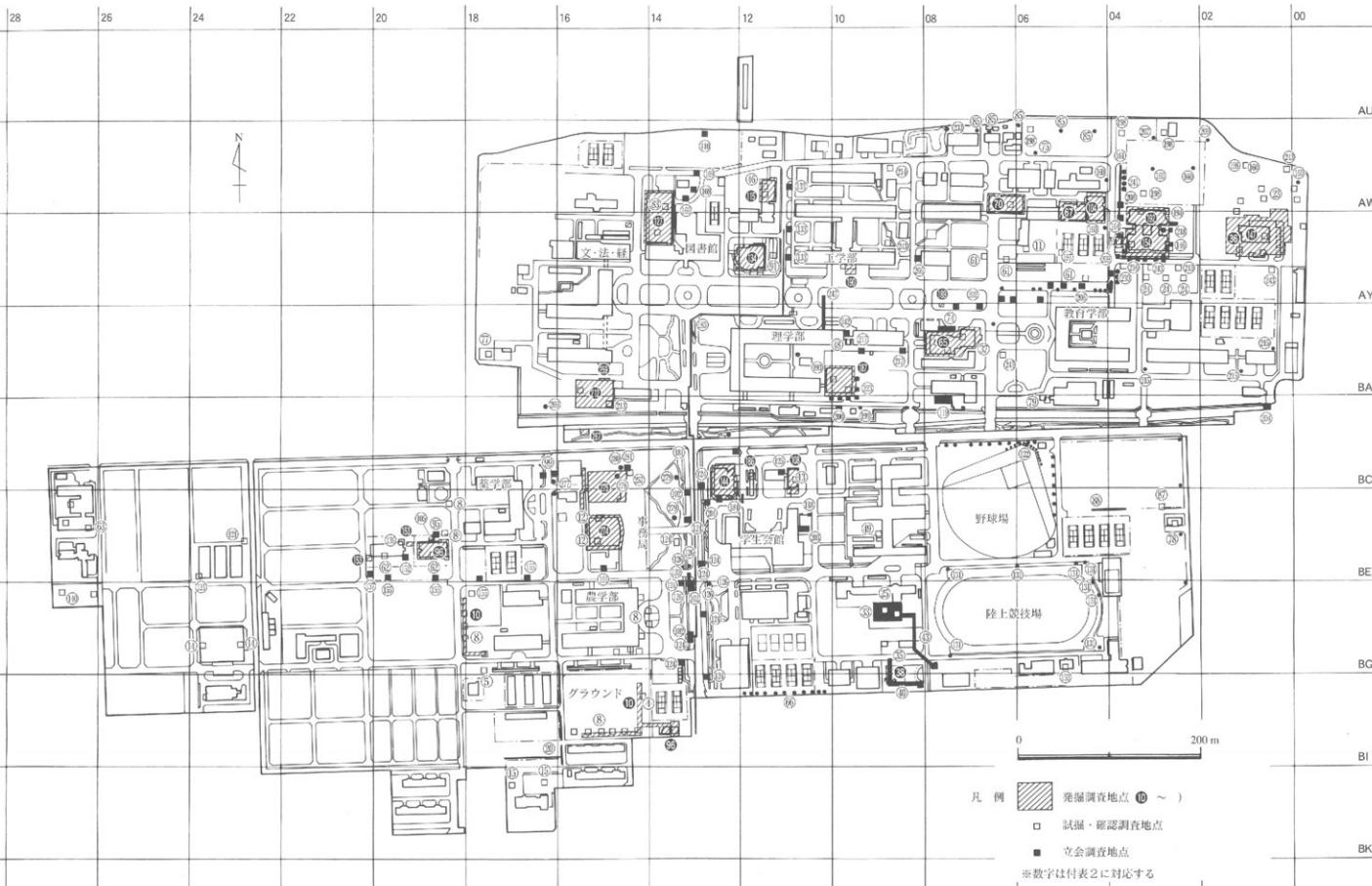
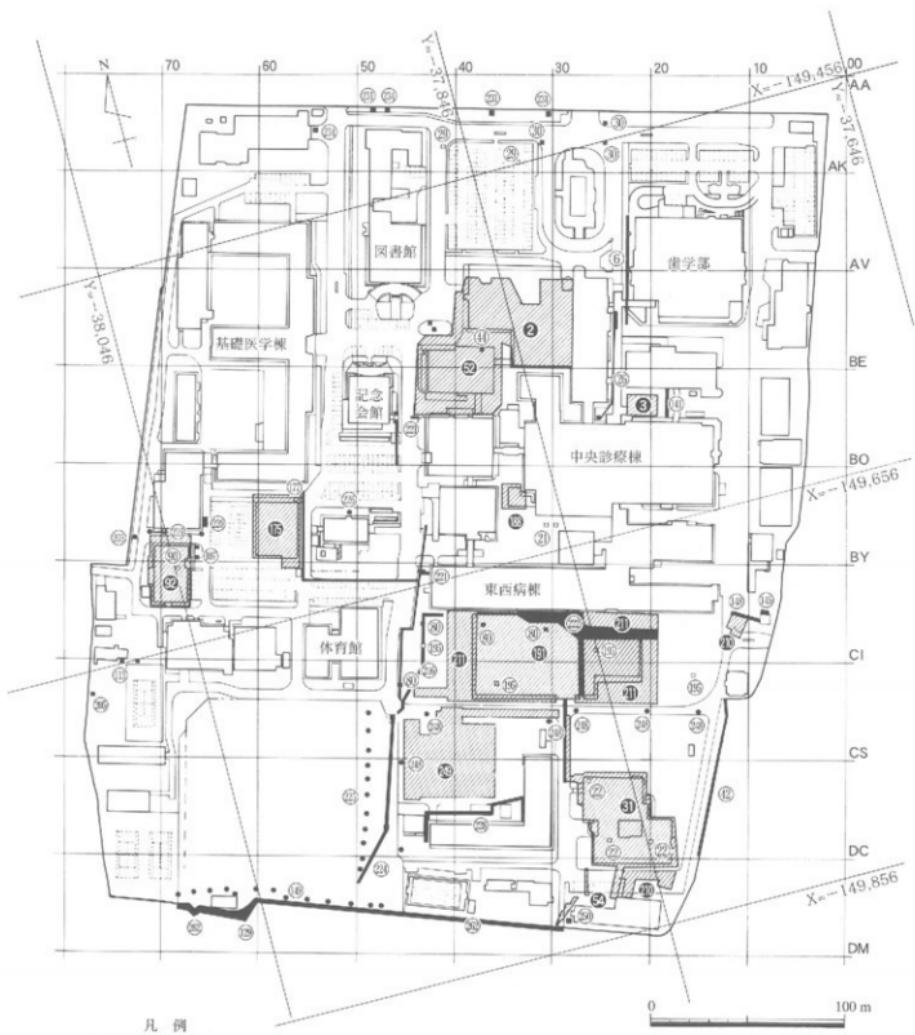


図46 2001年度までの調査地点（1）津島地区（縮尺1/4,000）



凡例
■ 調査調査 (② ~)

□ 確認調査

■ ● 立会調査

※数字は付表2に対応する

図47 2001年度までの調査 (2) 廉田地区 (縮尺 1/2500)

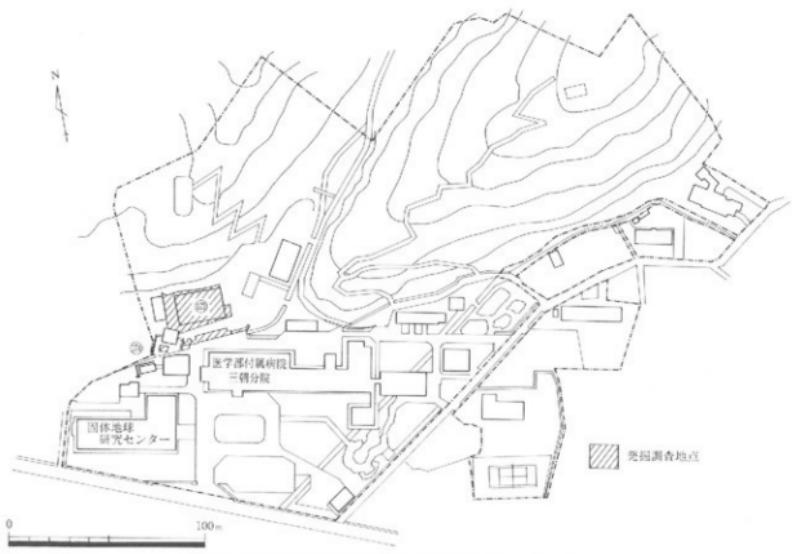


図48 1998年度までの調査地点 三朝地区 (縮尺 1/2,500)

Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University

Printed in Okayama, Japan

2004年2月27日 発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要
2002

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山市津島中3丁目1番1号

(086) 251-7290

印刷 西日本法規出版株式会社



BULLETIN of
Archaeological Research Center
Okayama University
2002

Archaeological Research Center, Okayama University
3-1-1 Tsushima-Naka Okayama-city, 700-8530 Japan
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>